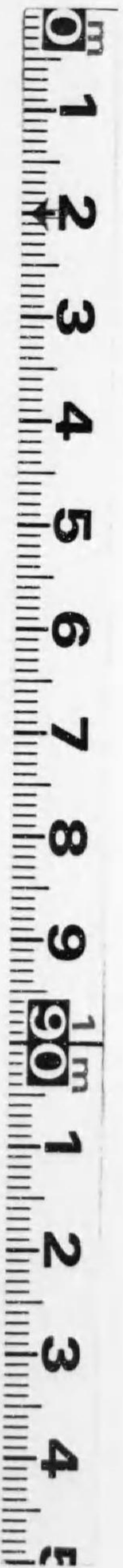


506  
211



始



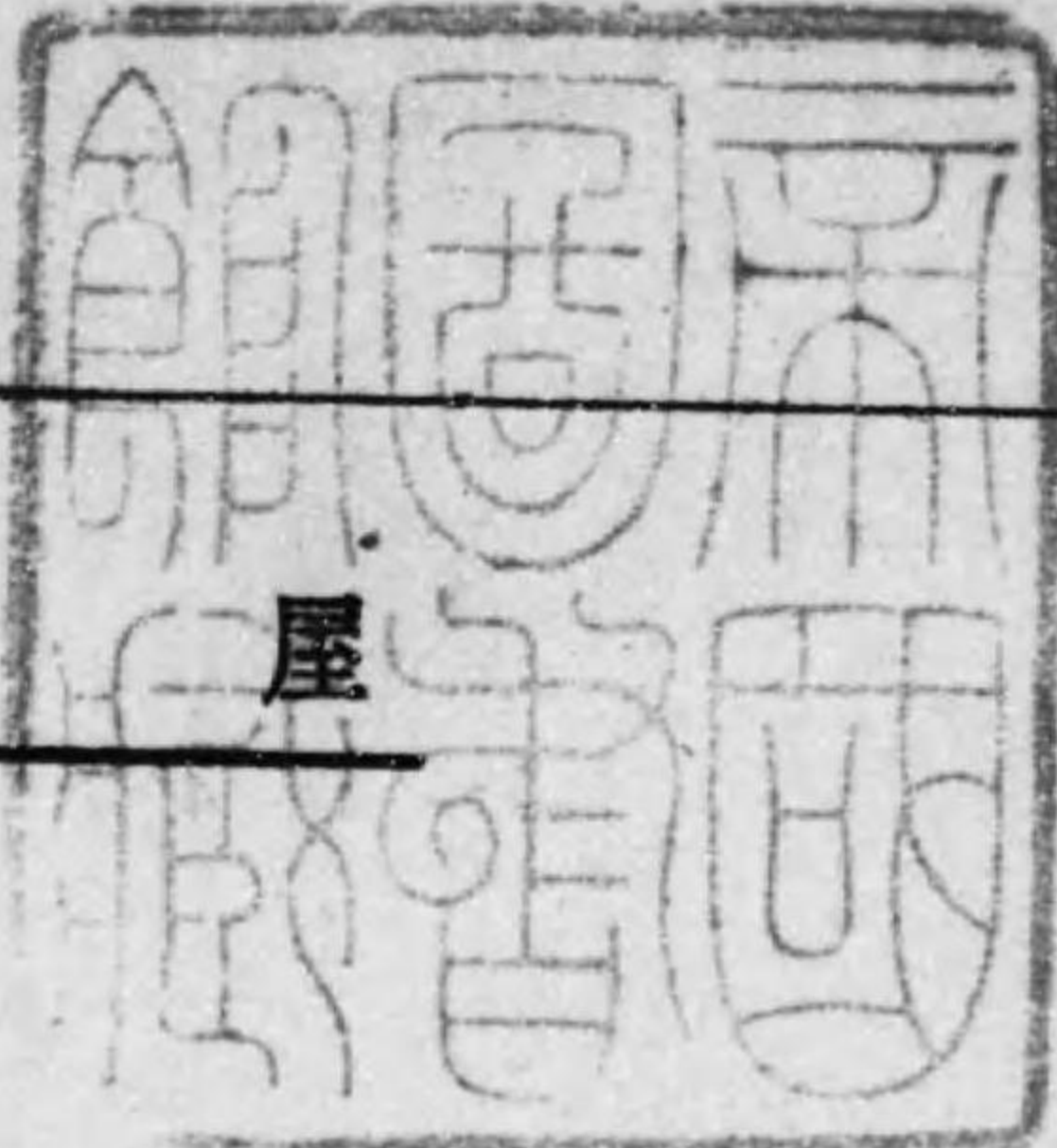
6  
コ-3630

小  
屋

冬夏社蔵版

ブラスコ、イバナス作  
小野浩譯

506-211



小屋

ブラスコ、イパネス作  
小野浩 譯

大正  
11. 8. 28  
内交

### 解説二二三

- 一、ギンセント・プラスコ・イバネズ。——スペインの現代作家。今年五十六歳。
- 二、「黙示録の四騎士」以後、全世界に亘つて最も廣く讀まれつゝある作家の一人。
- 三、本書「小屋」は初期一八九九年の作。
- 一、歐洲大戦を題材とした「黙示録の四騎士」が、人生に對して捧げられたものとするれば、「小屋」は藝術に對して捧げられたものと言ひ得る。
- 一、イバネズの作品に關する挿話の一つ。——或アメリカの大學教授が、イバネズをマドリッドに訪問した時、二人でスペイン名物の闘牛場に見物に赴いた。イバネズは少年時代から闘牛に對して特別の興味を感じてゐたが、その教授も、眼鏡の上に眉をしかめながら、非常に緊張した面持で、場内の光景を瞞めてゐた。そして時々拍手して「これは素的だ」など叫んでゐた。が、戸外に出ると彼はイバネズに向つてかう言つた。「非常に面白い。然し少し單純

だ。あゝいふ風にやらずに、六匹の牛を一時に放して、同時にすべてを殺しち、ふ譯に行かないものかね。さうすれば、時間も少なくて済むし、見物の興奮も、どんなに強いか知れやしない。」

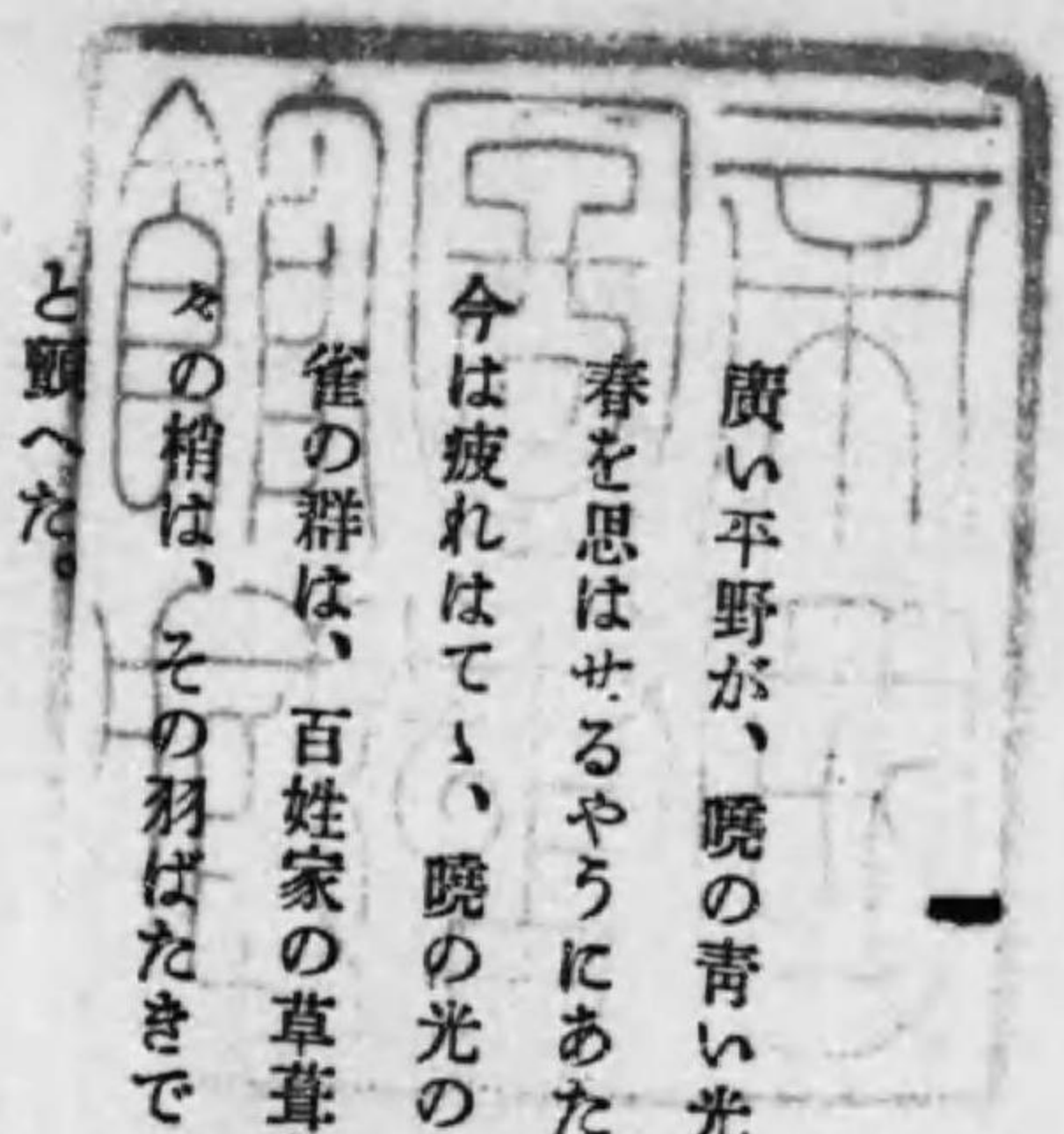
——イバネズの商品には、如何なる場合にも、同時に六匹の猛牛が飛び出すのである。

以上

十一年七月

譯者

2



廣い平野が、暁の青い光り、海の方にあらはれた廣い帯のやうな光りの下に擴がつてゐた。春を思はせるやうにあたりの空氣の匂ふこの秋の夜を、その歌で賑はしてゐた名残りの鶯も、

今は疲れはて、暁の光のその眩しい反射に傷ついたかのように、最後の歌を轉つた。雀の群は、百姓家の草葺きの軒先を追はれた腕白な子供たちのやうに飛び立つた。そして、樹々の梢は、その羽ばたきで一切のものを揺り動かすこの空の宿なしの攻撃を先づ受けてぶるくと顛へた。

夜を籠めてゐた物音はだん／＼に消えて行つた。堀割の水の流れも、竹籜のそよぎも、番犬の吠聲も。

フェルタ（耕作地——譯者）は目覺めて、その欠伸はだん／＼に騒がしくなつてゐた。鶏の鳴聲が農家から農家に傳はり、村の鐘はあはたゞしい響をあげてそれに答へた。それは、遙か青く

霧につままれたヴァレンシアの塔から流れてくる最初の彌撒の鐘だつた。檻からは、いろんな家畜の、不調和な合奏が聞えてくる、——馬の嘶く聲、やさしい牛の唸る聲、鶏のこつ／＼といふ聲、羊のみい／＼と鳴く聲、豚のぶう／＼泣く聲……すべては、曉の手に先づ抱かれたことを感じながら、畑地に長く伸びたり横に這つたりした樹々の鋭い香氣に浸されてゐる家畜たちの騒がしい目覚めだつた。

あたりは光りに充ち／＼て來た。影は、簇葉の鮮やかな皺と茂みとに吸ひ込まれたかのやうに消えてしまつた。そして、朝霧のなかに、濕り氣を帯びて輝く桑の列、揺れる竹籜の緑、大きな緑色のハンカチのやうな庭樹の四角な床、丹念に耕やされた赤い土地、などが一刻々々にくつきりと鮮やかになつて來た。

大通りに沿つては蟻の行列のやうにながつて、皆町の方に向つて行く黒いうごめく車が、きし／＼と音を立てゝゐた。ヴェガ(スペインの低濕地——譯者)の端からは、のんきな唄と車輪のきしむ音が聞えて、それが家畜を勵ます啾鳴り聲のために途絶えたりした。そして時々いかにも朗らかな夜明けらしく、言はゞ、曉と同時に自分の身に降りかゝつてくる苦しい勞役に反抗する

驢馬の恐ろしい叫びのために、空氣はきれ／＼に裂かれるやうだつた。

堀割に沿つては、薔薇水晶の澄み切つた敷物が、鴨のあはたゞしい水掻きと蛙を黙らせるやうな羽ばたきとのために亂された。彼等は象牙のガリイ船のやうに、その蛇のやうに曲つた不思議な船首のやうな頸を振り動かしながら進んで行つた。

平野は全く光りに包まれてしまつて、生活は農家の内部にまで行き届いた。

戸は、その開けられる時に、きし／＼と鳴つた。葡萄園亭の下に白い人影が見えて、目を覺まし歩き出した。手を頭のうしろに組んであかるい地平線の方に眼をやつた。

戸を開け放されたまゝの厨舎からは、乳牛や山羊や車を曳く小馬などの群が吐き出された。みんな町に行くことになつてゐた。往來との境をした小さい樹々の仕切りの背後から、牛の鈴がりん／＼と聞えた。その氣持のいゝ明るい音に交つて鋭いアルレ、アカ!(起きろ!)の意——譯者)と頑固な動物を叱る聲が響きわたつた。

農家の入口では、町に行く者と畑に残つて仕事をする者とが挨拶を交してゐた。

お早う!

お天氣で結構だな!

ムール人の血をその脈に傳へてゐて、嚴肅な態度でなければ神の名を口にしない彼等田舎人は鹿つめらしくこの挨拶を交す。そして通り掛る者が知らない人間ならば、それきり又黙つてしまふが、知つた人間だと、家庭用の、或は女房のための小買物を、ヴァレンシアでして來ることを頼まれるのであつた。

夜は全く明けはなれてしまつた。

空氣はもはや、夜を通して濕つた畑地と騒がしい堀割とから立ち上るほんのりした靄を消してしまつた。太陽がすつかり姿を現した。薔薇色の畔には、この一日生きのびたことを喜んで雲雀が飛びまはり、意地の悪い雀は、まだ閉された窓にとまつて、他人の費用で食つてゐる放浪者の鋭い叫びを擧げながら、その窓枠を、こつくとつゝいた。

「起きろ、怠け者! 畑に行つて働け。それで俺たちが食つて行けるんだ!」

近所ではビメントオとして知られてゐるトニの妻、ベベタは今そのバラツカ(小屋——譯者)に這入つたばかりだつた。彼女は元氣のいゝ女で、まだ若いのに貧血のために顔色がよくなかつ

たけれど、それでもフェルタ中で一番よく働く女だつた。

夜の明ける頃、もう彼女は市場から歸つてゐた。彼女は三時に起きて、前の晩に夫のトニが集めて置いた野菜の籠を背負ひ、こんなにも働かねばならぬせち、辛い暮しを呪ひながら小路を手探りして歩き、フェルタ生れの娘のやうに自分自身を、ヴァレンシアへ行く闇路を案内するのだつた。

その間に、彼女にさうした苦勞を掛けるのん氣者の亭主は、矢張り暖い寢室の中で、結婚毛布にくるまつたまま、鼾をかき續けてゐた。

野菜を買ふ卸商人たちは、夜の明けぬ頃に、もうヴァレンシアの市場に姿を見せるこの女をよく知つてゐた。彼女は持つて來た籠の真中にうづくまつて、うすい糸目のあらはになつた肩掛の下で顛へながら、自分でも氣づかない羨ましさを以て、朝の寒さを凌ぐために咖啡を啜つてゐる人たちの方を眺めた。彼女はその複雑な計算の中で、トニを養ひ家を切り廻して行くために當てにして來たゞけの金が、受取れゝばいゝがと思ひながら、おとなしく、動物のやうに待つてゐた。

野菜を賣つてしまふと彼女は家に歸つて來た。途中の時間を少くするために駈けづめに駈けて

歸つた。

彼女は第二回目の商賣を始めた。——野菜の次には牛乳があるのだつた。それで、ペベタは赤い牛を一頭、頸輪を引つ張つて又町に引き返して行つた。ふざけ好きの小牛が一匹、その尾のうしろから、惚れた召使か何かのやうに縦いて来る。ペベタは、片手に小さな鞭を、他の片手に客のためにはかる度盛のついたコップを持つてゐた。

親牛は赤い色をしてゐるのであかと呼ばれてゐたが、朝の冷たさを感じて、ゆつくりと鳴きながら、その粗末な麻の覆布の下にぶる／＼と身體を顫はした。彼女は潤んだ眼をくるりと向けて黒い厩舎と重い空氣とで以てうしろに残つてゐるバラツカを見返した。そして、まだ足りない烈しい睡氣を感じて匂はしい藁のことを考へた。

その内に、ペベタは彼女に鞭を加へて勵ました。——非常におそくなつた。お客がぶつ／＼言つてるだらう。そして親牛と小牛とは深い轍のためにぬかるみ凸凹のついたアルボラヤの道の真中を、とつと／＼急いで歩いた。

坂道では澤山の煙草賣りの娘や製絹工場の職工などの列と出會つた。彼等は皆片手に籠細工の

靴を持ち、他の片手を大きく振つてゐた。フェルタ中の處女が、そのスカートをひらめかして、粗野な純潔の目覺めを後に残しながら、この道を工場の方へ行くのだつた。

神の祝福は、地上のすべてにあまねき渡つた。太陽は、地平線をかくした樹々や家並のうしろから、大きな赤いウエーフェア（菓子の名——譯者）のやうに昇つて眩しい金色の針を迸しらせた。背後の山々や町の塔は薔薇色に染められ、空に漂ふ小さな雲は眞紅の絹のやうになつて行き道を限る堀割と池とは燃える魚が充ちたやうに見える。箒の音、瀬戸物のぶつかる音、そして朝の洗ひもの／＼音一切がバラツカの中から聞えて來た。

女たちは洗濯する衣類を籠に詰めて池のほとりにうづくまつた。黒い兎が狡猾な微笑を浮べて小路を飛び廻つた。その飛ぶ時に、一部分尾の方に喰ひ込んでゐる赤味を帯びた部分を見せながら。鶏は赤い、怒りに燃えるやうな眼をして、傍の牝鶏と一緒に赤い肥料の積み重ねた上に昇つていらだ／＼しい鳴聲を擧げた。

ペベタは毎日見つけてゐるこの夜明けを忘れがちになつて道を急いだ。胃の中が空つぽになつて手も足も痛み、見すばらしい着物は汗のためにぐつしよりになつた。その汗は血世の悪い彼女



の特徴で、數週間、時々自然の法則に反して滲み出すのだつた。

ヴ・レンシアに這入る勞働者の群は、橋といふ橋にぎつしり詰つてゐた。ベータは、小さな辨當箱を肩に掛けて町端れから來た勞働者を追ひ越して、入市税の受取を買ふために立ち止まつた——僅か數個の銅貨ではあつたが、それは毎日彼女の心の悲しみを新たにした。そしてひっそりした街を歩いて行つた。うとくと眠つた町の人々に、青々した牧場と田園的な風景とを夢見させるやうなあかの鳴聲——その單調な牧歌のやうな顫律が、この街の静けさを破つた。

ベータの顧客は町中至るところにあつた。彼女は街の入り組んだ道を行つて閉ざされた戸口に立ち止まつた。或ところでは一度敲き、又或ところでは三度も四度も繰り返して敲きながら、何時も、その貧弱な平たい胸から出るものとは思へない程の甲高い聲を張り絞つた。

La Heet!

すると、寝亂れ髪の、眼の窪んだ女中がスリツバを穿いて、手に壺をさげ、牛乳を受け取るために降りて來る。でなければ、年寄つた門番の女が、彌撒に行く時着た外套を着流したまゝ出て來るのだつた。

八時になつて牛乳はお顧客全體に配つてしまつた。そしてベータは魚屋街の近所に來た。そこでも用があるので、このみすばらしい百姓女は元氣よく、その時刻に死んだやうな汚い小道を突き切つて行つた。彼女は絶えず或不安を一番に感じた、——微妙な胃の本能的な嫌厭を感じた。が、彼女の心、つまり、不遇ではあるけれども尊敬すべき女の心がそれに打ち克つたので、彼女は或誇りがな満足——貧しいために虐げられてはゐても他人よりは優れてゐると思ひ返して自ら慰めるつゝ、美しい女の誇り——を以て歩いて行つた。

閉ぢてひっそりした家からは、安つばい騒がしい無恥な人々の呼吸と、熱つばい腐つた肉の臭氣とが入り交つて溢れてゐた。そして戸の隙間からは、野獸のやうな抱愛と、猥らな酔ひ痴れた慾望との夜を過した後の重い眠りの喘ぎと、荒々しい息とが洩れて來るやうな氣がした。

ベータは誰か自分と呼ぶのを聞いた。或狭い階段の入口に、がつしりした少女が立つて彼女に合圖をしてゐた。その女は醜い、たゞ若いといふ以外には何の取柄もない女だつた。而もその若さも最う過ぎつゝあつた。眼はしよぼ／＼して、髪を小さく束ね、頬に昨夜の臙脂の跡を残してゐるその容子は、道化——無道化の顔に描かれた赤い繪具の拙い漫畫のやうに見えた。

百姓女は、その女と自分との差をはつきりさせるために、誇りと輕蔑との掣め顔をして唇を引き締めた。そして女から渡された壺に、あかの乳から牛乳を絞りはじめた。が、片方の女は百姓女から眼を離さないでゐた。

「ペペタ——」

女は、それが本當に彼女かどうかはつきりしないらしく、ためらふ聲でかう言つた。

ペペタは顔を擧げた。——彼女は初めて少女の顔を見守つた。そして同じやうに不審さうだつた。

「ロザリオ、——ぢやないの？」

さうだ、それに相違なかつた。彼女は悲しさに頷いた。ペペタは忽ち驚きを示した。彼女が此處にゐるとはあの！名譽ある兩親を持つて生れた令嬢が！まあ、何といふことだらう！

娼婦は、その職業的の習慣から、蔑さむやうな百姓女の驚きを、皮肉な微笑と懷疑的な表情とで迎へようとした。それは人生の秘密に這入つて而も何事をも信じないものゝ表情だつた。が、ペペタの澄んだ瞳は少女にとつて恥しいらしく、彼女は泣き出すばかりに首をつなだれてしまつた。

否、彼女が悪いのではなかつた。彼女は工場で働きもし女中をもしてゐた。然し遂に、飢ゑ疲れた彼女の姉が手本を作つて見せたのだ。そして彼女は此處にゐて、時には愛撫を受け、時には鞭を受けながら、恐らく死ぬるまでは永久に止まつてゐるのだらう。それは自然の成り行きだつた。どんな家庭でも、母がなく父を失つたならば、この通りの結果にならないとは言へない。そのすべての原因は土地の支配者だつた。彼、ドン・サルヴェダアは、一切のことに責任がある。たしかに地獄で焚かれなければならぬ人間だ！あゝ泥棒！どんなに彼は一家を滅ぼしてしまつたことか！

ペペタは少女の怒りに共鳴するためその冷淡な態度と無口とを忘れた。それは眞實、全くの眞實だつた。あの貪慾な老ひぼれの守鏡奴が悪いのだ。フェルタの者は誰でも知つてゐる！神様私たちを救つて下さい！どんなに脆く一家は滅びてしまふことか！そして哀れな老バレットはあんなに幸福だつたのに！若し彼が一寸でも顔を擧げて、その娘たちを見たならば！……哀れな父親がケウタで二年前に死んだことはよく知られてゐる。そして母は可哀さうな寡婦となつて病院の床に病むやうな事になつてゐた。

十年の間に世界には何といふ變化が起るのだらう！當時、その家庭で女王のやうに振舞つてゐた彼女とその姉とが、かうした結果になることを誰が豫想しただらう？ あゝ主よ！ 吾々を不幸から救ひ給へ。

ロザリオはかうした話を交してゐる間中元氣になつてゐた。彼女はこの幼馴染によつて元氣をつけられたらしかつた。先まで死んだやうだつた眼は、過ぎ去つたことを思ひ出しては輝いた。そして、そのバラツカは？ その土地は？ 今だに皆寂れてゐる。そのことは彼女にとつて嬉しかつた。——粉微塵になつてしまふがよい。風に吹き飛ばされて朽ちてしまふがよい。——あの残忍なドン・サルヴェダアの子供たちが。

そのことだけが彼女を慰めるらしかつた。——彼女はビメントオや他の人達に感謝してゐた。何故といふに彼等は、向うの人たちが、當然彼女の家の所有たる土地に働きに来ることを防いでゐたからであつた。若し誰かゞその土地を横領しようと望んだなら、その人はどんな賠償を受けらるかを餘りによく知つてゐた。……づどん！小銃の爆聲がして、その首が飛んでしまふのだ。少女はだん／＼に大膽になり、その腫は恐ろしく輝いた。鞭打たれることに慣れた娼婦の受身

がちの胸の裡に、生れた時から戸のうしろに吊るされた小銃を見たり、お祭の日の弾丸の匂ひを喜んで呼吸したりしたフェルタの娘が甦つて來たのである。

ロザリオは悲しい過去の物語をした後、好奇心を起して、心易い人たちのことを訊き始めた。そして最後に、ペベタがひどく惨めに見えるといふことを注意した。哀れなものよ！ペベタが幸福でないことは一目見てわかつた。まだ若いのに、眼が無邪氣に澄み、處女のそのやうに臆病さうである以外には、その本當の年をあらはしてゐるものはなかつた。身體はたゞ骸骨のやうやうでしなく／＼した麥の穂の色を思はせる赤毛には、まだ三十にもならないといふに、白髪が交つてゐた。

ビメントオはどんな生活を彼女にさせてゐるのか？何時も彼は酔ひどれて仕事を嫌ふのではなにか？彼女は皆の忠告を聞かないで結婚して、それを自分で引き受けてゐた。彼は全く頑丈な男だつた。日曜日の夜、コバの居酒屋で彼がフェルタ中で一番悪い無頼漢を相手に骨牌をしてゐる時、皆が彼を恐れた。が、家では、手のつけられぬ夫たることを示すだけだつた。しかし、結局男は皆さうしたものである！恐らく彼女はそれを知らなかつたのだ！犬は皆世話する價值のない

ものなのだ！あゝ、哀れなベータがどんなに惨めに見えたことだらう！

狭い階段の下に、がみ／＼女の太い聲が雷の落ちたやうに響きわたつた。

「エリザ！直ぐに牛乳を持って御出で！旦那がお待ちかねだよ！」

ロザリオは狂つたやうに笑ひ出した。

「私は今はエリザつて言ふのよ。あんたは知らなかつたわね！」

名を變へることは、アングルシアン訛りで話すことと共に、彼女の職業に必要なことだつた。そして彼女は、おどけたやうに二階のがみ／＼女の聲を眞似し始めた。

然し彼女は調子づいてゐたけれども、急いで立ち去らうとしてゐた。その二階の人たちを恐れてゐたのだ。亂暴な聲の持主か、牛乳を欲しがつてゐる旦那か、彼女に、遅れたことの記念を呉れるからかも知れないから。それで彼女は、ベータに又何時か寄つてフェルタの消息を聞かしてくれと頼んでから、急いで階段をあがつて行つた。

あかの單調な鈴の音は、一時間以上もヴァレンシアの街々に聞えてゐた。萎んだ乳房は キヤベツの葉や廢物の粗末な食物から生ずる味のない乳を、最後の一滴まで絞られてしまつた。そし

てベータは愈々バラツカの方へ歸る仕度をした。

哀れな百姓女は悲しい物思ひに沈みながら歩いた。その邂逅は彼女に強い印象を與へた。彼女はそれが昨日起つたことのやうな、老バレットとその一家全體を呑み込んだ恐ろしい悲劇を思ひ出した。

その時以後、その先祖が百年以上を費して耕した土地は、大通りの端に棄て、顧みられなくなつた。

人氣ひとけのないバラツカは、だんだん、ぼろぼろに頽れ、その屋根を繕ふ者なく、壁穴に一握の土を塗る者がなかつた。

過ぎ又過ぎる十年の月日は、人々をして、この荒廢を見るに慣れしめてしまつた。彼等は、最早これにこれ以上の注意を拂はなかつた。ベータがそれを見てからでさへ、かなりの月日が経つてゐる。今では、たゞ、その父祖の憎惡を受け継いだ子供たちが、この見棄てられた土地の毒麻を踏み躪るのを楽しみにするばかりだつた。それは、このあばら家を揺り動かして試験するため（そのために閉ざされた戸の内部には大きな裂目が出来た。）又昔の葡萄園亭の下にある井戸を泥や

石で埋めるためだつた。

が、この朝、ベベタは、先刻の邂逅のために憑かれたやうになつて、その廢墟をたゞ眺めるだけでなく、もつとよく見ようとして大通りの端に立ち止まつた。

老パレットの土地、といふよりも、猶太人ドン・サルヴェダアとその破門された子孫との土地は、實に肥えよく耕され微笑してゐるフェルタの真中にある悲惨と放棄との膏地であつた。

荒廢の十年は土壤を堅くし、神が農夫を懲らすために造つた一切の寄生樹や葎麻は、その不毛の底から繁りに繁つた。曲りくねつた矮木の森は、變に青々としてゆらゆらする茂みとなつて、その土地を蔽うて擴がり、此處其處に、墓地か廢墟にでなければ生えないやうな、不思議な、珍しい花を交へてゐた。

此處、——その隠れ家の保證を得て繁茂したこの深い迷路の中には、忌はしい動物の一切が育ち繁殖して、近所の畑地にも飛び出した。波のやうな腰つきをした緑色の蜥蜴、金屬的に反射する甲を持つた甲蟲、短い毛むじやらの足をした蜘蛛、隣りの掘割に這り込む蛇さへも。彼等は、美しい耕地の中央に、特別の王國を成して榮え、互ひに食ひ合つてゐた。そして農夫たちに幾分

の損害を掛けられども、農夫は或畏敬の念を以てこれ等の動物を尊んだ。何故といふに、若し彼等がその呪はれた土地を相續したならば、エチプトの七つの疫病もフェルタに住む人々にとつては何でもないものと思はれただらうからである。

老パレットの土地は人間のために期待されたことはなかつた。より、忌はしいペストのやうな疫病でもその中に巢喰ふがいい。その方がより、いいのだ。

美しい平野の中央に目立つこの荒廢した土地は、緑色の天鵝絨の宮廷服についた汚點のやうに見えるが、その中に、バラツカが立つてゐた。と言ふよりも、崩れてゐたといふ方がいいかも知れない。その薬屋根は綻び、雨と風とに穴を穿たれた隙間から、内部の虫ばんだ木の骨組が見えてゐた。

雨に洗はれた壁は粘土をあらはに曝してゐた。非常に淡い色の斑點だけが、昔白塗だつたことを示してゐる。扉は下の方が鼠に嚙られてぼろぼろになり、端から端を貫いて長く長い裂目が走つてゐる。二つ三つの小窓は大きく破れて、片一方の蝶番にだらりと下り、西南風に身を委して曝され、一度大風が吹けば倒れてしまふ用意をしてゐる。

この廢墟は心を傷つけ胸を重くした。黄昏が迫つて來ると直ぐに、この見棄てられた小屋からは幽霊があらはれるやうな氣がする。その内部からは夜をつんさく暗殺された者の叫びが聞えるやうな氣がする。この雜草の茂みは、悲劇的な屍體の幾百を眼から遮るための屍衣かも知れないといふ氣がする。

恐ろしいのはこの荒廢した地のことを思ひ耽つてゐて囚はれる幻影である。そしてその陰氣な寂しさは周圍の畑地との對照に依つて一層鋭くされる。即ち周圍の畑地は赤くよく耕されて、野菜と小さな果樹とを持ち、秋になればその葉が黄色く透明になるのだつた。

小鳥さへもこの死の原からは逃げ去つた。それは恐らく伸びた雜草の下にうごめく恐ろしい虫類を恐れてか、それとも、荒廢の匂を嗅いだためであらう。

若し何かが破れた藁屋根の上に動いてゐたならば、それはたしかに、黒い不吉な翼を持つた鳥であるに相違ない。それは飛び立つ時に、樹々の嬉々とした囁きや面白さうな羽ばたきに沈黙を投げ掛けて、半リーグ（一リーグは約三哩——譯者）四方の雀が一匹として轉らぬかと思はれる程、フェルタ全體を死のやうな靜けさにしてしまふ鳥である。

ペータは自分の家の方への歸り道を歩きつづけてゐた、畑地を越えて稍々向うの樹木の間によく自分の家が見えた。が、彼女は大通りの峻しい端で、一杯に積荷した荷車を通すために立ちどまらなければならなかつた。それは町の方から來たものらしく、烈しくよろめきながら進んで來た。

それを見ると、彼女の女性的好奇心が湧き起つた。

それはよぼよぼの骨張つた小馬に曳かせた百姓のみすぼらしい荷車で、馬はその深い轍を背の高い男に助けられてゐた。男は傍に沿ひながら呶鳴つたり鞭を當てたりして馬を勵ましてゐた。

彼は勞働者のやうな装をしてゐた。が、頭のぐるりに結んだハンカチの冠り方、畝織木綿のズボン、その他一切の服装は、彼がフェルタから來た者でないことを證明してゐた。フェルタでは人間の裝飾がだんだんに町の流行の影響を受けて變つてゐたからである。男は何處か遠い部落の百姓だつた。——多分その州の中央あたりから來た者だらう。

車上に高く、横の柵よりも高くピラミット形に積み上げられたものは家庭用のごたごたした物で、家全體の引越しに相違なかつた。薄い薄團、かさかさとした藁の音、寝臺、フライ鍋、

釜、皿、籠など。——すべてが汚い、みじめなぼろぼろの荷車に積まれてゐる。言はば、絶望の夜逃げで、不面目がその踵について一家の背後から忍び歩いてゐるやうだつた。そして、この亂雑なごたごたの上には三人の子供が坐つて、互ひに抱き合ひ、初めて田舎を訪うた探險家のやうに、眼を睜つて畑地の向うを眺めてゐた。

車の後にくつついて、何か落ちはしないと仔細に見守りながら一人の女が、娘らしい弱さうな少女と一緒に従つてゐた。他の側には十一位の少年が、車が轍を喰ひ込んだ時に馬を助けながら歩いてゐた。その鹿つめらしい顔つきは悲惨な生存競争に慣れた子供らしく、同じ年頃の子供がまだ遊んでゐるのに、彼はもう大人になつてゐた。小犬が一匹汚れて喘ぎながら殿として連れられてゐた。

ベータは自分の牛の脇腹に凭れて、だんだん募つて来る好奇心に囚はれ、その行き過ぎるのを見守つてゐた。この哀れな人たちは何處に行くことが出来るのだらう？

その道はアルボラヤの分れ道に通じてゐるので、何處にも行けはしない。それは、恰もいろんなバラツカの入口に至る無數に分れた小路のために疲れでもしたかのやうに遠くで消えてしまつて行くのだつた。

てゐた。

然し彼女の好奇心は、豫想外にも満足された。まあ、どうしたといふのだらう！ その車は道を折れて木の幹と芝とで出来た小さな朽ちた橋を越えた。それは例の呪はれた土地へ行く橋なのだ。そして、今まで繁茂してゐた雑草を車輪に踏み躪りながら、老バレットの牧場を通つて進んで行くのだつた。

一家の者はうしろから蹤いて行つた。そのみじめな寂寞と荒廢とが彼等のためになされたかのやうな印象を、身振りや當惑した言葉に示しながら。が、矢張り眞直に荒廢した小屋の方へ正氣を失つた人のやうに進んで行つた。

ベータはそれ以上立つて見てゐなかつた、あはて、自分の家の方に駈け出した。少しでも早く着かうとして、親牛も小牛も放擲つてしまつた。牛は立派な安全な小屋を持つた、人間界の出來事に煩はされない動物のやうに、靜かにゆつくり、その道を歩き續けた。

ビメントオは、のん氣さうに煙草を吹かしながら、小屋の端に寝そべつて、鳥糞を塗つた三本の小さな竿に眼を注いでゐた。その竿は日を受けて光り、あたりには五六羽の小鳥が飛び廻つて

ゐる、——これがこの紳士の職業であつた。

彼は妻が脅へた眼をして、弱い心臓の呼吸を切らしながら駈け着けたのを見ると、よく聴かうとして姿勢を變へた。そして同時に、竿の傍に寄つてはいけなと注意した。

何が起つたのか？牛が盗まれたのか？

ベベタは、疲労と激動との間から、やつとの思ひで二つの連続した言葉を吐くことが出来た。

パレットの土地に……或家の者が皆して……働きに來ようとしてゐる。廢墟のパラツカ（小屋——譯者）に住むつもりなのだ。——自分はそれを自分の眼でたしかに見た！

ビメントオ、鳥糞の獵人、労働の敵、全社會の恐怖たるビメントオは、最早落ちついてはゐられなかつた。さうした意外の報告を聞いては大地主らしい印象的な重みを保つてゐるわけに行かなかつた。

Cordonsi

さうして一飛びに彼は重い男性的な身體を起して、それ以上の説明を聞かうともせず駈け出した。

妻は彼が畑地を越えて急ぐのを、呪はれた土地の隣りの竹藪に行き着くまで見守つてゐた。其處で彼は膝を突き、顔を前に突き出して、竹藪の向うを、伏兵したベドウイン（アフリカ沙漠地方に遊牧する人種名——譯者）のやうに窺ひながら腹這ひになつた。が、數分の後、彼は又駈け出して、直ぐに小路の迷路の中に姿を没してしまつた。その小路の一つ一つは違つたバラツカと中腰の人々が光りの當る毎にきらきらする大きな鐵の鋤を使つてゐる畑とに通じてゐた。

フェルタは、囁きと日光とに充ちて、微笑しながら、さらさらと音立てながら、朝日から反射する黄金の瀧の下にうつとりと横たはつてゐた。

然し間もなく、遠くから、叫ぶ聲、呼ぶ聲が入り交つて聞えて來た。その消息は畑から畑へと行き渡つた。高い叫びを以て、驚愕と憤怒との顔へを以て、それは、恰も一世紀間が経過したかのやうに、平野中に知れ渡つた。そしてその消息といふのは、アルゼリア人のガリイ船が、白い肉の積荷を求めようとして海岸に上陸しようとしてゐるといふのだつた。



老バレットは、收穫期になつて、彼の土地が區分されてゐるいろんな畑を眺めては誇らしく感じないではゐられなかつた。脊の高い小麦、羊毛のやうな絲の心しんを持つてゐる未だ開かないキャベツ、地面の高さまで緑色の背を見せたメロン、葉を半ば隠したパイメントオヤトマトオを眺めやる時、彼は地上の幸福を讃へると共に、この土地をフェルタ中の何處よりも立派なものにしようとして働いた先祖の努力を讃へてゐた。

此處には先祖すべての血が流れてゐた。バレットの五六代が、この同じ土地に働いてその生を過した。彼等はこれを耕し又耕して、滋味の減じないやうに注意し、鍬や鋤で梳いたり撫でたりした。一家の汗と血とが流れないところは、この畑中に一ヶ所としてなかつた。

この農夫は妻を非常に愛して、娘ばかり四人も生みながら、仕事の手助けになる息子を一人も生まなかつた愚かさをも別に咎めなかつた。彼はどの娘も同じやうに可愛がつた。娘たち、——神から下された天使たちは、家の戸口で歌つたり縫物をしたり、時には畑に出で、哀れな父親を

少し休ませたりして日々を過した。が、老バレットの最高の情熱は、その愛の中の愛は、土地に注がれてゐた。一家の沈黙した單調な歴史はその土地の上にこそ示されてゐた。

昔、ずつと昔、今は殆んど盲目になつてゐる老トムバが、アルボラヤに住む屠殺者の群を世話をし、フランシスコ教團を彷徨ひ、フランス人を射つた頃に、この土地はサン・ミグエル・ド・ロ・レイエの僧侶たちに屬してゐた。

彼等は人のいゝ健康な喋ることの好きな紳士で、その借地料を急いで集めようとはせず、若し夕方方の小屋を通りかゝる時、物惜みをしないお婆さんがチョコレートと深いコップと季節の果物の走りりとを御馳走でもすれば、それで満足するらしかつた。以前、ずつと以前、この土地全體の持主は死ぬる時に、その罪の弾丸をも領地の弾丸をも、社會の胸に向けて抜いた大地主だつた。然るに今、それは、ヴァレンシアの小さな干上つた老人ドン・サルヴェダア、——老バレットを、彼が夜の夢にも思はなかつた程、ひどい目に合した者の手に屬してゐる。

哀れな農夫は、その苦勞を家族の者に知らせなかつた。彼は潔癖な勇敢な男だつた。若し彼が日曜日、近所の者が皆集つてゐる時に一寸コバの居酒屋に行くとするれば、それは骨牌遊びを見る

ため、ピメントオヤその他の若い連中の馬鹿らしさと亂暴さを見て心から笑ふため、決して帳場に近づいて酒盃を買ふことをしなかつた。何時も財布は固く腰につけてゐた。そして酒を飲むことがあれば、それは勝つた者が皆を奢る時に限られてゐた。

彼は自分の苦勞を議論するのが嫌ひだつたので、何時も人のいゝ靜かな微笑を浮べてゐた。頭には、そのバレットといふ綽名を得たところの青い帽子を耳まで被つてゐた。(バレットの意味は底なしの圓い帽子の意。——譯者)

彼は朝から晩まで働いた。フェルタ中がまだ眠つてゐる頃に起きて、その土地を曉の薄明るい光の中で耕した。が、彼は絶えず益々、一人で働くことは不可能だと信じるやうになつた。

それは一人の仕事としては餘りに大きい重荷だつた。若し息子が一人でもあつたなら！彼は手傳を求めて召使を幾人か雇つた。ところが召使は物を盗むばかりで餘り働かなかつた。それで彼は日の照つてる間を厩舎で眠つてゐた彼等を驚かして解雇してしまつた。

先祖に對する尊敬に囚はれてゐたので、彼は、他人の手に一坪でも委す程なら寧ろこの土地で働き疲れて死ぬる方がましだつた。それで全部の仕事を一人で處理することが出来ない以上、そ

の肥沃な土地の半分を休ませて置くことにし、而も他の半分の耕作に依つて家族を養ひ且つ地主への支拂ひをしようと試みた。

生活に必要なものを充分に調べて、自分の活力の衰退に打ち克たうとすること、——これは絶望的な、頑強な、沈黙の戦ひであつた。

彼はたゞ一つの希望を持つてゐた。それは、小さな娘たちが知つてはならないといふこと、誰も彼女等に、父親に迫つた悩みと苦しみとをほのめかしてはならないといふこと、この家庭の神聖な喜び、四年續いて年々に生れた四人の娘の歌と笑ひとに依つて二六時中元氣づけられるその喜びが、破られてはならないといふことであつた。

そのうちに姉妹たちは既に、村の祭りなどに、新しい派手な絹ハンカチと、さらさらと鳴る鐵飾りのスカートとをつけて出掛けて行く時、フェルタの若者たちの注意を惹き始めてゐた。そして彼女等は夜明けに起き上つて、肌衣のまま、素足のまま、そつと降りたち、小さな窓の隙間から *albas* (曉のセレナードである。即ち夜明けに、戀人の窓下に唄ふ唄をいふ——譯者) を唄つて戀ひる男、或はギタアを弾いて慕ふ男を見下すのだつた。その間に一方では哀れな老バレットが

そ 計算を平均しようとして益々務め、その父親が一厘一厘と彼のために蓄へて残した金を一握り又一握りと引出した。そして足ることを知らず、彼から絞り取つて満足せず、不景氣、税の値上げ、借地料値上の必要のみを語る守錢奴のドン・サルヴェダアに向つて何にもならぬ哀願をしようを試みた。

ペレットは恐らくこれ以上に悪い地主は持たうも持てなかつたに相違ない。この地主はフェルタ中、何處に行つても嫌はれてゐた、何故といふに彼の所有ならぬ土地はこのあたりになかつたのだから、毎晩、彼は春でもみすぼらしい、乞食のやうな古い外套を着て、てくてくと借地人を訪問した。呪ふやうな敵意を持つた表情が彼の後を縦いて廻つた。それは二六時中、自分の財産と接してゐたい貪慾の執拗であつた。取引勘定中の高利貸の執拗であつた。

犬は彼を見ると遠くから吠へた。死そのものが近づくかのやうに。子供たちは彼を背後から眉をしかめて眺めた。男は苦しい辯解を避けるために姿を隠し、女は小屋の戸口で彼に會つて、眼を地に伏せ、哀訴するために用意した嘘を言つた。而も彼等は彼の威張り返つた脅しには涙を流して答へた。

社會的無賴漢としてのピメントオは、近所の者の悲惨を面白く感じたが、フェルタ中での義俠者たる彼は、何かを口の内で呟いた。それは後に彼を堀割の中にたたき込む約束らしかつた。が、守錢奴の犠牲者たちは、ドン・サルヴェダアの勢力を話し、彼は午前を法廷で過すので有力な友達を持つてゐると戒めて、ピメントオを思ひ止まらせた。かうなれば可哀さうなのは常に損をする者である。

彼の借地人の中で最も善良なのがペレットだつた。彼は非常な努力をして一文の負債をも残してゐなかつた。而も老守錢奴は、彼を他の借地に對する模範として擧げてさへゐながら、その彼に向つて極端に残酷に振舞つた。ペレットが非常に弱いのに乗じて彼は益々無理な要求をした。そして明らかに、彼は己れがその掠奪と壓制との本能全部を何等の恐れなしに行ふことの出来る人間を見出したことを嬉しく思つてゐた。

遂に彼は地代を上げた。ペレットは反抗して、その土地をフェルタ中で最上のものであるために働いた一家の功績を話す時には泣いた程だつた。が、ドン・サルヴェダアは折れなかつた。その土地が最上なのか？ それなら他人よりも餘計に地代を拂ふべきだ。さうしてペレットはその増加

を支拂つた。——恐らく彼は、次第に彼そのもの、生命を奪つて行くその土地を見棄てないうちに最後の一滴の血潮をも諦めてしまふやうな事になつたかも知れない。

たうとう苦しさを凌いで行く錢は少しもなくなつた。彼は畑から生じるもの以外に當てにすることが出来なくなつた。そして全く一人で、哀れなバレットは本當の状態を家族の誰にも知らせなかつた。妻や娘が餘り働き過ぎないやうにと頼む時には無理に笑つて見せながら、本當の狂人のやうに奮闘し續けた。

彼は眠らなかつた。彼には自分の野菜が近所のよりもゆつくり成長するやうに思はれた。彼は自分で、自分一人で全部の畑を耕作しなければならぬと決心した。夜も闇も、手探りながら働いた。少しでも脅かすやうな雲があると彼は顫へた。恐怖のために全く正氣を失ふ程だつた。やうした擧句、彼のやうな善良な尊敬すべき人間が、近所の人の不注意に乗じて、その灌溉用の水を盗んだ。

然し彼の一家が眼を瞑つておれば、近所の百姓は彼の境遇を了解して、その弱さに同情した。彼は身體の大きいお人好しで、徐々に彼を干乾しにする不快な守錢奴の前では大膽な顔を装ふこ

とを知らなかつたのである。

そしてこれは本當だつた。哀れな老人は熱狂した生活と狂氣した労働とに疲れて、骨と皮ばかりの骸骨のやうになり、眼の窪んだ八十翁のやうに腰がまがつてしまつた。その綽名を貰つたところの特長ある帽子は、最早耳の上には被れないで、彼が瘦せたために肩の方にだらりと下つた、丁度彼の生活の葬式に於ける消燈のやうに。

然し何よりも悪いことに、この溜らない過度の疲労も單に飽くことを知らないドン・サルヴェエダアの要求する半分を支拂ふに役立つだけであつた。彼の狂氣したやうな労働の結果は、來るのに遅くはなかつた。バレットの馬、長く苦しんだ馬、彼の狂ほしい勞役一切の友、——晝も夜も働き、野菜を積んだ車をヴァレンシアの市場に曳き、呼吸をする間もなく休む間もなく鋤に結びつけられて疲れ切つた馬は、その貧しい主人に少しの反抗でもするよりは寧ろ死なうといふ決心をした。

さうして實際哀れな農夫は自分がどうにもならなくなつたことを知つた。彼は絶望して、最早耕すことの出来なくなつた畑を眺めた。町の人々が、この哀れな農夫の、絶えざる貧困との戦ひ

絶えざる土地との戦ひに於て收穫されたその勞苦を少しも思ふことなく貪り食べるその野菜の列を喰めた。

然し、哀れな者を見棄てることのない天意は、ドン・サルヴェダアの口を通して彼に言葉を掛けた。神は悪から善を齎すことが屢々あるといふ世間の言葉を空しくなかつた。

足ることを知らぬ守銭奴、飽くことを知らぬ高利貸が、バレットの不幸を聞いて、感動したやうな、父親のやうな優しさを以て補助しようと申込んだのである。馬を新たに求めるには幾らあればいゝのか？ 五十弗でいゝのか？ さうして彼はバレットを助けて、今まで彼を輕蔑し彼のことを悪しざまに言つてゐた人々の憎しみが、どんなに間違つてゐたものであるかを證明した。

彼はバレットに金を貸した。然し、それには或證書の下に署名するといふ大した意味もない面倒な要求（事務は事務だから）があつた。そして證書には、利息、利息の堆積、負債の擔保が認められ、その擔保には、裝飾具、家具、檻の中の家畜をもこめて彼の小屋中の持物全部が記載されてあつた。

新しい丈夫な若い馬を手に入れて勇氣附いたバレットは、前以上の元氣を出して勞働に返つた

彼を押し潰し、又彼の努力が衰へるに比例して遂に彼を赤い屍衣のやうに蔽つてしまふまでは成長するらしいその土地の上に、自らを再び殺すために。

彼の畑から産出する物は全部、家族のために費消されて、ヴァレンシアの市場で取引する一握りの銅貨も瞬く間に無くなつた。彼はドン・サルヴェダアの貪慾を充たして行くことが出来なかつた。

負債と失敗とを恢復しようとする戦ひのために生じる老バレットの苦しみは、かくして彼の裡に、あらゆる種類の混亂した正義の觀念を、彼の粗野な理論を通して波立たしめるやうな或反抗の本能を湧き起さしめた。何故この土地は自分自身のものではないのだらうか？ 自分の先祖のすべてはその生をこの土地で過した。彼等は自分の家族の汗を撒いた。若し彼等がなかつたならばこの土地は、海岸の砂地と同じく不毛だつたに相違ないのだ。それに今、鋤を持つことも知らず生れてから働くために脊を曲げたこともないのに、此處を支配してゐるあの無情な老人が、自分に螺旋を當て、自分の「記念物」一切を以て滅ぼさうとしてゐるのだ。神よ！ 人間界のことはどんな風に定められてゐるのだらう！

が、かうした反抗はただ瞬間的に過ぎなかつた。労働者の諦めた柔順が彼に歸つて來た。彼の財産に對する傳統的な、迷信的な尊敬と共に、彼は働かねばならない、誠實でなければならなかつた。

人間の義務を拂ひ得ないことをあらゆる不名譽中の最大のものとして考へてゐる哀れな老人は、だん／＼に弱くなり瘦せて來ながら、又日増しに精力の衰へを感じながら、その仕事に返つた。その状態を長く續けて行くことは出來ないと知りながらも、彼は、その祖先からの土地が一握りでも放棄されさうになるのが溜らなく腹立たしかつた。

クリスマスが來た時、彼はドン・サルヴェダアに、期限の來た半年分の借地料のほんの一部分しか拂ふことが出來なかつた。聖ヨハネ祭日が來た時、彼は、一サンチーム（一フランの百分の一——譯者）もなかつた。妻は病氣になつてゐた。費用に當てるために彼は結婚記念の寶石をも賣り飛ばした、……………その昔の耳環や眞珠の頸飾りは家寶となつてゐたもので、やがては誰の手に譲られるかといふことが、四人の娘たちの間で問題になつてゐたのであつた。

貪慾な老守錢奴は、剛直な人間であることを證明した。いや、これは續けて行くことは出來な

いといふのだつた。彼は親切な人間だつたので、バレットが、その努力に價する以上の土地を耕作しようとして決心して自らを殺すことを許さなかつたのだ。それに賛成しなかつたのだ。彼は餘りに親切過ぎた。で、彼は新しく地代の申込を受けた時、その土地を出來るだけ早く返すやうにとバレットに通知した。彼は非常に残念であるが、彼も貧しいといふのだつた。あゝ！そして同時に、彼は馬を買ふ時の負債をも返して貰はなければならぬことを注意した、……………それと一緒に積つてゐる利息をも……………。

哀れな農夫は、彼の負債が結構な利息と結びついた幾千リイルがの金額に注意さへしなかつた。そして慌てまごついてその土地をこの命令に依つて見棄てるやうなことにしてしまつた。

二年間の押し潰されるやうな戦ひのために生じた彼の衰弱と内部の崩壊とは、突然に姿を現した。

嘗てすすり泣いたことのない彼が、今は子供のやうにすすり上げた。その誇り、マイル人らしい壯重は一切忽ちに消えて、彼は老人の前に跪きながら、彼を父親のやうに崇めるから見棄てないでくれと願つた。

が、哀れなバレットは立派な父親を探し當てたことだ！ドン・サルヴェダアは無慈悲なことを示した。自分は残念だ、が、どうすることも出来ない、自分自身貧乏なのだから、子供たちのために生に活費を用意してやらねばならないのだから、といふのだつた。そして彼はその残忍性を、偽善的なセンチメンタリテイの言葉で隠し続けた。

農夫は慈悲を乞ふのに疲れて來た。彼はヴァレンシアの地主の家に五度も六度も出掛けて、先祖のことを思つてくれ、その土地に對する自分の道德的權利を思つてくれ、少し辛抱してくれ、支拂はするからといふことを、狂ほしい希望を以て頼んだり願つたりした。が、遂に地主は彼に對して戸を開けることを拒んだ。

それから絶望がバレットに新しい生活を與へた。彼は、自分が正しいことを信じた時、再び誇りに充ち元氣に充ちた。毅然たるフェルタの子となつた。地主は彼の言ふことを聴きたくなかつたのか？彼は彼に如何なる希望を與へることも拒絶したのか？よろしい。と思つて、彼は彼自身の畑にゐた。若しドン・サルヴェダアが何事かを欲するならば、其處に來て彼を求めなければならぬだらう。彼をその畑から去らしめることの出来る無頼漢と會ひたいだらう。

さうして彼は働きつづけた。が、若し誰か見知らぬ者が向うの道から近附いて來るやうなことはあるまいかと、不安さうに疑つたり眺め廻したりした。恰も何時泥棒團に襲はれるかも知れないことを豫期してゐるやうな恰好であつた。

彼等は彼を裁判所に呼び出した。然し彼は姿を見せなかつた。

彼は既に、これが何を意味するか知つてゐた。人間が正しい者を滅ぼすために掛ける良を知つてゐた。若し彼等が自分の物を奪はうとするならば、既に自分そのものゝ血と肉との一部分となつてゐるその土地の上で、自分を求めるがよい。さうすれば彼等を自分は防ぐのだ……。

或日、彼等は彼に、裁判所では、その日の午後、彼をその土地から放逐する手續を始めたといふこと、そればかりでなく、負債に當てるために、彼の小屋中の一切の物を差押へるだらうといふことを知らせた。彼はその夜は眠れないだらうといふことだつた。

この通知は、哀れな老バレットにとつては、本當と思へなかつた。馬鹿々々しくて笑ひ出した程だつた。そんな事は一度も支拂をしない詐欺師にとつては有り得ることかも知れない。が、何時も義務を果し、此處で生れてさへゐて、僅かに一年間の地代を借りてだけの自分に、——馬

鹿々々しい！ そんな事があるものか！ 慈悲もなく宗教もない野蠻人の中に生活してゐたところでそんな事がある筈がない！

然し、その午後になつて、黒い數人の人影、腕の下に捲いた紙の翼を持った大きな葬式鳥が、道に沿つて來るのを認めると、彼は最早疑つてはゐなかつた。これは敵だつた。自分の物を奪ひに來てゐたのだ……。

と不意に老バレットの内心には、あらゆる風の侮辱には堪へるがその財産に手を觸れられた時に狂氣するムール人の盲目的勇氣が目覺めた。彼は小屋に駈込むなり、何時も彈丸を籠めて戸の背後に吊るしてある古い小銃を擱んだ。そして、それを肩に擧げながら、葡萄園の下に陣取つて自分の畑地に足を入れる最初の法律蹂躪者に二發の彈丸を射ち込まうと準備した。

病妻と四人の娘とが駈け出して來て、悲鳴を擧げながら、その小銃をもぎ取らうとして兩手で銃身を引つ張りながら、彼に身を投げ掛けた。彼等が葡萄園の一方の柱から他方の柱へとよろめきながら争つてゐると、その叫びを聞きつけて、近所の者が寂しい所に住んでゐる者の兄弟のやうな團結心を以て飛び出して來始めた。

拔目なく小銃を引き離して彼の家に持ち運んだのはビメントオであつた。バレットは彼を追はうとして誰か若い逞ましい男の強い腕に制せられ擱まれて、うしろによろめいた。が、彼はその狂氣を、彼自身を守らせない愚かものに向けて叫んだ。――

「ビメントオ、――泥棒！ 俺の鐵砲を返せ！」

が、ビメントオは人のよさうな微笑をした。そして彼が老いた狂人を如才なく父親のやうに扱つたことに満足した。彼は老人を自分の家に運んで、其處でバレットの友達と一緒に見守りながら、馬鹿なことをしないやうにと忠告した。注意しろ、バレットの爺さん！あの連中は裁判所から來たのだ。そして、あれに喧嘩を買つて出れば、不幸な者は何時も損をするのだ！冷靜と悪い計畫が何よりも成功するのだ。

そして同時に大きな黒い鳥は書類だつた。而もバレットの家には更に澤山の書類があつた。彼等は情もなく家具や衣類を引つくり返して、家畜檻や厩舎までも目錄に書き入れた。一方で妻や娘は絶望して泣き沈み、おびえたやうな群集は戸口に集まつて、その場の有様を悉く眺めながら可哀さうな女を慰めたり、猶太人ドン・サルヴェダアや、さうした犬に屈服してゐる連中に對す



る鬱積し、反感の叫びを擧げたりした。

夕方になつて、打ち砕かれたやうなパレット、狂ほしい危機を経て石のやうに動かなくなつたパレットは、自分の足元に幾つかの衣類の束があるのを見た。家具の入れられた袋のからやかちやといふ音を聞いた。

「お父さん！お父さん！」

彼の腕に身體を埋めた娘たちのふるへ聲がすすり泣いた。その背後には、熱のために顫へてゐる病氣の老いた妻がゐた。そしてその背後には、附近の人たちが、この悲劇の脅えた合唱ともいふべき人たちが、ビメントオのバラツカに侵入したり暗い戸を経てそのうしろに消えたりしてゐた。

彼は既に自分の家から追ひ出されたのだつた。黒い人々はそれを閉ぢて鍵を持つて歸つた。床にある束、——破れた衣類と鐵の家具との他には何一つ彼等のために残された物はなかつた。彼等が家から持ち出すことを許されたものはそれが全部であつた。

彼等の言葉はすすり泣きのために破られた。父と娘とは又抱き合つた。そして、この家の女主

人たるベータも、他の女たちと同じく泣きながら老守錢奴を繰り返し繰り返し罵つた。時を見て亭主のビメントオが言葉を挿んだ。——

出来たことに就いて話す時は又あるだらう。さあ、晩飯の時だ。何といふ不幸なことだらう！この不幸は皆老いぼれの猶太人のお蔭なのだ。若し此の有様を残らず彼奴が見たなら、どんなに彼奴の悪い心は嬉しがることだらう！フェルタの連中は親切だ。皆パレットの爺さんの家族を世話してくれるだらう。そして麵麩がもうなければ分けてくれるだらう！

潰された農夫の妻と娘とは誰か近所の人に連れられて、その夜を泊めて貰ふために行つた。老パレットはビメントオに見守られながら後に残つた。

二人の男は藁の椅子に掛けて、蠟燭の光の中に煙草を喫ひながら、十時までぢつとしてゐた。哀れな老人は氣が狂つてゐるらしかつた。彼は、今は善良な人の役目をしてゐるこの亂暴者ビメントオが幾度も話し掛けるのに對して、簡単な受け答へしかなかつた。そして物を言ふ時は常に、同じことを繰り返した。

「ビメントオ！俺の鐵砲を返せ！」

で、ビメントオは感心したやうな微笑を浮べた。フェルタ中の人々から、善良な愚人と思はれてゐるこの小さな老人の、突然の兇猛が彼を喫驚させたのだつた。銃を返せ！直ぐに！彼はその眉と眉との間に浮き立つた眞直な皺を見て、老人を滅茶々に滅ぼした本尊を射たうといふ彼の固い意志を充分に察した。

バレットは益々若いビメントオを困らせた。彼はこんなことまで言ひ出した。お前は泥棒だ。鐵砲を返さないと云ふ。俺には友達はない。そのことはよく解る。要するに皆恩知らずなのだ。貪慾の點にかけてはドン・サルヴェダアと同じなのだ。俺は此處で眠りたくない、息がつまりさうだ。そして彼は道具の袋を探して、鎌を取り出し、それを腰に突つ込んで、家を出て行つた。ビメントオもそれを止めようとしなかつた。

この時刻に彼が何の亂暴をもすることは出来ない。戸外で眠るのが氣持いいのなら、それもいゝだらう。と思つてビメントオは戸を締めて寢床に這入つてしまつた。

老バレットは畑の方に眞直に進んで行つた。そして棄てられた犬のやうに、彼の畑地のまはりぐるぐる廻り始めた。

閉ぢてゐる！永久に閉ぢてゐる！この壁は祖父が建てて、それを彼が最近數年に亘つて直したものであつた。闇の中にも、三月以前に娘たちが塗つた鮮やかな白塗がくつきりと浮んで見えた。家畜檻、厩舎、豚舎は皆父の作つたものであつた。そして、二つの小さな十字架を兩端に置いた、このすつきりした、高い藁屋根は、彼自身が、至るところ壊れた前のものゝ代りに建てたのであつた。

そして井戸の馬蹄石、葡萄園の見張所、日没と朝日とにその花辨のやうな光を濺いでゐた竹の柵、——さうしたものも彼の手で作られた。それにすべてが他人の財産とならうとしてゐる。何故といふに、——さうだ、何故といふに、人間がそれをさう定めたからだ。

彼は腰をさぐつて細長いマッチを取り出した。その藁屋根に火を點けようとするためだつた。何も彼も悪魔に焼き拂はれてしまへ。これは、神が御存知の通り、兎に角何といつても自分のものだつた。そして、自分で自分の財産を、それが泥棒の手に落ちるのを見る前に滅ぼしてしまふことが出来るのだ。

然し彼は昔の自分の家に火を點けようとした時、はつとした恐怖を感じた。眼の前に先祖代々

の幽霊が立ちのぼるのを見たやうな恐怖であつた。彼は細長いマツチを荒々しく地上に投げつけた。

が、破壊しようといふ望みは彼の腦裏を絶えず荒れ廻つた。彼は手に鎌を持つて、滅びてしまつた畑に突進して行つた。

今一撃の元に自分は、恩知らずの土地、あらゆる彼の不幸の原因たる土地と運命を共にすることも出来るのだ。

破壊は數時間續いた。彼の足元に優しい隠元豆や豌豆の青い卷鬚がからみついた弓形の竹は倒れた。荒々しい藪のために二つにされて、豆は落ち、キヤベツやチシヤは鋭い鋼鐵に撫でられて、その薔薇形の葉をあたりに散らしながら斬られた頭のやうに八方に飛んでゐた。誰も彼の勞力を利用することは出来ないのだつた。

そして彼は夜の明けるまで刈りつづけた。狂ほしい地團太を踏みながら、呪詛の喚きを擧げながら。遂に疲労が彼の狂氣を鎮めた。彼は畦に倒れて、これからは地上が自分の本當の寢床で、職業としては街々を乞食するより他にはないのだと思ひながら、子供のやうに泣きつづけた。

彼は眼を射る太陽のはじめての光と、夜の破壊の屑を朝食に利用しながら彼の頭のあたりに飛び交ふ小鳥の愉快さうな囁りとに依つて眼を覺ました。

疲れて感覺を失ひ、濕氣のために寒さを覺えて彼は地上から起き上つた。ピメントオとその妻とは遠くから彼を呼んで、來て何か食べるやうに招いた。パレットはそれを罵り返した。泥棒め俺の銃を盗みやがつて！そして彼は、寒氣に顛へながら、自分が何處を歩いてゐるかをも知らずに、ヴァレンシアの方へ進んで行つた。

彼はコパの居酒屋で立ち止つて中に這入つた。近所の數人の家畜追ひが彼の不運に同情を寄せながら話し掛けて、酒を飲むやうに勧めた。彼は感謝して受けた。骨まで刺すこの寒さを凌ぐやうな何かを貰ひたいと頼んだ。そして、あれ程に何時も謹嚴にしてゐた彼が二杯のブランデーを一杯又一杯と呑み干した。それは彼の弱くなつた胃の中に、火の波のやうに流れ込んだ。

彼の顔は赤くなり次ぎに死んだやうに青くなつた。眼は血走つて來た。彼に同情した家畜追ひたちの眼には、彼が幸福な者といつてもいゝ位に、いきいきとし、腹藏なく見えた。彼は彼等を息子と呼びながら、自分はそんなに貧乏になりはしないといふ事を保證した。何も彼も無くした

といふわけではない。まだ家には最もいい物、祖父の鎌や、寶玉が残つてゐる。その寶玉は、いや決して小麥五十俵とでも換へはしない積りだ、といふのであつた。

彼は腰から、立派に鍛へられた鋭い刃の、きらきらして澄んだ鎌を取り出した。それはバレットの言ふところに依れば、巻煙草の紙を空中で切ることが出来るものであつた。

家畜追ひたちは勘定を済ませて、その家畜を働かしながら、空に鞭のびしびしい音を響かせながら、ヴァレンシアに向けて出發した。

老人は、獨りごとを呟きながら、益々眩暈を覚えながら、一時間以上も居酒屋に残つてゐた。が、遂に彼の状態を察した亭主の冷淡な流し目が癢にさわり、漠然とした羞恥を感じて、さよならとも言はずに、よろよろした足取りで出て行つた。

然し彼は粘り着く記憶を心から驅逐することが出来なかつた。彼は眼を閉ぢてゐながらベニマクレットと海との間の、一時間ばかりの距離にある大きな橙園を描くことが出来た。其處に彼は用があつて度々行つたことがある。それで今、其處に行つて、悪魔が彼をか地主に出會はせてくれる程に慈悲を持つてゐるかどうか見ようとするのだ。かの守錢奴の貪慾な眼は、彼がすべて

のものに當てにされる橙を持つてゐるかのやうに、その美しい果樹を殆んど毎日のやうに調べてゐたので、或は出會へるかも知れないとバレットは考へた。

彼は二時間歩いた後に行き着いた。その途中、彼は幾度も、その定まらぬ足の上に前に揺れ後に揺れる身體を平均させようとして立ち止つた。

ブランドイの酔は今彼をすっかり捕へてしまつた。彼は最早、何の目的で此處、——彼自身の家族の住んでゐるフェルタのあの方面からこんなに遠くまでやつて來たのか思ひ出せなかつた。

そして遂に道傍の大麻の畑の中に倒れた。と、やがて泥酔した不自然な彼の顔が青々とした眞直な幹の間に聞えた。

眼が覺めた時は午後もかなり遅くなつてゐた。頭は重く、胸は嘔氣を催した。耳鳴りがして、被はれた口の中に溜らなく厭な味はひを感じた。此處、あの猶太人のフェルタの近所で自分は何をしてゐるのだらう？何故こんな處まで來たのだらう？彼の本能的名譽心が湧き起つた。彼はさうした墮落した状態にゐる彼自身を羞しく感じて立ち去らうとした。腰に斜めに差した鎌が腹に當るのが刺すやうに冷たかつた。

立ち上つて彼は大麻の間から首を突き出した。と、道の曲り角に、小さな一人の男が肩衣を纏つてゆつくり歩いてゐるのを見た。

バレットはその血潮が忽ち頭に昇つて來るのを感じた。酔ひが再び甦つた。彼は鎌をきつと強く引きながら立ち上つた。これでも世間は悪魔が慈悲深くないといふのか？此處にあの男が現れたのだ。此處に彼が昨日から會ひたいと念じてゐた男が現れたのだ。

老守銭奴は自分の家を出る前に躊躇してゐた。老バレットの件は彼の良心を責めてゐた。それは最近の出來事だからフェルタは悪意を持つてゐる。然し彼がゐないとフェルタに於て乗ぜられるかも知れないといふ恐怖の方がその臆病よりも強かつた。で、彼は、橙園オレンジがバレットの家から離れてゐることを思ひ起しながら出て來たのだつた。

彼は先刻までの恐怖を内心笑ひながら、フェルタの見えるところまで來てゐた。と、その時彼はバレットが大麻の茂みから躍り出したのを見た。赤い顔をして腕を延ばし、あらゆる逃路を塞ぎ、道路を平行して走る堀割の端に立つて通路を遮つたバレットの姿は、彼の眼に大きな鬼のやう見えた。彼は自分が夢を見てゐるに相違ないと思つた。齒はがたくと合はなくなり顔は眞青

になり、肩衣ははづれて、古い外套と頸に捲いた汚いハンカチとがあらはに見えた。彼の恐怖と狼狽とは、スペイン語で、かう相手に叫んだ程大きかつた。

「バレット！私の息子！」彼は切れ切れの聲で言つた。「一切皆冗談なんだよ。心配するな。昨日のことは一寸お前をおどして見たまでのことなんだ……何でもない、それつきりだ。お前はあの土地にそのまゝゐてもいゝんだよ。明日俺の處へ來るがいゝ……一緒に話を取り極めよう。お前の都合のいゝ時に拂つてくれたらいゝんだ。」

そして彼は老バレットの近附くのを避けようとして反身になつた。その恐ろしい鎌を遁れるためにこつそり逃げようと試みた。鎌の刃先に太陽の光が碎けて、空の青い色がそこに反射した。が、脊後には堀割があるので逃げ場所を見つけることが出來なかつた。彼は拳を固めて防ぎながら後退りをした。

農夫は鋭い白い齒をあらはしてハイーナ（狼又は犬の一種——譯者）のやうに笑つた。  
「泥棒！泥棒！」彼は唸るやうな聲で應じた。

そして兇器を左右に振り廻して彼は守銭奴が前に振りかざしてゐる瘦せた絶望的な手を避けな

がら、切りつけるに都合のいゝ場所を求めた。

「が、バレット！どうしたといふんだ？兇器をおろせ、冗談しちやいけないよ！お前は正直な男だ……娘たちのことを考へて見ろ！も一度言ふが、あれはほんの冗談なんだ。明日来れば鍵を渡すよ……あッあッ！……」

恐ろしい悲鳴、傷ついた野獸の呻きが其處に起つた。鎌は向つて来る障礙物に疲れてしまつて一打ちに握りしめた手首の一方を斬つた。而もそれは臑と皮膚とでぶら下り、その眞赤な傷口からはさつと烈しく血が迸つてバレットの身體に散つた。その生暖い血潮を顔に浴びてバレットは唸り聲を擧げた。

老人はよろめいたが、その倒れるより早く鎌は頸の上を水平に撫でた。そして……さッ！といふ音を立て、頸に捲いたハンカチの折り重ねたのが切れて、今少しのことで首と胴とを離してしまふ位に深い傷口を見せた。

ドン・サルヴェダアは堀割の中に倒れた。その足は、殺された牛がその最後の足蹴をするやうに、びくびくして傾斜をした坂に残つてゐた。そして泥濘の中に没したその頭部は、彼の血潮の

全部を深い傷口から迸らせ、午後の嚴肅な沈黙を元氣づける靜かな囁きを以て平和な流れを辿つてゐる水は朱に染まつて來た。

バレットは呆然として水邊にちつと突つ立つてゐた。老いぼれの泥棒は何といふ澤山の血を持つてゐるのだらう！堀割が赤くなつて、その量が殖えたやうに見える！と思つてゐる内に、彼は突然恐怖に襲はれて駈け出した。例へば血潮の小さな流れが溢れて彼を呑んでしまひはしないかと恐れたやうだつた。

その日の終りに、その消息は平野全體を揺る大砲の知らせのやうに擴がつた。諸君は偽善的表情沈黙したる喜悅といふものを見たことがあるだらうか！町が己れを壓迫した支配者の死を迎へたのは、その沈黙したる喜悅を以てであつた。皆、それが老バレットの仕業であることを察したが、誰もそれを口にしなかつた。その各目の農家は彼のために最後の隠れ家となつたでもあらう女たちは彼をそのスカートの下に隠しもしたであらう。

然るに暗殺者たるバレットは狂人のやうに畑地を彷徨ひ歩いて、坂の傾斜のうしろに寝ころんだり、小さな橋の下に身を潜めたり、犬の吠聲に脅やかされて畑を走り廻つたりした。さうした

擧句、翌日、乾草置場に眠つてゐるところを地方警官に驚かされた。

六週間に亘つてフェルタでは老バレットの話で持ち切りであつた。

日曜日には男も女も、巡禮にでも行くやうにヴァレンシアの監獄に行つた。門の隙間から、この哀れな解放者を見るためである。彼は益々痩せ細り、眼は益々窪み、眼差しは益々惱まし氣になつた。

公判の日が来て彼は死刑の宣告を受けた。

その消息は平野全體に深い印象を與へた。教區牧師や市長などがさうした恥辱を避けるための運動に卒先した。……この區域の或數人は自ら絞首台に上らうとまで言つた。そしてバレットは政治上の當局が投票を命ずれば投票し、命ぜられる通りおとなしく従つて、常に良民の仲間にあつたから、皆が助命を乞ふためマドリッドまで出掛けた。その結果都合よく許されることになつた。

農夫は木乃伊のやうに痩せて監獄から出て、ケウタに移され、其處で數年後に亡くなつた。彼の家族は散り散りになつた。風に吹き飛ばされた一握りの藁のやうに消えた。

娘は次々にと、その世話になつてゐた家を去つて、女中として生活費を得る爲にヴァレンシアに赴いた、哀れな寡婦は自分の病弱のために他人に迷惑を掛けることに疲れて病院に引き取られ、其處で間もなく死んだ。

誰でも他人の不幸は忘れがちのものであるが、フェルタの人々も老バレットの恐ろしい悲劇を殆んど口にしなくなつて、たゞ、娘たちがどうなつたらうかといふことだけを氣にしてゐた。

然し誰一人その畑と家とを忘れるものはなかつた。それは、裁判官が不幸なバレットを其處から放逐した日の有様そのまゝに残つてゐる。

それはこの區域全體の默契であつた。言葉は多く準備されなかつたが、樹木そのもの道路そのものも一員になつてゐるかと思はる程の本能的同盟であつた。

ピメンオトは悲劇の突發した日に、その事を口にしてゐた。強ひてこの土地を持たうとする奴を見ようではないか！と言つたのだつた。

するとフェルタ中の者が、女も子供も暗々裡に了解した眼差しを以て答へたらしかつた。よろしい、見ようといふ意味だつた。

寄生木、藓の類は、老パレットが、最後の夜に踏み躪りその鎌で刈り落した呪はれた土地から恰も、彼が、その過失のために監獄内で死ぬることを豫感したかのやうに、伸び茂り始めた。

ドン・サルヴェダアの息子たちは、親と同じく金持の而も強慾な男だったが、この土地の一片が農作物を生じないといふので貧乏を叫んだ。

フェルタの他の區域に住む一農夫があつた。彼は無漢頼らしい風をした、未だ充分の土地を持つたことのない男であつたが、その安價な借地科に誘惑されて、恐怖の念をすべての人々に起させてゐるこの土地を掴んだ。

この男は肩に小銃を持つてこの畑を耕し始めた。彼とその日稼人とは、近所の者が彼等を見棄てた寂しさに笑ひ合つた。近所の百姓の家々は彼等が通りかゝると戸を閉ぢ、憎しみの籠つた眼差しが遠くから濺がれるのだつた。

この借地人は不意の襲撃を豫感して警戒してゐた。然しその警戒は何の役にも立たなかつた。彼が、まだ土地の開拓をも終らない或日の午後、一人で畑を立ち去つてゐると、何處からともなく彼を狙つて二發の彈丸が爆發した。が、不思議にも彼は負傷しなかつた。一握りの散彈は彼の

耳を掠めて過ぎたのだつた。

畑地には誰も見えなかつた。——新しい足跡さへなかつた。狙撃者は竹藪のうしろに隠れた堀割のあたりから發砲したのだつた。

さうした敵を持つてゐては誰も戦ふ機會はない。で、その夜、このヴァレンシア人はその鍵を地主に返してしまつた。

ドン・サルヴェダアの息子たちの言葉は誰でも聞くことが出来たであらう。財産に對する法律或は保護はないのか……如何なるものに對しても？

言ふまでもなく、この狙撃の發頭人はビメントオであつた。その土地の耕作を妨害してゐるのは彼であつた。で、地方警察は、このフェルタの亂暴者を捕縛して監獄に抛り込んでしまつた。が、宣誓の瞬間になつて、この區域の者が全部裁判官の前に殺倒して、ビメントオの無罪を述べ立てた。而もこれ等賢い田舎者から一つとして矛盾した言葉を吐かせることが出来なかつた。

異口同音に彼等は同じ話をした。自分の家を離れたことのないよぼよぼの老婆でさへも、その日、即ち二發の爆發の聞えた時刻に、ビメントオはアルボラヤの居酒屋で友達と一緒に遊んでゐ



たと主張するのであつた。

自分の後頭部を搔くやうな平然とした態度で嘘を述べ立てるこの間の抜けた、そして眞剣な顔つきの人々をどうすることも出来なかつた。ピメントオは放免された。そして勝利と満足との溜息が至るところの家々から聞えた。

かうなつては證明が與へられたやうなものである。——即ちその土地を耕作するのは生命がけであるといふことが今は知れ渡つた。

強慾な地主は屈しないで、自ら其處を耕さうとした。彼等は長く苦しんでゐる柔順な者の中から日稼人を求めた。その連中は、この地方の端、アラゴンの山境あたりから仕事を探して、粗野な羊毛と貧乏とを喫きながら飢ゑに追はれて移住した者であつた。

フェルタの者はこの哀れな *Chirios* (輕蔑した言葉、野蠻人の意——譯者) を憐れんだ。可哀さうな男たちよ！彼等は日給が欲しいのだ、何の罪があらう？そこで夜、彼等が肩に鋤を擔いで歸つて來ると、何時もコバの居酒屋の戸から親切な誰かゞ彼等に聲を掛けた。彼等の中に入れて酒を飲み、顔をしかめて、然し子供を危険から免れしめる人の父親らしい親切な調子を以て、隠

すことなく秘密を話して聞かせた。その結果は直ぐに現れた。その愚かな日稼人たちは翌日畑に出掛けないで一緒になつて地主の前に現れた。

「旦那、お給金を貰ひに参りやした。」

二人の老いた地主の獨身者は、その貪慾に於ける彼等自身の形勢が悪くなつたのを見て、やかましく議論したが、それは一切何にもならなかつた。

「旦那、」と彼等は何と言つても答へた。「わつち等は貧乏ですが。だが、納屋の犬ころみたいに生れついたんぢやねえ。」

そして彼等は仕事を止めたばかりでなく、彼等の國の連中すべてに、彼等が悪魔から遁れるやうにこのパレットの土地の日稼を避けなければいけないといふ事を警告して廻つた。

地主は日々の新聞で保護を要求することさへした。そして地方警察では組を作つてフェルタを巡廻し、道傍に立つて村人の表情や談話を驚かして見たが、常に結果は空しかつた。

毎日彼等は同じことを見た。女たちは葡萄園亭の下で縫物をしたり唄を唄つたりしてゐる。男たちは畑に屈みながら眼を地上に注ぎ忙がしく働く腕を休めたことがない。ピメントオは烏鷲を

つけた小さな棒の下に大地主のやうに寝そべつて、小鳥を待ち設けたり、氣の抜けた様子でべべタの手助けをしたりしてゐる。コバの居酒屋では、數人の老人が日向ぼつこしたり骨牌をしたりしてゐる。この田園は平和な尊ぶべき無氣力な呼吸をしてゐるのだ。——それはムール人のアーカディア（古ギリシヤの一地方名——譯者）であつた。が、その「同盟」は警戒をしてゐた。如何なる農夫も例の土地を、たとひ無料でも欲しがらなかつた。そして遂に地主もその計畫を斷念してしまはなければならなかつた。雜草はその土地と家とに蔓つて落ち崩れるが、が、彼等はこの土地を買ふか耕すかする力を持つた頼もしい人が誰か來ればいゝと望んでゐた。

フェルタ中の者は、どんなにこの富が失はれたか、どんなにドン・サルヴェダアの息子たちが困つてゐるかを見て、満足感を以て顫へた。

それは新しい強い快感であつた。時としては、結局、貧者の意志が勝たなければならぬ。富者はそのために不幸にならなければならぬ。二人の守錢奴の狂ほしい心を思へば、堅い麵麩も風味を増し、酒も旨くなり、勞働もさまで苦しくなくなつた。そしてその守錢奴はその金を持ちながら、彼等を冷笑する田舎者を堪へ忍ばなければならなかつた。

そればかりではない。ヴェガ（スペインの低濕地——譯者）の眞中にあるこの荒廢の地は他の地主をして無理な要求をせしめない効力があつた。この隣りの土地を手本として彼等はその借地料の値上をせず、時には半年分の地代支拂が遅れても猶豫することを承諾した。

この廢墟は、フェルタの住民を絶えざる團結に親しく結びつづける護符であつた。彼等の力を地主の力の上に擧げた記念碑であつた。土地を耕しもせず畑に汗を流しもしない地主の法律と富力とに反抗する貧困の同盟の奇蹟であつた。

彼等が亂雜に考へ出したこのすべては、老バレットの土地が耕される時はフェルタ中があらゆる不幸に苦しむであらうといふ信念を皆の胸に抱かせた。で、彼等は、十年間の勝利の後に、何人か敢てこの廢墟に侵入して來ようとは誰一人豫想しなかつた。聞くものがないので自分の勇ましい振舞を汚い羊の群に話して聞かせる盲目の、口の碌に利けない羊飼ひのトムバ老人だけを除いて、誰もそんなことを思はなかつた。

そんな譯で、バレットの土地に今見知らぬ借地人が這入つたこと、彼……彼（誰であるにしても）が何等の注意も拂はないで……彼自身の家のやうな風で家族全體と一諾に其處にゐるこ

と、それをビメントオが畑から畑、家から家へと觸れ廻つた時フェルタ中にあまねく驚愕の叫びと憤怒の表情とが湧き起つたのであつた。

### 三

パティストは耕されないで放擲されてゐる土地を調べた時、此處で暫く働かうと獨りことを言つた。前途の見込みを考へても失望を感じはしなかつた。彼は生計を立てるための過激な労働に慣れ切つた精力のある大膽な男だつた。而も此處に過激な仕事、それも澤山にあるのだ。且つ彼は、もつと悪い仕事をして來たことを思ひ出して自分を慰めた。

彼は生涯絶えず職業を變へて、常に田舎の貧しい仲間にもゐた。而も毎年職業を變へても決して家族のために穩當な慰安を得ることに成功しなかつた。その穩當な慰安といふのが彼の唯一の慾望であつた。

彼は初めて妻と知り合つた頃、サグントオ附近の水車工をしてゐた。彼は家族を養ふために犬のやうに（と彼は自分で言つた）働いた。そして神はその勞力の報酬として彼に毎年子供を與へ

てくれた。皆男の子だつたが、——母親の乳を荒したり絶えず麵麩をくれと言ひ出したりする彼等の性急から判断するに、それは齒と一緒に生れて來たらしい綺麗な小供だつた。

その結果、彼は今少し給料の良い職を探して、水車を止め家畜追ひにならなければならなかつた。

然し悪い運が彼を追ひ廻した。けれども彼程よく家畜の面倒を見て道を注意する者はなかつた。疲れて殆んど死んだやうになつても、彼は、他の朋輩のやうに、車の中で眠り等しないで、家畜をその本能に依つて導きながらその道を見つけさせた。又何時も見張つて穴や悪い場所を避けるために小馬の傍を少し前に立つて歩いた。が、若し車が覆へるやうなことがあれば、それは常に彼の車で、又若し家畜が雨のために病氣にかゝれば、それも勿論パティストの家畜に相違なかつた。彼が馬の脇腹に麻布の荷物を急いで附ける時には父のやうに注意してするにも拘はらず忽ち幾粒かは地上に落ちるのだつた。

パティストは數年の間、田舎の大通りを味氣なく往來して、漸く貧しい咽喉を濕ほし、戸外で眠り、粗野な無口な男の凝つた熱情を以て愛する家族とも全數ヶ月離れて過さなければならぬや

うな苦しみに堪へ續けて來たが、その間に経験したものは唯損ばかりであつた。そして彼は自分の境遇が益々悪くなつてゐるのを見た。

彼の小馬は死んで、その代りを買ふためには借金しなければならなかつた。彼が酒や油の這入つた皮囊を絶えず運んで得なければならぬ利益は、商人と車の持主との手に消えてしまつた。遂に彼は、自分の破滅が切迫してゐるのを見て、その商賣を諦めてしまつた。

次に彼はサグントオ近くに或土地を持つて見たが、それは不毛の、赤土の永久に乾燥した畑であつた。その中には百年以上を経たイナゴマメの樹が、そのうづろの幹を横たへ、橄欖樹が、その圓味を帯びた汚い頭を擡げてゐた。

彼は生涯、絶えず旱魃と戦ひ、絶えず空を眺めてゐた。小さな黒雲が地平線に現れると、彼は何時も恐怖に顫へた。

雨はあつても少し、か降らなかつた。收穫は數年ひきつゞいて悪かつた。遂にバティストは、何をしていゝのか、何處に行つていゝのか解らなかつた。丁度その時、彼はヴァレンシアに行つて、ドン・サルヴェダアの息子たちの知遇を受けた。その息子たちは、立派な紳士で（神は彼等

を祝福してゐるのだ）、バティストに、その美しい畑地を二年間、つまりその土地が全然普通りになるまで、無料で貸さうと言ひ出した。

彼はその農家にどんな出來事があつたかといふ噂、以前の持主がこの美しい畑地を見棄てなければならなくなつた原因を聞いてゐた。然しそんな事は昔の過ぎ去つたことではないか！それに貧乏は耳を持つてゐない——その土地が氣に入つたので彼は其處に住まうと思つた。ドン・サルヴェダアと老バレットとの物語など何で彼が氣にしただらう？

彼がその土地を眺めやつた時、すべては罵られ忘れられた。バティストは、自分が肥沃なフェルタの耕作者となつたを見て、うつとりとした喜びに充たされたことを感じた。この肥沃なフェルタは、彼がヴァレンシアからサグントオへの大通りを過ぎる度に幾度か羨ましいと思つた土地であつた。これは立派な、何時も青々とした、次々に收穫を齎して盡きることを知らない土地であつた。赤味を帯びた水は二六時中、生命を與へる血潮のやうに、無數の堀割や灌漑用の溝を脈と動脈と流れてゐる。それ等の表面には静に入り組んだ網のやうな皺が浮んでゐる。フェルタ中の農家が、青いハンカチのやうに見える小さな畑だけで食つて行ける程に、それは肥沃なの

だ。幸にして彼が遁れることの出来たサグントオに近い今までの乾燥した土地は、思ひ出せば彼にとつて、早魃の地獄のやうなものだつた。

今彼は自分が順調にあるに相違ないと思つた。働かう！畑地は荒れ果てゝゐるので、すべき仕事は澤山にある。が、これ程に喜ばしい時が又とあるだらうか！そして、この大きな逞ましい男、――髪を短く刈つた圓い頭の、巨人のやうな肩を持ち、僧侶のがつくりした頸に依つて支へられた善良さうな顔を持つた男は、家畜追ひをしてゐた時代に麥粉の袋や重い皮袋等を持ち舉げるに慣れた強い腕をぐつと延ばし、それを空に高く舉げ、そして背伸びをした。

彼は、近所の者の好奇心にも殆んど氣付かぬ程、その土地に没頭してゐた。

竹藪の間には澤山の顔が休みなく現れた。傾斜の坂を一杯の太股で歩く人間が彼を注視してゐた。隣りのフェルタの女や子供までも、彼の行動を見守つてゐた。

パティストはそんなことを氣にしなかつた。それは新しく到着したものが常に惹き起す好奇心であり悪意ある期待である。彼にはそのことがよく解つてゐた。皆、それに慣れて来るだらう。

且つ多分、皆は荒廢の十年がパレットの土地に堆く積んだ雜樹雜草の焼かれるのを見るのが面白

いのだらうと彼は思つた。

そこで彼は妻と子供とに助けられて、着いたその日から、寄生した雜草を焼きつづけた。

灌木は焔の中に身悶へして、燃え盛る石炭のやうに崩れ、その灰の中から忌はしい害蟲が皆焦げて這ひ出した。そして家は、その火から立ち昇る煙の雲の中に無くなつてしまふかのやうに見えた。フェルタ中、それを見て口にこそ出さなかつたが怒らない者は一人もゐなかつた。

土地は再び綺麗になつた。パティストは一刻をも無駄にせず耕し始めた。畑は稍々堅かつたが、彼は慣れ切つた百姓のやうに、それを區分して少しづつ耕す計畫を立て――先づ家の附近に一區劃を仕切つて家族全體に手傳はれながら土を起し始めた。

近所の者は、その憤怒の現れてゐる皮肉を以て彼等を嘲弄した。結構な家庭ではないか！彼奴等はチブシイ、橋の下に眠るチブシイと同じやうなものであつた。彼等はその昔の農家の中に、壊れたボートに縋りついてゐる難破船の水夫のやうな生活をした。此處の穴塞ぎ、其處に張木をし藁屋根を保たせるために全くの奇蹟を行ひ、そして丹念に磨かれた貧しい家具を、今まで鼠や害蟲の巢喰つてゐた部屋に配置した。

その勤勉に於て彼等は栗鼠の巢に似てゐた。父親が働いてゐるのに怠けることは出なかつた。妻のテレサ、長女のロセツタは、そのスカートを腰の間にまくつて、手に鋤を持ち日稼人よりも熱心に耕した。赤くなつて汗のたら／＼流れる額にもつれかゝる捲毛を掻き上げる以外に手を休めることはなかつた。長男は肩に藁の籠を負つて絶えずヴァレンシアに通つたが、それは彼が家の入口に表彰柱か何かのやうに堆高く積んだ二ヶ所の汚物と廢物とを運ぶためであつた。又、眞面目な働き好きの三人の小さな子供たちは、その家庭の境遇を自覺してゐるかのやうに、耕作する人たちのうしろに四つん這ひになつて、焼けた灌木の堅い根を根こぎにした。

この準備的な労働が一週間以上も續いて、彼等は曉から夜まで汗を流し喘いでゐた。

土地の半分は掘り起された。パテイストはそれに棚を作つて、家族の一人ともいふべき自分から進んで働く小馬の助けを借りて耕した。

彼はただ耕しつづけなければならなかつた。その内に種蒔の時期たる小春が來た。彼は耕された畑を三つに分けて一番廣い處には小麦、次には豆、次には秣を蒔いた。それは可愛い老いた馬モルツトを忘れないためだつた。

苦しい航海をして漸く港を發見した者の喜びを以て、家族は種子を蒔きつづけた。將來は保證されてゐた。フェルタの土地が失敗したことはない、一年中の麵麩はやがて收穫されるに相違なかつた。

種蒔を終つた日の午後、彼等は隣りの道路に汚い毛並の羊の群がやつて來て、彼の畑の端で躊躇するやうに立ち止つたのを見た。

その背後から、干からびた羊皮紙のやうな、黄色つばい、眼の窪んだ、皺だらけの口をした一人の老人が躓いて來た。彼は、しつかりした足取りで、然し羊飼ひの杖を先に立てながら、その道が彼の道だと感じてゐるらしく歩いてゐた。

家族の者は彼を注意して見た。彼等が此處に來てから二週間になるが、その間に、この土地に強ひて近附いたのはこの老人きりだつた。羊が躊躇してゐるのに氣づいて彼は進むやうに嗷鳴つた。

パテイストは出て行つて老人に會つた。——此處を通ることは出來ない、この畑は今耕されてゐるのだから。そのことを知らないのか？

老トムバは多少聞き知つてゐた。が、この二週間、彼は、この畑のことには頓着なくその羊の群をカアライキセツトの峡谷に連れて行つて其處の草を食べさせてゐたのだつた。では實際この畑は耕されてゐたのか？

老いた羊飼ひは顔を擧げて、フェルタ中の誰でもが出来なかつた事を敢てしたこの大膽な男をその殆んど視力を失つてゐる眼を動かして見ようとした。

彼は暫く黙つてゐた。そして遂に悲しさうに呟き出した。——餘りに悪い。自分も若い頃は大胆だつた。一切の物に反抗するのが好きだつた。が、こんなに敵が多くては！非常に悪い！彼はみじめな境遇に自分を嵌め込んだのだ、この土地は老バレットの時代から呪はれてゐる。彼は彼の、トムバの言葉を受容れることが出来る。彼は年も多く経験も積んでゐるのだから。皆は彼に災害を加へるだらう。

そしてトムバは羊を呼んで又道を追つて行つたが、別れる時に彼は、外套をめくり、瘦せた腕を擧げて、未來を占ふ先見者或は災害を豫知する豫言者らしい或調子でバティストに呼び掛けた。「俺を信じるがいよ、お前。皆はお前をひどい目に會はずだらうぜ！」

この不意の會合がフェルタの者を怒らせる他の原因となつた。

老トムバはこの十ヶ年間、平和にこの土地の草から羊の飼料を得てゐたのだが、もうその羊を此處に連れ歸ることが出来なかつた。

この土地が今は耕されてゐるので、その先取權の正しい事に就いては一言も話されなかつた。彼等はただ、この老いた羊飼ひが受けるに價する尊敬だけを話した。彼は世界の多くを見てゐてその呟くやうな言葉やはつきりしない忠告に依つて示される智慧は、フェルタの人々の間に、迷信的な尊敬を起させてゐたのだつた。

バティストとその家族とは豊饒な種子のよく蒔かれた地面を眺めてから、次には、差し迫つた仕事がないので家のことを考へ出した。畑の方はその義務をしてくれるだらう。今度は彼等自身の周圍を考へる番になつてゐた。

バティストはフェルタに来て以來初めて、土地を離れてヴァレンシアに行き、町の廢物で彼の役に立ちさうなもの一切を車に積んで歸つた。

この男は幸運な蟻のやうだつた。バティストに依つて始められた塚は、父親の遠征と共に著し

く大きくなつた。家の前面に防壁のやうな形をした汚物の塚は、忽ちに成長して、その上に、壊れた煉瓦だの、虫ばんだ材木だの、朽ちた戸だの、ばらばらになつた窓だの、すべて町の崩れた建物の屑が、幾百となく堆積した。

フェルタの人々は、その家庭を準備するために働いてゐる時のこれ等勤勉な蟻の敏捷と小賢しい熟練とを、驚いて眺めた。

家の藁屋根は再び眞直に立つた。——屋根の垂木の或物は雨に朽ちてゐたが新たに修理されたり取換へられたりした。新しい藁の層が外部の垂れた兩平面を蔽ひ、その端には小さな十字架さへ置き換へられた。それはバティストが小刀で念入りに彫つたもので、その隅には、ぎざぎざの刻目の飾りが附いてゐた。——そして近所全體の中でも、これ以上にきちんとして聳えてゐる屋根はなかつた。

附近の者は、屋根が眞直に立ち昔のバレットの家が修繕されたのに氣附いて、その裡に嘲笑ふやうな挑むやうな或物の潜んでゐるのを見た。

次に下の仕事が始められた。ヴァレンシアの廢物を利用するに如何なる方法と手段とを用ゐた

ことだらう！壁の裂目は消え、漆喰も塗られその上を妻と娘とは眩しいばかり白く塗り立てた。戸は新たにされ青く塗られて、小さな窓全體の母親のやうに見えた。そして、その小さな窓は壁穴から同じ色の四つの四角な面を見せてゐた。葡萄園亭の下にバティストの赤い煉瓦敷きの小さな圍ひを作り、其處で女たちが午後の間縫物が出来るやうにした。井戸は次の一週間、一生懸命に底を替へて、過去十ヶ年フェルタ中の悪戯子供が埋めた汚物や石ころ等が綺麗に除かれて、透明な水は再び滑車のから／＼といふ喜ばしい響と共に、苔深い手桶に汲み上り始めた。その滑車の響は、意地悪い老婆の笑ひの不氣味な叫びを以てこのあたりを笑つてゐるやうに聞えた。近所の者はその憤怒を沈黙の裡に收めてしまつた。泥棒！泥棒以上だ！何といふ働きぶりだらう！この男は、その逞ましい兩腕に、その觸れる一切の物を變へる二本の魔法杖を持つてゐるのではなからうかと思はれた。

到着して二ヶ月が経つたけれども、彼は土地を數時間も離れたことはなかつた。何時も其處にゐて、頭は常に仕事に夢中になつて兩肩の間に挿まれてゐた。さうして昔のバレットの家は、舊主人の時代に一度も見せたことのない微笑みと媚びとを表にあらはし始めた。



荒藪に包まれてゐた家畜の檻は今周圍に椀と白塗りの粘土こを廻らし、その端に沿うて褐色の牝鶏はよち／＼と歩き、牡鶏は興奮して赤い鶏冠を振つた。家の前の小さな地面には朝顔や蔓の床が花を開き、青塗りの壊れた壺の列は赤煉瓦の腰掛に並んで植木鉢の代りをしてゐる。そして半ば開いた戸からは、新しい水差の棚が、そのエナメル塗りの瓦と、その緑色の水差と一緒に見える。そしてそのきら／＼した反射は、隣りの道を行く人たちの目を盲にするほどであつた。

フェルタ中の者は益々怒りを増してビメントオの處に駈け着けた。「あれは許して置けることかな？ペベタの恐い御亭主はどういふ思惑なんだか？」

ビメントオは額を掻きながら、或どきまぎした様子で皆の言ふことを聞いた。

彼はどうしようと思つてゐたか？彼は己れの所有ならぬ土地を耕すことに極めてゐるこの侵入者に向つて、ただ二言葉だけ言ふつもりだつた。彼に暗示を與へよう、その土地には用がないのだから、馬鹿となることなく其處を見棄て、去るやうにといふ非常に重大な暗示を與へるつもりだつた。が、あの呪はれた男は、あの畑から出て來ないし、又彼のところへ行つて、彼自身の家で嚇すことも出來ない。

で、彼は慎重に彼の出て來るまで待たなければならなかつた。簡単に言へば一寸の辛抱である。彼は皆に、問題の男が小麥も刈らず豆も集めず、すべてバレットの畑に蒔いた一切の物を無駄にするに相違ないといふことを斷言することが出來た。それは悪魔に狙はれるに相違ないだらう。

ビメントオのさうした言葉は近所の人たちの氣持を鎮めた。彼等は、バティストの破滅が早く來るやうにと心の中で念じながらその呪はれた家族の進歩を注視してゐた。

或午後、バティストはヴァレンシアに出掛けた結果を非常に喜びながら歸つて來た。彼は家の中に一人でも忘れ者を置きたくなかつた。バティストは畑の仕事が彼の時間を潰さない時には廢物を集めに町に出掛けることを懸命にしてゐた。彼の娘の中で妹の方は、皆が落ち着いて住むやうになつてから、家では餘り役に立たなかつたが、丁度絹製造工場の女工に這入ることが旨く纏をしたそれは、新しい借地人にひどく満足してゐるらしいドン・サルヴェダアの息子たちが世話つた。御蔭であつた。その翌る日は、ロセツタも、夜の明けぬ内に起きて、そのフェルタの娘たちの大きな指に交つてそのフェルタ繭を紛ぐために、スカートを擴げ肩に掛けた小さな籠を揺りながら町までの道を勇ましく行く女工、——その仲間の一人となることになつてゐた。

パテイストがコバの居酒屋附近まで来た時、一人の男が、隣りの小路から不意に現れて、彼の進む大通りに出て来た。そして彼の方にゆつたりと歩み寄つて、何か話し掛けたいことを知らせるやうにした。

パテイストは立ち止つた。内心、小刀や鋤程この男には用のないことを残念に思ひながら。然し、靜かに落ちついて、彼は家族の者にひどく恐がられてゐる傲然とした表情をして、以前は水車工だつた兩腕を胸の上に組みながら圓い顔を擧げた。

彼はこの男を知つてゐた。話したことはなかつたけれど。それはビメントオだつた。彼がひどく恐れてゐた出會ひが遂に來たのだつた。

無頼漢ビメントオはこの忌はしい侵入者をちらと觀察した。そして、彼の亂暴と悪意とに對して善良な相談をするといふ風な調子を出さうと努めながら、優しい聲で話し始めた。

彼は彼にただ二言葉だけを話したいと思つた。彼はかなりの間さうしようと思つてゐた。が、どうして？彼は一度もその土地を出掛けたことはなかつたのか？

二つの短い言葉、それ以上ではない。

そして彼は彼に老バレットの土地を出来るだけ早く立ち去るやうにと忠告しながらその二つの言葉を話した。彼は彼に希望してゐた人々、フェルタを知る人々を信すべきである。彼の出現したことは犯罪といふべきで、殆んど新しくなつたその家は哀れな人々を侮辱するものである。彼は彼を信じて、家族と一緒に何處か他の場所に移轉しなければならぬ。

パテイストは、ビメントオの言ふことを聞きながら皮肉に笑つた。ビメントオは侵入者の平然とした態度に依つてまごついたらしく、彼を恐れない人間に出會つたことによつて屈辱を感じたらしかつた。

立ち去るのか？フェルタ中に、既に自分のものとなつた土地、自分の汗で育つた土地、且つ家族のために麵麩を得なければならぬ土地を、自分に見棄てさせる事の出来る無頼漢は一人もゐない。自分は平和な人間だ。よく知つて貰ひたい。が、皆で自分を愚弄するならば自分は男らしい氣力を持つてゐる。皆めい／＼の仕事に注意するがいふのだ。何故といふに自分の仕事に注意すればそれだけで充分で如何なる人をも誤ることがないからだ……。

そして彼は嘲るやうに、このヴァレンシア人に背を向けて、自分の道を歩き出した。

フェルタ全體を顛へさせることに慣れてゐるビメントオも、パティストの平然とした振舞に益々混亂してしまつた。

「それがお前の最後の言葉か？」

もうかなりの距離になつてから彼はパティストに呶鳴つた。

「さうだ、最後だ。」

パティストは振り返りもしないで答へた。

そして彼は先に立つて行き、道の曲り角で消えてしまつた。かなり遠方の、バレットの昔の畑の方にあたつて、犬が主人の近附くのを知つて吠え立てゝゐた。

一人取り残されたのに氣づくこと、ビメントオは又その傲慢の氣を恢復した。あゝ！あの老いぼれはどんなに俺を愚弄したか！彼は幾つか呪詛の叫びを擧げて、拳を固めながら、それを脅すやうにパティストの消えた道の角に向けて打ち振つた。

「覺えてゐろ、——覺えてゐろ、畜生！」

狂氣に顛へる彼の調子の裡には、フェルタ中の凝結した憎惡一切が震へてゐるやうであつた。

#### 四

それは木曜日だつたが、五世紀前から習慣に従つて、水訴訟の裁判が、使徒の名を冠した寺院の戸口で行はれようとしてゐた。

ミグライトの大時計は十時少し過ぎを指してゐた。そしてフェルタの住民はぶら／＼して群となつたり、ブラアザを飾る乾いた噴水の大きな池の周圍に腰を卸して、その土臺のまはりに青や白の外套、赤や黄のハンカチ、輝やかしい色の更紗染めのスカアト等で、いき／＼とした模様を作り出したりしてゐた。

他の者も、肥料を充たした藪の籠を積んだ馬の手綱を曳いて到着した。そして街での肥料の收獲に満足してゐた。一方には、空車で、その車を其處に置くことを許し—くれ—巡査にしつこく頼んでゐる者もあつた。又、老人たちは女たちを相手に喋り散らし、若者たちは近所のカフェに出掛けて、一杯のブランディに時間を潰したり、一本三サンティムの巻煙草を燻らしたりしてゐた。

復讐のための不平を抱いてゐるフェルタ中の者はすべて、此處に寄り集まつて、その溜らない鬱憤の鎖を七つの堀割の評議員や裁判官の前でぶちまけるのに辛抱し兼ねて、身振りをしたり、澁面を作つたり、各自の権利を語り合つたりしてゐた。

五十年以上に亘つて、傲慢な喧ましい群集と、この争ひを續けて來た廷吏は、古い緞子の長椅子を置いた。その椅子はゴシック式の門の陰の裡に倒れさうになつてゐるので低い手摺りを附けてあり、それによつて傍聴席の目的に使用されなければならぬ人道の廣場に區切りがついてゐた。

古い赤くなつた使徒の門は、幾世紀といふ年月のためにぼろ／＼になつて、その朽ちた美を太陽の光に向つて擴げ、古代の裁判にふさはしい背景を作つてゐた。それは此世紀前の制度を保護するために工夫された石造の天蓋のやうだつた。

ティンバナム（建築に於ける破風の三角形の部分——譯者）の中には、六人の天使を連れた聖母マリヤが見えてゐた。その天使たちは、窮屈な白の寛衣を着け、綺麗な羽を持ち、頬は肥え重い縮れ毛と燃えるやうな捲毛をして、ヴァイオラ（樂器の名——譯者）、笛、箏、小鼓等を奏してゐ

る。透細工を以て蔽はれた小さな像の花飾り、天使や、王や、聖人は、三つの門の上に重ねられた三つのアーチに沿つて走つてゐた。門の前部を成してゐる厚い頑丈な壁には十二使徒の像が見えるけれども、それは基督自身でも見分けのつかない程に形を損じ、虐待されてゐた。その足は壊れ、鼻孔は破れ、手は折れてしまつて、その巨像の列は、使徒と言ふよりも寧ろ手術臺から逃げ出して、その不具の體を悲しさうに曝してゐる病人のやうに見えた。上方、門の頂上には、教會に光を入れる彩色ゆる薔薇形の窓が、金網に蔽はれた大きな花のやうに突き出てゐた。そして下方には、アラゴンの楯を以て飾られた柱の土臺に沿つた數石が壊れ朽ちて、幾世紀かの摩擦のために、隅も模様も識別されないやうになつてゐた。

この門の荒廢に依つて、騷擾の狀は祭ることが出來た。あらゆる人々がこの數石に接して衝突し合つた。此處で、昔は、不穩なヴァレンシアの亂暴者たちが憤怒に燃え叫びながら奔めき廻つた。そして、エチプトの木乃伊のやうに朽ち磨滅した門の聖人たちは、その壊れた顔を擧げて空を睞めながら、依然として、同盟の革命歌や團結の騒がしい銃聲に聴き入つてゐるかのやうに見えた。

廷吏は法廷を整理して、自らは裁判官を待つために構内の入口に立つた。裁判官は、黒い服を纏ひ、白い草履を穿き、大きな帽子の下に絹ハンカチを捲いてゐたが、その様子は金持の百姓といつた恰好だつた。彼等はめいめいに堀割監督と、正義の時間の前で裁判官の心を自分たちに利益のあるやうに向けようとする執拗な訴訟人たちの行列を供に連れてゐた。

農夫たちは彼等自身の階級から出た裁判官、その評議が如何なる訴願をも容れなかつたこれ等の裁判官を、尊敬の目で以て眺めた。彼等は水の支配者だつた。家々の生計、耕地の營養、それがなければ收穫を生じない時機に適つた灌漑、等は一切、彼等の手に握られてゐた。そして、越え得ざる國境のやうな川に依つて距てられたこれ等廣い平野の人々は、堀割の數に依つて、裁判官を指定した。だつた。

小柄な、瘦せた、腰の曲つた老人——その赤味を帯びて骨張つた兩手は、太い杖に凭れかゝつてゐたが、それはクアル・ド・フェイタルだつた。頑健さうな堂々とした、濃い太い眉の下にやつと見える位の小さな眼を持つてゐるのはミスラタだつた。間もなく、新しく緞の裝飾をした職人服の、圓い頭をした、若いロスカナも來るし、その後から、次々に七人の内残つたファヴアラ

ロベラ、トルノス、メスタラが姿をあらはした。

今や四つの平野の代表者は、全部其處に揃つてゐた。川の左岸にあるもの、四つの堀割を持つもの、ルフアザのフェルタが沼地のアルプフェラの境域に終る鬱蒼とした茂みの道に囲まれるもの、ベニマクレットのいちごと、アルボラヤのかやつり草と、四時中花を絶やさぬ園とを持つたチュリアの右岸にある詩的な地方、——以上四つの代表者がすべて集まつてゐた。

七人の裁判官は、互ひに一週間も顔を合せなかつた人のやうに挨拶した。彼等は寺院の入口の傍で、彼等の事務に就いて話し合つた。

時々宗教上の廣告を以て蔽はれた木の仕切りの口に、何處か地中の洞穴から洩れる濕つぽい氣體のやうな、匂ひを載せたかすかな風がブラアザのむつとした零團氣の中に溶け込んだ。

十一時半、祈禱は終つて、遅れた信心家たちの幾人か寺院の方から出て來てゐたが、その時裁判は始まつた。

七人の裁判官は古ぼけた長椅子に腰を卸した。と、フェルタの人々はブラアザの四方八方から駈けて來て、手摺りの周圍に集まり、藁と、不快な羊毛の臭ひのするその汗ばんだ身體を押し合

ひながら奔めき合つた。そして駭めしい威張り返つた廷吏は、水中の威厳を象徴する銅製の曲杖が先に附いた柱の近くに座を占めた。

七人の評議員は帽子を取つて、両手を膝の間に置き、眼を地上に伏せたまゝの姿勢である。と  
その中の最年長者が、おきまりの宣言を下した。

「開廷いたします。」

しんとした静けさ。群集は、宗教的な静けさを見廻しながら、此處、ブラアザの真中で、寺院で禮拜してゐるものゝやうに思はれた。馬車の響きや、軌道のきしむ音や、すべて近代生活の騒がしさは、自分自身を自分の家に見出す人のやうに、その周囲の急激な變化に少しの注意を拂ふことなく時を感じず何等の改良をすることも出来ないで凝乎と昔のまゝに止まつてゐるこの最も古い建物を、亂すこともなく、觸れることもなく、消え去つてしまつた。

フェルタに住んでゐる人々は、その裁判を誇りにしてゐた。それは正義を司り、猶豫なき刑罰を課した。正直な人々を亂したり惑はしたりする書類には少しも據らなかつた。

印紙を貼つた書類や、脅かす法廷の書記などの居ないことは、自分たちの全然知らない書くと

いふ技術を或迷信的恐怖を以て眺めることに慣れたこれ等の人々にとつて、最も好ましいことだつた。此處では秘書もなく、ペンもなく、宣告を待つ間の不安な時日もなく、恐ろしい守衛もなく、言葉以外に何物もないのだつた。

裁判官は、原告の申立を記憶してゐて、その決心を實行しなければならぬことを知つてゐる者の平靜さを以て、直ちにその宣告を下した。法廷に對して不遜な者は科料を課せられ、宣告に應ずることを拒むものは永久に水の権利を奪はれて餓死しなければならないのだつた。

誰一人としてこの法廷を愚弄する者はなかつた。これは、朝、臣下の争議を解決するためにその宮殿の門前に出て来る善良な傳説の王様の簡単な家長的裁判であり、又そのテントの入口で宣告を下すカピラ統領の法律制度だつた。かくして悪人が罰せられ善人が勝ち、そして平和になるのだつた。

群集は、男も女も子供も、一語をも聞き洩らすまいとして、手摺りに向つて奔めき合ひ、時々、窒息を免れるために、肩を烈しく揺すぶつて身動きした。

原告は手摺りの片側、法廷そのものと同じ程度に古い長椅子の前に現れることになつてゐた。

廷吏は、法廷が當然受けるべき尊敬と調和しない反抗的武器と彼が認めるところの彼等の杖や羊飼ひの棒などを取り上げるのが常だつた。彼はそれ等を前に押しやつて、彼等の手を蔽うたマントと共に、裁判官を距る數歩の處に置いた。そして、若し頭の被り物を取るのを愚圖々々してゐる者があると、そのハンカチを二度ばかり強く引張つて捻ぢ取つた。それはひどかつたけれどもこの狡猾な連中に對しては、さうする必要があるのだつた。

二列に作られた列は絶えず複雑な質問を發した。裁判官は驚く程容易にそれを解決した。

灌溉を各自順當にするといふ規定を以てその任に當つてゐる堀割の番人や灌溉の監督等は、その告訴の事情を組織的に陳述し、被告は辯護人なしに自ら辯護するために現れた。老人たちは、より元氣よく自分自身を表現する方法を知つてゐる息子たちに代辯させ、寡婦は、死亡した夫の友人を連れて出廷し、その男に代辯して貰つた。

南部地方の情熱は、あらゆる場合にあらはれた。

求刑中に、被告は自らを制することが出来ないで叫び出すのだつた。「それは嘘だ！お前の言ふことは悪い拵へごとだ！お前は俺を死目に會はせようとしてるんだ！」

然し七人の裁判官は、これ等の妨害を恐しい眼差しを以て受けた。此處では自分の順番の來るまでは何人も發言することを許されなかつた。で、二度目の妨害をすれば、實に多額の罰金を課せられなければならないのだつた。そして、告訴者の目前で黙つてゐられないその烈しい狂氣に驅られて、執拗に妨害を繰り返す者は、益々多くの罰金刑を加へられた。

裁判官たちは、席を立たないで、嬉々として遊ぶ山羊の群のやうに、顔を組み合した。そして數秒の間、何か囁き合ふのだつた。と、その中の最年長者が、落つついた、而も嚴めしい聲で恰も金が釣錢の不足に困つてゐたかのやうに、何スウ、何ポンドといふ罰金を指定した宣告を下した。而も赤い服を纏つた、羽毛の飾りをして髯を持つた男の護衛を附けた人物を思はせるやうな嚴めしい「裁判」は尙プラアザの中心のあたりを過ぎてゐた。

それは十二時を過ぎて、七人の裁判官たちが、さうした夥しい裁判に疲労したやうな色を見せ出した頃だつた。廷吏は灌溉權の違犯に依つて告發されたパウテイスタ・ポルルを聲高に呼んだ。ピメントオとパテイストとは手摺りを越えた。そして傍聴の人々は今までよりも法廷に近く押し寄せた。

此處には舊バレットの畑地附近に住んだ人たちが多勢來てゐたのだつた。

この裁判は皆の興味を唆つた憎らしい新來者のバティストがその地方の灌溉當番の責任を持つてゐたビメントオから告訴せられたのだつた。無賴漢ビメントオは、選舉に關係し、且つ近所中を鬪鶏のやうに威張り歩いてゐたのでこの法廷を征服してゐた。即ちこの法廷は彼に或種の權威といつた風のものをも與へ、近所の人々の間に於ける彼の勢力を強めた。そして彼は近所の人々から大事にされて灌溉日には饗應を受けてゐたのだつた。バティストはこの不當な告訴に對して呆然と眼を瞠つてゐた。顔色の蒼白いのは憤怒のためだつた。彼は、手摺りに向つて押し合つてゐる見知つた人々すべての嘲笑ふ顔と、敵ビメントオを、憤慨に充ちた腫で噴めた。ビメントオは法廷に現れることに慣れた人らしく傲然とそこいらを歩き廻つてゐたが、彼に對しては、この法廷も、その確然たる權威を餘り多くは持つてゐなかつた。

「申立てよ。」最年長の裁判官は一歩足を出して言つた。この法廷は、一世紀前からの習慣に従つて發言すべき者に向つては、手を用ゐず白い草履を以て合圖することになつてゐたからだつた。

ビメントオは原告の申立を陳述した。恐らくこのフェルタへ新しく來たゞめだらうけれど、こ

の男、即ちバティストは正氣を失つて、水の配分といふことを何でもない事と考へ、そして彼自身のお目出度い意志を満足せしめることが出來ると考へたらしかつた。

彼、ビメントオは、その地方の掘割の權威を代表する灌溉當番として、バティストのために一定の時間を定めて、その小麥に灌溉せしむることにした。その時間は午前二時といふのだつた。然るに言ふまでもなく、彼はその時間に起きることを厭がつて、故意にその順番を延ばし、水が他の者の灌溉に向けられることになつてゐる午前五時になつて、何人の許可をも得ない出水門を擧げ（これが第一の違犯である）、自分の畑地に灌溉を試み、全力を盡して灌溉當番の命令に反抗しようといふ決心したものである。これが第三の、そして最後の違犯を構成する。

三つの犯罪者とされたバティストは虹の七色全部に顔色を變へながら、このビメントオの申立に憤慨してゐたが、遂に自分自身を制することが出來なかつた。

「嘘つき。而も二重の嘘つきだ！」

法廷は、この男が抗議する態度の狂熱と無禮とに對して憤慨して來た。若し沈黙しなかつたならば、彼は科料に處らせれるに相違ない。



然し平和な人間の凝結した憤怒にとつて科料が何であらう！彼は人々の不公平に對し、法廷がその下僕としてピメントオの如き無頼漢にして虚言者を持つたことに對して抗議をしつゞけた。法廷は騒がしくなつた。七人の裁判官は興奮して來た。

科料として四スウ！

パティストは、自分の形勢を悟つて不意に沈黙した。そして科料に處せられることに脅えた。群集の笑聲と敵の吠えるやうな歡笑とが聞えて來た。

彼は、うなだれて、ぢつと身動きもせずにおた。眼は怒りの涙にうるんでゐた。その間に殘忍な敵ピメントオは陳述を終つた。

「被告の申立は。」と裁判官はパティストに言つた。けれども、裁判官たちの眼には抗議を以て彼等の熟考の尊嚴を妨害するために來たこの騷擾者に對しては餘り同情の色が見えなかつた。

パティストは怒りに震へながら、如何に辯護を始めていゝか解らないで口籠つた。何故といふに、その辯護しようとする事實は、彼にとつて、全く正當なことゝ思はれたからである。

法廷はは欺かれてゐる。ピメントオは虚言者であり且つ彼の明白な敵である。彼は彼に向つて

彼の灌溉すべき時間は五時であると語つた。それを彼はよく記憶してゐる。然るに彼は今、それが二時だと斷言した。正しくそれは彼パティストを科料を處するためであり又彼の一家が頼みの綱にしてゐる小麥を枯らすためである。……裁判官は正直な男の言葉を尊重するか？それならば、これは、證人を出庭せしめることは出来ないけれども眞實である。名譽ある裁判官や、すべて善良な人々が、ピメントオのやうな惡漢を信賴するといふことは不可能であらうと思はれる！裁判長の白い草履は、彼が遙かに見た嵐のやうな抗議と無禮とを遮るやうに、人道の四角な敷石を踏み鳴らした。

「黙れ。」

パティストは口を閉ぢた。その間に七つの顔を持つた怪物は又緞子の長椅子の上に首を集めて囁きながら宣告の準備をしてゐた。

「宣告………」と最年長の裁判官が言つた。物音一つ聞えない靜けさになつた。

綱を張つた場所の周圍にゐる人々は皆、自分自身が宣告されるかのやうに、眼の裡に或不安の色を漂はした。彼等は最年長の裁判官の唇に注意してゐた。

「パテイスト・ボルルに、刑罰として二ポンド、科料として四スウの罰金を課。」  
満足の眩きが起つて擴がつた。或老婆は、群集の長い笑聲の中に「萬歳！萬歳！」と呶鳴りながら拍手を始めた程だつた。

パテイストは恰もまさに戦はうとするかのやうに頭を下げて、眼も見えないらしく法廷を出て行つた。ピメントオは慎重に後に残つた。

若し人々が、通りの出口で彼のために道を分けなかつたなら、必ず彼はその鐵拳を揮つて、即座に憎むべき群集を打ちのめしたであらう。

彼は去つた。彼は主人の處へ、この出來事を話し、この人々の惡意を話すために出掛け、彼のために自分の生活を更に烈しくすることを誓つた。そして一時間の後には、もう主人たちの親切な言葉に依つて落ちつかされて、自分の家の方へ歩き出した。

溜らない苦しみ！肥料を積んだ荷車や、驢馬の上に堆く空の籠を載せた荷車の傍近く歩きながら、彼はアルボラヤの低い路で裁判の際に傍聴してゐた多くの人々に絶えず出會つた。

彼等は、彼が嘗て挨拶したことのない隣人であり、仇敵であつた。

彼が彼等の傍を通り過ぎる時、彼等は黙つたまゝ、その鹿爪らしさを保たうと努めた。が、惡意を持つた喜びだけが彼等の瞳の裡に光つてゐた。然し彼が傍を通り過ぎると、彼等は彼の脊後に傲慢に笑ひ崩れるのだつた。そして彼は一人の若者が、裁判官の嚴肅な調子を真似してかう叫んでゐる聲をさへ耳にした。――

「科料として四スウ！」

遙かに彼は、コバの居酒屋の戸口に、敵のピメントオが、手に土製の壺を持ち、一群の友人にぐるりを取り圍まれて、恰も告發された者の抗議と不平とを真似してゐるものゝやうに、身振りをしたり笑つたりしてゐるのを見た。彼の宣告はフェルタにとつて歡喜の題目だつた。――皆は笑聲を立てゝゐた。

神よ！今彼、靜かな、優しい父親は、何故人間が殺戮をするかといふ理由を理解した。

彼の鐵拳は顫へた。そして彼は兩手の内に殘忍なむづ搔ゆさを感じた。彼はコバの居酒屋の方へ歩を弛めた。彼等が彼の顔を見て嘲弄するかどうかを見たかつたのだ。

彼は、不思議に珍らしく、初めて居酒屋に這入つて、仇敵たちと一緒に頭を合して葡萄酒の一

杯を吞まうとさへ考へた。然し、二ポンドの科料はこゝろを重苦しくした。で、彼は自分の大きな氣持を悔いた。それは息子たちの草履に對する陰謀だつたのだ。恐らくそれは、小さい者のために新しい草履を買はうとしてテレサが蓄へた少しづゝの塵のやうな金全部をふいにしたかも知れなかつた。

彼が居酒屋の前を通る時、ピメントオは壺に満たすといふことを口實として姿を隠した。そしてピメントの友人たちはバティストオを見ないやうな風をした。

何事に對しても用意周到な男、さうした彼の容子が近所の人々に畏敬の念を起させた。

然しこの勝利は彼を溜らなく悲しくさせた。これ等の人々は彼にとつて、どんなに憎らしいことだらう！ ヴエガ（譯者の註前にあり）全體が二六時中罵りながら脅かしながら彼の眼前に立つた。これはこの世のものではなかつた。晝間でも、彼は、近所の人々との接觸を避けながら、自分の畑地を踏み出すことをしなかつた。

彼は彼等を恐れてはゐなかつた。然し慎重な人間らしく争論を避けてゐたのだつた。

夜、彼は眠つても休まらなかつた。屢々犬のかすかな吠聲にも寢床を飛び起きて、手に銃を持

ち、家を駆け出した。そして一度ならず、隣りに接した小路の間を走つて行く黒い影を幾つか見たとさへ信じてゐた。

彼はその收穫のことを心配した。一家の望みにしてゐる小麥、その成長が他の農家の黙つてはゐるけれども羨ましさうな眼差しを以て眺められてゐる小麥のことを心配した。

彼はピメントオの威嚇を知つてゐた。ピメントオはフェルタ中の後援に依つて、その小麥を、蒔いた彼に刈らせてはならないことを誓つたのだ。で、バティストは、その畑地のこと、太陽の光の下に次第に成長して、熟した小麥の黄金色の束に變らなければならぬ青々とした波の列のことを考へて殆んど子供たちのことも忘れてしまふ位だつた。

沈黙し凝結した憎しみは、彼を途中何處までも追ひ廻した。女たちは唇を捻ぢて横にそれ、フェルタの習慣通り、彼に挨拶しようとはしなかつた。道に接した畑で耕作してゐる男たちは、それとなくバティストに傲慢な表情を向けながら互ひに呼び合つた。又、小さな子供たちは、遠くの方から、「人殺し！ 猶太人！」と、恰もその二つの言葉だけがフェルタの敵を呼ぶにふさはしいかのやうに叫んで、それ以外に他の罵聲を加へなかつた。

あゝ！若し彼が巨人の拳と、僅かな友しか持たない男の表情と、逞ましい肩とを持つてゐなかつたならば、ヴェガ全體がどんなに早く彼を處分してゐたことだらう！彼等はめい／＼他の者が先づ敢てするだらうといふことを望みながら、自らは彼を遠くから侮辱することを以て満足したのだつた。

パティストは、この孤獨が彼の内心に掻き立てた悲しみの眞中で一つの淡い満足を覺えた。といふのは、もう自分の家に近くなつて、彼の近づいたことを嗅いだ犬の鳴聲が聞える頃、彼は一人の子供、成長し過ぎた位の若者が、兩足の間に草刈鎌を持ち、傍に糞を刈つた束を幾つか積みながら、堤の傾斜に腰を卸してゐるのを見た。彼は立ち上つて彼に挨拶した。

「今日は、パティストさん！」

で、この挨拶、彼に物言ふ時の臆病な少年の顔へ聲が、パティストには快く響いた。

この子供のこの親しみは何でもない事柄だつた。而も彼は熱病の患者が水の冷たさを感じるやうな印象を覺えた。

彼は優しさを籠めて青い瞳を瞞め、烏毛の外套に蔽はれた微笑の漂ふ顔を潰めた。そして、そ

の子供が誰かといふことに就いて記憶を探つて見た。やつと彼は、彼がフェルク中で尊敬されてゐる盲目の羊飼ひ、老トムバの孫であることを思ひ出した。それは老人が飼つてゐる羊群の持主たるアルボラヤの屠殺者に、召使として奉公してゐる善良な少年だつた。

「有りがたう、ね、有りがたうよ。」彼はその挨拶がわかつて呟いた。

そして彼は先を急いだ。彼を迎へた犬は彼の前に飛び上つたり彼の織織のズボンに身體をこすりつけたりした。

小屋の戸口には妻が辛抱し切れないで、子供たちに圍まれて待つてゐた。食事の時刻がもう過ぎてゐたからだつた。

パティストは畑地を眺めた。と、一時間前に、水の裁判所で囚へられた狂熱が悉く、忽ちのうちに甦つて、荒れ狂ふ浪のやうに、彼の意識を浸した。

彼の小麦は潤れてゐた。彼はただそれを見てゐなければならなかつた。その葉は凋み、それ程につやく／＼してゐた縁は今黄色く見透せるやうになつた。灌漑が彼を失敗させたのだ。ピメントオが、その狡猾な悪計を以て彼から奪つた灌漑の順番は、十五日経過しなければ彼のものとは

ならないだらう。何故といふに水は不足してゐるから。而もこの不幸の頂上に、呪はれた罰金のポンドとスウとが課せられたのだ。ああ神よ！

彼は少しの食慾をも催さない食事をしながら、妻に法廷での出来事を話した。

哀れなテレサは、箱の底の金を守つてゐる靴下の結び目が弛んだに相違ない時に、心臓の喘ぎを感じる田舎女の感動を以て、眞青に顔を變へながら夫の話に耳を澄ました。ああ！皆は彼等を滅ばさうと決心してゐるのだ！何といふ悲しい食事だらう！

そして彼女は、匙を、米のフライ鍋の中に抛り出して涙を呑みながらさめ／＼と泣き出した。やがて彼女は不意の激動のために眞赤になつて、戸口の前方に見える廣漠とした平野、白い農家と緑の浪とを持つた平野を眺めやつて、兩腕を伸ばしながら喚いた。——「悪者！悪者！」

父親の澁面と母親の喚聲とに脅かされた小さな子供たちは、食事をするのを恐れてゐた。彼等は互ひに躊躇と驚愕とを以て兩親を交る交る眺めて、何かをしてゐるためにめい／＼の鼻を突つてゐた。そして最後には皆が母親を眞似て米の上に泣き伏してしまつた。

泣聲の合唱を聞いて苛立つたパテイストは荒々しく立ち上り、小さな卓を蹴倒すばかりの勢で

家を飛び出した。

何といふ午後だらう！小麥の旱魃と罰金の記憶とは、二匹の狂犬のやうに彼の心臓をかきむしつた。一匹が彼を噛み疲れて寝ようとする頃には、他の一匹が全速力で来て齒を當てるのだつた。

彼は思ひを轉換しよう、仕事をして自分を忘れようと思つた。そしてさし迫つた仕事、家畜檻の中に建てつつあつた豚舎に氣を籠めて没頭した。

が、その仕事は少しも捗らなかつた。彼は泥壁の間に窒息しさうになつてゐた。彼は畑が見たかつた。自分の不幸を眺めて全く屈從し悲しみの盃ををり、まで呑み干すことの必要を感じる者、それに似たのが彼だつた。で、彼は粘土を一杯手に握つたまま、裏庭から出て、長細い一劃の涸れた小麥畑の前にちつと立ちとまつた。

數歩のかなた、道路の端には、赤い水を漲らせて、ざわ／＼と音立てる堀割が流れてゐた。

フェルタに生命を與へる血潮は、憎まれるといふ不幸を持たない他人の畑のために、遙か遠くを流れてゐた。そして此處には、彼の可哀さうな小麥が、涸れて元氣なく、その緑いろの頭を垂れて、近も水に向つて、近く来て冷い接吻で撫でて呉れるやうにと合圖をしてゐるものやうだつた。

哀れなバティストには、太陽が平生よりも熱く燃えてゐるやうに思はれた。太陽は地平線に傾いてゐたけれども、この哀れな男は、その光が頂上にあつて、あらゆる物が燃え上つてゐるやうに思はれた。

彼の土地は龜裂を生じて扭れくねつた溝となつて分れ、空しく水の這入るのを待ち受ける無数の口を作つてゐた。

その小麦は次の灌漑日までその涸渴を堪へはしないだらう。死に、枯れて、一家の者の麵麩とはならないだらう。

而も、このひどい不幸に加へて、何よりもつらい罰金が課せられた。そして人々は人間が滅びて行けば過失を指摘しさへするのだ！

彼は狂ほしくその細長い畑地の周囲を行つたり來たりした。ああ、ビメントオ！悪漢中の悪漢！若し警察といふものがなかつたならば！

そして破船した水夫が飢渴に苦しみながら夢幻の間に、無数の宴會の卓と、澄み切つた泉とのみを見るやうに、バティストは、莖が青々として眞直に伸び、水が傾斜した堤の口からどくどく

流れ込みながら、乾上つた土をくすぐる感じに柔かく笑つてゐるかのやうに、明るいさらさらといふ音を立てて擴つてゐる小麦畑をおぼろ氣に見たのだつた。

太陽が沈むとバティストはほつとした安堵を感じた。永久に太陽が沈んでしまつて、收穫が救はれたかのやうに。

彼は畑を去り家を去つて、ゆつくりした足取りで無意識に下の道をコバの居酒屋の方へ歩き出した。警察のことも念頭から去つて、彼は、その居酒屋から余り遠くに行つてはゐない筈のビメントオと會ひさうな事を、或る快感を以て受容れた。

道傍を彼の方に向けて、町の工場から歸る少女たちが腕に籠を持ち、スカートを閃めかしながら足早に歩いて來た。

青い影がフェルタの上に擴がつてゐた。うしろの暮れ行く山々の上には、雲が何處か遠くの火のあか／＼とした光りを受けて赤くなつてゐた。海の方には、初めての星が底知れぬ青色の中に顔へてゐた。犬は寂しさうに吠えて、蛙やこぼろぎの單調な鳴聲が、廣々した平野の道といふ道を遠のいて行く眼に見えぬ車のごたごたした轍の音と交り合つて聞えた。

パテイストは自分の娘が他の朋輩と分れてゆつくり歩いて来るのを見た。然し一人ではなかつた。彼には娘が、稍々離れてはゐるけれども彼女と同じ方向について来る一人の男と話をしてゐるらしく思へた。フェルタでは許婚の者がきまつてさうして歩く。そして、彼等にとつて接近は罪のしるしだつた。

その男はパテイストを道の真中に見つけると歩みを弛めて、ロセツタが父親に近づいた時には離れて立ちとまつた。

パテイストはその見知らぬ男に、彼が何者か解る位の距離に進み出て貰ひたかつたので、身動きもしないで立つてゐた。

「今晚は、パテイストさん」。

それは晝間彼に拶揆したのと同じ臆病な聲だつた。老トムバの孫息子だつた。この意氣地なしの息子はこの道を行つたり來たりして彼に挨拶したり、優しい愛らしさを以て彼の前に飛び出したりすること以外には何もしないらしかつた。

彼は娘を見た。彼女はその視線を受けて眞赤な顔をして俯目になつた。

「うちへ行かう、家へ……お前のことを極めよう！」

そして彼は、ラテインの父親、子供の絶対支配者、愛情よりも恐怖を惹き起しがちの恐ろしい威厳を以て、ぶるぶる顫へたロセツタの後から歩いて行つた。彼女は家に近づくにつれて、屹度鞭で打たれるだらうといふことを豫感した。

彼女は勘ちがひしてゐた。その瞬間に、彼女の哀れな父親は、世の中に、その作物、——涸れ渴いて彼に向つて泣き叫び死を免れるために一口の水を乞うてゐる惨めな病んだ小麥より外は一人として子供といふものを持つてゐないのだつた。

で、そのことを彼は妻が夕食の用意をしてゐる間に考へてゐた。ロセツタは注意を惹かないために、急がしい風を装つて立ち廻りながら、絶えず一瞬ごとに恐ろしい怒り聲を浴せられることを豫期してゐた。が、パテイストは、燻製の鱈と馬鈴薯とを盛つた土製の皿を蠟燭の灯に依つて、がつがつとした容子で眺めてゐる若い子供たちすべてに圍まれた、小さな低い食卓の前に腰を卸して、自分の畑のことを考へつづけた。

妻は矢張り罰金のことを思案して溜息をしてゐた。言ふまでもなく、皆が彼女から捲き上げよ

うとする法外な金額と、全家族が食つて行く安樂とを比較してゐるのだつた。

パティストは子供たちの貪り食べるのを眺めて殆んど食べなかつた。長男のパティステエトでさへ弟妹たちの麵麩の一片を、そつと巧みに奪つて自分が食べるやうな始末だつた。ロセツタはと言へば、恐怖が恐ろしい食慾を起させた。

その時まで、パティストは彼が双肩に擔つてゐる重荷を理解したことがなかつた。一家の貧しい生計を呑み込まうとして開けたこれ等の口は、若し、戸外の畑が干上つたならば食べるものがなくなつてしまふに相違ない。

そしてすべては何のためか？人間の不公平のためだ、法律が正直な者を憫ますために作られてゐるからだ……。彼はこれに堪へるべきではない。彼はより、以上の危険に對してさへ自らを防備し得ることを感じはしなかつたか？彼は彼等に對して、彼等を扶養する義務を負つてはゐなかつたか？彼は彼等に食物を與へるためなら泥棒にも成ることが出来た。それに何故、すべて自分の物である作物に對して、盜まうとするのでなく、生命を與へようとする時に際して屈辱しなければならなかつたのだらうか？

つい其處で、さわざわと音立てながら他人のために供給されてゐる堀割のことを念頭に浮べると、それは彼を惱ましくさせた。法律がそれを望んでゐるためにその利益を受けることもなく、彼の戸口そのものから生命が去つて行くに相違ないといふことの腹立たしさを彼は感じた。

突然、彼は決意してそれを實行するために脚下にある一切の物を蹂躪する人の様に立ち上つた。

「灌溉しよう！灌溉しよう！」

妻は脅えた。何故といふに彼女は忽ちにこの絶望的な決心の危険すべてを察したからだつた。どうか、お願いだから、パティストよ！……皆は恐らく彼に更に多額の罰金を課するだらう。彼の反逆に依つて立腹した法廷は永久に彼から水を沒收してしまふだらう！それを考へなければならぬ……待つ方が遙かにいいのだ。

然しパティストは、妻の言葉を聞かないで、一旦平衡を失したならば容易に恢復しない遲鈍な人間の何時までも續く憤怒を特つてゐた。

「灌溉！灌溉！」

そしてパティステエトは、元氣よく父親の言葉を眞似して大きな鋤を拾ひ上げ家から駈け出し



た。妹や小さな子たちが後を継いで行つた。

彼等は皆この仕事を手傳はうとした。それはお祭のやうな騒ぎだつた。

一家中の者は、革命によつて自由を恢復した人々のやうな歡喜を感じた。

彼等は暗黒の中にさらさら流れる堀割に近づいた。廣い平野は青い影の中に没し、藪は黒くさわめいてうねり、星は空に瞬いてゐた。

パティストは膝までの深さを持つた堀割の中に這入つて、水を支へてゐる門を下げた。その間に息子や妻や、そして娘までが、鋤を以て傾斜した堤を攻撃した。隙間が出来て、そこから水は溢れ出した。

家族全體が冷たさと幸福とを感じた。

土は、心臓に觸れる食るやうなぐる、ぐるといふ音を立てて楽しさうに唄つた。「飲め、飲め、哀れなものよ！」そして彼等の足は、水が隈なく届いたかどうかを見るために畑の一方から他方へと屈んで歩く時に泥に埋まつた。

パティストは禁ぜられたものの歡喜を生じる残忍な満足を以て呟いた。どんなに重荷が取れた

ことだらう！「裁判」が又來るかも知れない、そして何でも思ひのままをするがいい。畑はもう潤つた、——これが第一のことなのだ。

彼は、孤獨に慣れた人間の鋭い聽覺を以て、隣りの藪の中に或奇妙な物音を聞いたと思つた。で、家に駆け込んで新しい銃を取つて直ちに引き返して來た。

片腕に武器を持ち指を引金に當てて、彼は一時間以上も堀割の門近くに立つてゐた。

水は早くは流れなかつた。それはパティストの畑に擴がり、畑は水腫に罹つた人間の渴きを以て飲み又飲んだ。

恐らく下の方では不平を言つてゐただらう。ピメントオは灌漑當番としてその不平を聞き、近所を視察しながら、この潜越な法律違反に立腹してゐたことだらう。

然し此處には、その作物の哨兵、家族の争闘のために絶望した英雄のやうなパティストが、畑に立ち働いてゐる妻子を守りながら、灌漑を擴げてゐた。そして門を擧げて水路を元のやうにしようとした最初の者に發砲する用意をしてゐた。

堀割の真中に身じろぎもしないで突つ立つたこの巨人の態度は實に物凄かつた。この黒い妖魔

の内には、姿を見せた者を、それが何人であらうとも射撃するといふ決意を見ることが出来た。それは、誰も隣りの藪から敢てあらはれようとしなかつた程だつた。で、畑は一時間何等の抗議を受けることもなく水を吸つた。

そして、次の事はこれよりも更に不思議なことである。——即ち次の木曜日、灌漑當番のピメントオは水の法廷の前に彼を呼び出さなかつた。

フェルタはこんな事を言ひ傳へた。パレットの昔の百姓家で、唯一つ價值のあるものは二つの銃身を以た鐵砲である。それは、その闖入者が、ヴァレンシア人のアマリカ的情熱を以て最近買ひ求めたものである。そしてその男は自家の戸の裏に、羨望を起させ畏敬を喚ぶ新しい武器を置くためには、喜んで彼自身の麵麩を犠牲にするのである、と。

## 五

毎朝、曉方に、バティストの娘のロセツタは、眠氣に重い眼をして床を飛び出した。そして兩腕を優しく曲げて伸ばした。それが彼女の薔薇色にしたやかな身體を揺り動かした。それから彼

女は家の戸を開けた。

井戸の滑車がきしきしと鳴り、夜戸外を駈け歩いてゐた汚い小犬は、嬉しさうに吠えながら彼女のスカートのあたりに跳ね廻つた。ロセツタは名残りの星明りの中で、上の方を常春藤の濃い茂みで蔽はれたその圓い暗い穴から曳き上げた冷たい桶の水に顔と手とを突つこんだ。

それが済むと、彼女は蠟燭の明りの中で、ヴァレンシアへ出掛けるための準備をしながら、家中を動き廻つた。

母親は、寢床の中から、彼女を見ないであらゆる暗示を與へた。彼女は夕食の残り物を持つて行くことも出来る。——それは棚の上に見つけた三匹の鱒でも充分だらう。そして、何時かのやうに皿を壊さないやうに注意するがいい。ああ！それから糸や針や、小さな子供のために幾つかの草履を買つて來ることも忘れてはいけない。破壊的な子供よ！……小さな卓子の抽出しから金を探し出してもいい。母親はさういつた風の暗示を悉く與へた。

そして母親が寢床に寢返りをして、その部屋の暖かみに快く抱かれ、半時間ばかりを、高く薪を立てる大きなバティストの傍近く寄つて眠らうとしてゐる間に、ロセツタはその出發の準備を

つづけてゐた。彼女は貧しい辨當を籠に收め、太陽がその色を奪ひ取つたかと思はる淡い金髪に櫛を當て、それから頃の下にハンカチを結んだ。出掛ける前に、彼女は、皆一つ部屋の床に眠つてゐる小さな者がよく蒲團を着てゐるかどうかを、長女らしい優しい懸念を以て眺めやつた。彼等はそこに、一番大きい者から一番小さい者まで、——大きく成り過ぎた位のバテイステエトから、オルガンの鍵のやうにまだはつきり物の言へないちびまでが一並びになつて横たはつてゐた。

「さよなら、今夜まで！」と勇敢な娘は叫んだ。そして片腕を籠の把手に通しながら、家の戸を閉めて下に鍵を掛けた。

もう夜が明けてゐた。曉の青白い光の中に、労働者の行列が小路や大通りを通つて行くのが見られた。その皆が町の生活に曳きづられて同じ方向に歩いてゐた。

優しい紡績女工の群は平らかな足取りで、右の腕を強い權チキのやうに空中を切つて元氣よく振りながら進んで行つた。そして皆、どんな背の高い若者でも隣りの畑からぞんざいな冗談を以て挨拶する程、絶えず一緒になつて高い聲を立ててゐた。

ロセツタは町に一人で歩いて行つた。この哀れな娘は彼女の友達——彼女の家族をそれ程までにひどく憎らしく思つてゐる人々の娘や妹などをよく知つてゐたのだつた。

彼等の數人はこの工場で働いてゐた。で、この哀れな小さな黄色い髪の娘は、一度ならず、勇氣を見せてただ引搔くことに依つて自分の身を守らなければならなかつた。彼女の油断に乗じて彼等はその辨當籠にきたない物を入れたり、彼女に幾度となく修繕した土製の皿を壊させたり、又水車場内では、繭が浸してある煙たい釜の上に彼女を押しつけようとしないでその傍を通り過ぎることはなかつた。さうして彼等は彼女を乞食だと言ひ、而もその譴辭を彼女にも彼女の家庭にも當て彼めた。

途中で彼女は復讐の神から遁れるやうに彼等から遁れた。そして會社の内部にゐる時だけ安心した氣持になつてゐた。その會社は市場に近い醜い古い建物で、一世紀前に水色に描かれたその正面には、剥げかかつた繪具と龜裂との間に、まだ、薔薇色の脚と、浮彫の遺物たる銅色の横顔と宗教的な繪とが残つてゐた。

一家中でロセツタは最も父親に似てゐた。彼女は、バテイスト自身が言つた通り仕事に對する

狂熱を持つてゐた。繭の浸された釜の沸々とした蒸氣は、眼をほてらしながら頭のあたりに立ちこめる。けれども彼女は、常に自分の位置を動かさないで、煮え返る湯の底から、キヤラメルの冴へた色をしたやはらかな絹の囊のほぐれた端を手繰り出すのだつた。その絹の囊、つまり繭の内部では、勤勉な蟲、貴重な絲を吐く幼蟲が、蝶に化するために豊かな牢獄を拵へたがため死んだばかりのところだつた。

大きな建物全體に労働の響きが漲つてゐた。それは聲が遠方に聞える廣漠とした平野の静けさに慣れてゐるフェルタの娘たちにとつては耳を聳するばかりに喧ましく且つ退屈だつた。下の方では蒸氣機關が多く、管を通じて傳はる恐ろしい唸るやうな響きを立て、滑車や車輪は地獄のやうな呻きを立てて廻轉した。而も女工たちは、その喧騒が足りないかのやうに、昔からの習慣によつて、*Padre nuestro, Ave maria, Gloria Patri*などの歌や日曜日の朝から晩までフェルタのあたりに漂ふ合唱と同じやうな間に挿む唄を、鼻聲で合して唄つた。

これは彼女等が唄ふ時に笑ふのを邪魔もせず、又祈禱の間に小聲で罵り合つたりするのを邪魔もしなかつた。何故と言ふに農家を支配する厳格な壓制のために奴隷化され、且つ先天的因襲に

依つて男子の面前で眼を伏せることを餘儀なくさせられてゐるこれ等の色の黒い娘たちは、束縛なくして一緒に集まる時は全くの悪魔となつて、彼女等が車力や路傍の土方から耳にした一切の事を口にして快を貪つてゐたからだつた。

ロセツタは皆の中で最も無口で最も勤勉だつた。注意を仕事から逸らさせないために彼女は唄を唄はず、喧嘩をせず、そしてあらゆる事を驚くほど早く覺えて、數週間の内に三リアル（譯者註——リアルは日本の約二十五錢）を得るほどになつた。それは殆んど最高の日給だつたので皆から非常に羨ましがられた。

晝食時になると、これ等のだらしない娘の群は工場から飛び出して、その土製の皿に詰めて來たものを、がつがつと食つた。彼女等が、人道や直ぐ傍の入口に忘れ組を作つて、何でもなく冗談に悪口した男に傲慢な視線を向けながら物を言つたり仕返しに恥知らずの言葉を報いようとしてたりして挑戦してゐる時、ロセツタは、工場の隅に居残つて、河の右岸の、他のフェルタから來た、そして舊バレットの物語や、その朋輩の憎しみなどに就いては、少しの注意をもしてゐない一三人の娘と一緒に床に腰を卸してゐた。

初めの數週間、ロセツタは夕方になつて、同時に歸る時間が来るのを、或恐れを以て迎へた。自分と同じ方向に歸る朋輩を恐れながら、彼女は暫く工場内に居残つて、彼女等が、卑しい笑聲を立て、スカートを閃めかし、思ひ切つて下品に振舞ひ、健康の臭氣、頑丈な四肢の臭氣を發して旋風のやうに先に歸るのを待つた。

彼女はゆつくりと、冬の冷たい夕暮の町の通りを歩いて、母親のために買物をし、灯の點き始めた商店の窓の前に口を開いて立ち止り、そして漸く橋を渡つて、アルボラヤの道に行くために郊外の暗い狭い小路に這入つた。

或距離まではすべてが無事だつた。然し、彼女が不思議な囁きのある、そして彼女の傍を通りながら沈んだ聲で「今晚は」と挨拶する黒い脅かす影のある眞暗なフェルタに這入つてからは、恐怖湧き起つて、彼女の齒はがたがたと鳴つた。

而もそれは、沈黙と暗黒とが彼女を脅かすのではなかつた。彼女はそんな事には全くの田舎娘らしく慣れ切つてゐた。若し道で誰にも會はいといふことがたしかに解つてゐたならば恐らく彼女は心配をしたかつたらう。その恐ろしさの内、彼女は決して他の朋輩のやうに、死のこと

を考へたり、魔法使だの幽霊だの、事を思つたりはしなかつた。——彼女を脅かしたのは生きて人間だつたのだ。

彼女はだんだんに募つて来る恐怖を以て、工場で耳にした或フェルタの話と思ひ出した。小さな娘たちの抱いてゐる恐怖は、ピメントオヤ、その他コバの居酒屋に群れた無頼漢のことだつた。何處でも出来るところで娘たちを掠奪して彼女等を堀割に投げ込んだり、乾草置場の背後に倒したりする冷酷無情な男のことだつた。そして工場に行くやうになつてから最早無邪氣でなくなつたロセツタは、その想像をほしいまゝに逞ましくして、遂には考へられる限り恐ろしい事を考へた。そして彼女は、自分がそれ等怪物のやうな誰かに暗殺されて胃を裂かれそれが血潮に染まつてゐるのを見た。恰も兇惡な不思議な人殺しに依つて胃を引き抜かれ金持のための妙薬を作るに用ゐられたフェルタの傳説にある子供のやうに。

冬の黄昏、うす暗く、時には雨の降る中をロセツタは道の半ば以上を全身顫へながら歩いた。が最も残酷な險所、最も恐ろしい障壁は、殆んど最後のところ、自分の家の近くにあつた、——有名なコバの居酒屋がそれだつた。

其處は猛獸の巢だつた。これは往來中の最も人氣のある最も明るい場所だつた。騒がしい話聲どつと起る笑聲、ギタアを弾く音、高い嗚り聲と一緒になつた唄などが戸を洩れて聞えた。その戸は、爐の口のやうに、四角な赤々とした光りを黒い路上に投げて、その中に奇怪ないろいろな影がうごめき廻つてゐた。けれども哀れなロセツタは、この近くまで来て、食人鬼の巢の前に来たお伽噺の女主人公のやうに顫へながら、心がきまらないで立ち止つた。この建物のうしろを廻り、通りの境をしてゐる堀割の中に這入り、傾斜した堤のうしろに隠れてこつそり逃げようとして、この原を通り抜ける用意をした。泥酔と野蠻の騒ぎを立てゝゐるこの赤い咽喉の前を通らなためにはどんな事でもする氣になつた。

やつと彼女は心を極めて、高い斷崖から身を投げる人のやうに氣をひき立てながら、素早く、軽い足取で、力が這入らないやうに身體を宙に浮かし、堀割の端に沿うて居酒屋の前を通り過ぎた。

彼女は一つの呼吸、一つの白い影だつた。コバの客のどんよりした瞳は、それに氣のつく餘裕を與へられなかつた。

酒場を過ぎると、彼女はひた走りに走つた。誰かがうしろから迫つて来るに相違ないと思ひ、その強い前足が彼女のスカウトに觸れる感じを思ひながら。

彼女は自分の家の方に犬が吠えるのを聞くまでは氣が鎮まらなかつた。醜い癖に、勿論對照の意味からであらうが「朝の星」と呼ばれてゐるその犬は道の真中に飛び上つて彼女を迎へながらその手を舐めた。

ロセツタは途中の道で遭遇する恐怖を家の者に話したことがなかつた。この哀れな少女は落ちついて家に這入り、誰か友達と一緒に歸つたと話すことに依つて勇ましく機に應じながら、心配さうな母親の質問に、靜かに答へた。

この女工は夜父親が途中まで来てくれることを望まなかつた。彼女は附近の人々の憎惡を知つてゐた、——喧嘩好きな人々を客としたコバの居酒屋が彼女を慄然とさせた。

而も翌る日彼女は、歸り道に同じ恐怖に惱まされるために工場へ返つて行くのだつた。唯一の間もなく春が、その日長と青白い黄昏の光とを以て遣つて来て、それが日の暮れない内に家に歸ることを彼女に許してくれるだらうと思ふことのみで慰められてゐた。

一夜、ロセツタは或安心を覺えた。彼女がまだ町の近くにゐる時、一人の男が路上にあらはれて彼女と同じ歩調で歩き出した。

「今晚は！」

そしてロセツタが道の縁となつてゐる高い堤を歩いて行くと、その男は下の、車輪のために深く窪んだ溝の間を、赤煉瓦や、皿のかけらや、硝子片のやうな物にまで躓きながら歩いた。それ等は、先見の明ある人々がそれで以て全で素性の違つた穴を埋めようとしたものだつた。

ロセツタは少しも心配の色を見せなかつた。彼女はその男が挨拶をしない前から、それが誰であるかを知つてゐた。彼は羊飼ひの老トムバの孫、トネットだつた。——アルボラヤの屠殺者のところに奉公してゐる人のいい少年で、女工たちは、道で彼に出會ふと笑ひこけて、どんなに彼が顔を赧めるか、どんなに一寸した言葉にも顔をそむけるかを見て面白がつてゐた。

それ程までに臆病な少年！彼は世の中に祖父の外に一人として親戚を持たぬ獨りぼつちで、日曜日にも働き、主人の畑地のための肥料を集めにヴァレンシアに行くばかりでなく、家畜を屠殺するのを手傳ひ、土地を耕し、そして金持の農夫のところへ肉を運んで行つた。それはすべて

彼と彼の祖父とが食ふため、又彼が主人の古いぼろ／＼になつた着物を着せて貰ふためである。彼は煙草を吸はなかつた。コパの酒場へ這入つたことも生れてから二度か三度しかない。そして日曜日に、若し自分の勝手に出来る時間があつたならば、他の連中のやうに、ルボラヤのプラアザにうづくまつて、無頼漢たちが手毬を弄んでゐるのを眺めるやうなことをしないで、野原に出て當てもなく網細工のやうに入りくんだ小路をさまよひ廻つた。そして若したまたま小鳥の群つた木に出會ふことがあれば、彼はこの空の浮浪人たちの羽ばたきや囀りに夢中になつて立ち止るのが常だつた。

人々は彼の裡に、羊飼ひの祖父の不思議な偏狭性の或物を見た。すべての人が彼を可哀さうな馬鹿、臆病な愚圖として認めた。

女工のロセツタは連れがあるので元氣づけられた。彼女は誰か男が自分と一緒に歩いてゐれば多少安全だつた。而もそれが信頼を唆るトネットである場合には尙更さうだつた。

彼女は彼に話し掛けて、何處から來たのかと訊ねた。すると若者は曖昧に彼一流のおどおどした調子で「そこから……そこから」と答へた。そして、それだけの言葉が精一杯だつたかのやうに

黙つてしまつた。二人は黙つて道を歩いて、小屋の近くで別れた。

「おやすみ、有りがたう！」と娘は言つた。

「おやすみ。」

トネットはかう答へて村の方へ歩いて姿を消した。

これは大した出来事ではなかつた。彼女の恐怖を消してくれた氣持のいゝ出会い、ただそれだけのことだつた、けれどもロセツタは、その夜夕食を済まして、その老トムバの孫のことを思ひながら寢床に這入つた。

今になつて彼女は、彼女が朝途中で幾度かこの少年に出會つたことを思ひ起した。而も、皮肉な他の女工たちの注意を惹かない程度ではあつたけれど、彼は何事も彼女と同一歩調を保たうと努めてゐたらしく彼女には思はれた。時々、彼女が不意に顔を振り向けると、彼女をぢつと覗めてゐる彼が喫驚したことがあるやうにさへ彼女には思はれた。

そして娘は、恰も彼女が繭を紡いでゐるかのやうに、その記憶のほぐれた端を掴んでそれを引き出し又引き出して、彼女の生涯に於ける、トネットに關係ある一切の事を想ひ起した。——初

めて彼を見た時のこと、彼女は彼が女工たちに嘲弄されるので溜らなく同情する衝動を感じた。

その嘲弄を受けて、彼は、この隊を成したハアピイ（譯者註——ギリシヤ神話中にある、女の顔と身體、鳥の翼と爪とを持つて生物を捕へて食ふ怪物の女神）のために恐怖を唆られたかのやうに顔を伏せおどくとしてゐた。それから度々途中で出會つたこと、何か話をしたいらしいその少年のぢつとした眼差し、そんなことを彼女は思ひ出したのだつた。

翌る日、彼女はヴァレンシアへ行つた時彼に會はなかつた。けれども夜、彼女は小屋に歸らうとする時、黄昏の光りが暗くなり雨模様になつてゐたに拘はらず、少しの不安も覺えなかつた。

彼女は、自分にそれ程の勇氣をつけてくれる例の連れがあらはれるだらうといふことを、豫想した。而もそれは全く適中したのだつた。彼は前の日と殆んど同じ場所へ彼女と會ふためにやつて來た。

彼は何時もと同じく意味あり氣だつた。

「今晚は！」そして彼女の傍を歩き出した。

ロセツタは前よりも雄辯だつた。何處から來たのか？ 二日も續けて會ふなんて、何といふ偶然



だらう！而も彼は顫へながら、例によつて、この言葉が精一杯であるかのやうに、「そこから……  
そこから……」とだけ答へた。

同じやうに臆病な娘ではあつたけれど、彼の狼狽を見ては彼女も嘔き出しさうになつた。彼女は、その恐怖、冬の間途中で會つた脅嚇を話して聞かせた。すると彼が彼女に貸し與へた奉仕に依つて慰められたトネットはやつと唇を開いて、今後度々一緒に行かうと言つた。彼は常に、主人のために、フェルタへ行く用事を持つてゐるのだつた。

彼等は互ひに前日通り簡単に別れた。が、その夜、娘は氣をわく／＼とさせ神經過敏になつて寢床に這入つた。そしていろ／＼放肆な事柄を夢に見た。彼女は自分自身が暗い眞暗な道に立つて自分の手を舐める大きな犬、トネットと同じ顔をした犬に伴はれてゐるのを見た。すると一匹の狼、あの憎らしいビメントオを彼女に漠然と思ひ出させる鼻を持つた狼が現れて彼女を嘯まうとする。犬と狼は齒を剥き出して戦ふ。と、彼女の父親が棍棒を手にして出て來た。そして彼女は彼女の忠實な犬が受けた棍棒が彼女自身の肩に當つたかのやうに泣きつづけてゐた。そんな風で彼女の空想は當てもなく八方に迷つて行つた。然しその夢の亂雑な場面すべての裡に、彼女は

青い瞳と、男性の最初の表示たる薄い毛に蔽はれた子供らしい顔とを持つ例の老トムバの孫を見たのだつた。

彼女は人事不省から醒めたやうに、ぐつたりと疲れて起き上つた。それは日曜日で工場には行かない積りだつた。太陽は彼女の寢室の小さな窓から射し込んで、もう家中の者は皆寢床を離れてゐた。ロセツタは母親と教會に出掛けるための準備をし始めた。

その悪魔のやうな夢はまだ彼女を亂してゐた。彼女は、前夜が彼女の生存を二つの部分に別つ壁だつたかのやうに、違つた思ひを以て違つた風に感じた。

彼女は、小鳥のやうに快活に歌ひながら、着物を箱から取り出してそれを寢床の上に並べた。その寢床はまだ暖かくて彼女の身體の形を保つて居た。

彼女はかうした日曜日を好いてゐた。その日は遅く起きてもいゝ自由があり、のん氣な時間があり、彌撒を聞くためにアルボラヤへの遠足があつた。が、この日曜日はとりわけ平生よりもよかつた。——太陽は何時もよりも輝しく照り、小鳥は何時もよりも熱を籠めて歌ひ、小さな窓からは、大氣が微妙な香料のやうに匂つて流れ込んだ。それを何と言つて形容することが出来よう！

一口に言へば、この朝はその周囲に新奇な異常な或物を持つてゐたのだ。

彼女は、その時まで自分の外貌に少しの注意をも拂はなかつたといふことを自分自身に向つて責めた。十六歳といへば自分自身のことを思ひ煩らふ頃である。彼女を化粧下手だと言ふ母親を何時も笑つてゐた彼女は、何といふ馬鹿だつたことだらう！さう思つて彼女は、初めて見る新しい着物のやうに、毎日曜日に着るキヤラコの肌衣を、それが薄いレースであるか、やうに注意して眺め廻した。そしてコルセットを強く締めつけた。恰も蕾の胸を残酷に押し潰すやうなその高い鯨骨の甲冑、全くの田舎娘のコルセットが充分に締まつてゐないかのやうに。何故といふに、このフェルタでは、未婚の少女にとつて、自然の蠱惑的魅力を隠さないことは穩やかでないと考えられ、従つて誰も處女の裡にその未來の母性の表象を見やうとするやうな罪深いことをし得なかつたからである。

彼女は生れて初めて十五分以上の時間を四時ばかりの姿見鏡の前、そのニスを塗つた松の梓の中に立つて過した。それは父親が彼女に贈つたもので顔を見るにも部分的に映さなければならぬ鏡だつた。

彼女は美しくなかつた。そのことを彼女は知つてゐた。が、このフェルタでは更にすつと醜い女を彼女は十人も廿人も見てゐた。そして彼女は何故とも知らず自分の顔を瞞めて快感を覺えた澄んだ碧い瞳、太陽が日に焼けた皮膚に現はした細かな雀斑モクモクの點々とした頬、艶の褪めた絹の微妙さを持つた稍々灰色の金髪、口の上に突き出してびくびく動く穴を持つた小さな鼻、熟した桃の上にある毛のやうに柔らかならふ、毛に蔽はれた口そのもの、つやつやとした牛乳の白さと顔全體を輝かすやうに見える光りを持つた強い平たい齒、——貧しい娘のその齒よ！

母親は待たなければならなかつた。この哀れな女は遠方に響く鐘のためにせき立てられたかのやうに、辛抱し切れないで家のまはりを行つたり來たりして急いでゐた。彌撒が聞けなくなるかも知れなかつた。それにロセツタはゆつくり髪を梳き、絶えず無駄な骨折りをしてゐた。それは満足するやうにならなかつた。何時までも氣に入らないで、やけになつて外套を直しつづけた。アルボラヤのプラアザの中、教會に入つたり出たりする處で、ロセツタは眼をやつと擧げるか擧げないか位にして肉市場の戸口を隈なく眺めた。其處には人が多勢彌撒から出て來て群がつてゐた。

彼はゐた。其處に主人の手傳ひをして、皮を剥いた肉の片を主人に渡しながら、それ集まる  
蠅の群を追ひ拂つてゐた。

大きな阿呆の少年は彼女を見てどんなに顔を赦めただろう。

歸りに彼女が通りかゝると、彼は矢張り片手に羊肉の脚を持つて、魅せられた人のやうに其處に  
ゐた。やかましい彼の主人は、その羊肉の渡されるのを至しく待ちながら、彼を肉切庖丁で嚇し  
て嘲罵の一齊射撃のやうに呷鳴り散らしてゐた。

彼女はその後悲しかつた。家の戸口に坐りながら彼女は幾度も遠方の小路をさまよひ歩いて  
彼女をぢつと蹟めるために藪に隠れた彼を見たと思つた。彼女は、月曜日が早く来て工場に行き  
恐い歸り道をトネット一緒に連れ立つて來れよばいよと思つた。

少年は翌日の夕方も彼女の豫想に違はなかつた。

彼が會ひにやつて來たのは平生の夜よりも町の方に近寄つてさへゐる處だつた。

「今晚は！」

然し例の通りの挨拶を済ましてから、彼は黙つてゐなかつた。この小僧は日曜日、進歩してゐ

たのだつた。

で、彼はゆつくりと、その言葉に様子ぶつた顔を交へて、ズボンの上から足を搔きながら、時  
々は言葉と言葉との間にたつぶり二分間位を空費したけれども、彼自身を説明しようとして試みた。

彼は彼女に會つて嬉しかつた。(ロセツタは微笑を送り、そして「有りがたう」とかすかに呟いた。)

「彼女は日曜日を面白く暮した?」……(沈黙)「彼には非常に退屈な日だつた。苦しかつた。……

無論習慣……それで……何だか或物が缺けてゐるやうな氣がした……自然に彼は道路の方に氣を  
とられた……いや、道路ではない。彼女と連れになりたかつたのだ……」といふ意味のことを彼  
は話した。そして其處で不意に口を噤んでしまつた。それは彼がその大膽の罪を罰するために神  
經的に舌を嚙つ、それ程までに言ひ過ぎた罪のために彼自身を抓つたのだとさへ思はれた。

彼等は暫くの距離を黙つて歩いた。娘は答へなかつた。彼女は籠を左の腰に當て、右手を振ふ  
運動のやうに空を切つて振りながら、女工の優しく氣取つた風で道を歩いて行つた。

彼女はその夢のことを考へてゐた。再び彼女自身が放肆な幻影を見ながら人事不省の眞中にゐ  
るかのやうに空想した。幾度も振り返つて、黄昏の光の中に、彼女の手を舐めるそしてトネット

トの顔をした犬を見たヤツに思つた。その記憶は彼女を笑はせさへした。然し、いや、彼女の傍にゐる彼は彼女を護衛することの出来る善良な人間だつた。ただ成程、今の言葉を口にしたことが彼を傷つけるかのやうに、頭を垂れ、稍々おどして含羞んではゐた。

ロセツタは益々彼をどきまさせさへした。さあ、何故途中で彼女に會ひに出て来るのか？皆は何と言ふだらう？若し父親が人から聞かされたら、どんなに惱ましく思ふだらう！

「何故。何故？」と娘は聞いた。

すると若者は、宣告を聞いた罪人のやうに益々悲しく益々臆病になつて、何の答をもしなかつた。彼は道の端に躓きながら少女と同じ歩調ではあつたが、離れて歩いてゐた。ロセツタは彼が泣き出しはしないかと思つたくらゐだつた。

然し、バラツカの近くに來た時、そして二人が今や別れようとする時、トネットは不意の衝動に襲はれた。——今までひどく沈黙でゐたからして、今ひどく雄辯になつたのだ。そして多くの時間が過ぎてはゐないかのやうに彼は少女の質問に答へた。

「何故つて……それはあなたを愛してるからです。」

かう言つた時、彼は、彼女が彼の呼吸を顔に感じさへした程に近く寄り沿つた。彼の臉は、それから一切の眞實が彼女に向つて發出しなければならぬかのやうに輝いた。さうして彼は自分の言葉に脅かされて、悔い且つ恐れ、子供のやうに逃げ出した。

してみると彼は愛してゐたのだ！……二日の間、彼女はその言葉を待ち設けてゐた。而もこれは彼女に。突然の豫期しない啓示のやうな効果を與へた。彼女も亦彼を愛してゐたのだ。そしてその夜、一晩中、夢の中でさへ、彼女は幾度も幾度も彼が耳許に口を寄せて同じ言葉を囁いたのを聞いた。

「それはあなたを愛してるからです。」

トネットは翌日の夜は彼女を待たなかつた。夜明けになつてロセツタは、彼を往來に見た。桑の樹の幹のうしろに殆んど隠れるやうにして、叱責を恐れる後悔した子供のやうに、不快な素振りが見えるが早い逃げ出さうと用意しながら、彼は不安さうに彼女を瞞めてゐた。

が、彼女は羞し氣に微笑した。其處にはそれ以上何も語る必要がなかつた。

すべては語られた。彼等は再び互ひに愛しゐるといふことを話し合はなかつた。が、この事が

彼等二の婚約を取極めた。そしてトネットは一度として途中で彼女の連れとならない事はなかつた。

アルボラヤのやかまし屋の屠殺者は、その召使が急に一變したのを怒つて嗚り散らした。トネットは今では甚しい怠け者になつて常に時間を、それも殊に夜、フェルタで時間を空費する口を作つてばかりゐるのだつた。

然し幸福の我慾を以てトネットは最早、主人の罵聲と脅嚇に對してもロセツタが尊敬よりも恐怖の方を餘計に感じてゐるその父親に對して注意する程度以上には注意もしなかつた。

ロセツタは何時もある床に鳥の巢か何かを持つてゐた。それは彼女が途中で見つけるやうに要求したものだつた。この少年は空手で来るすべを知らなかつたので、彼女、つまり彼の婚約者に、藁と小枝とで出来た圓い巢を贈るために、フェルタ中の藪や樹々を悉く探し廻るのだつた。その巢の底には、實に美しい毛に蔽はれた薔薇色の肌の、嘴の黄色い小さな空の浮浪人が幾羽も不氣味な口を開きながら、絶えず麵麩を食べ足りないひもじさを、絶望的にびい／＼鳴いて訴へてゐた。

ロセツタはその贈物を、それが婚約者その人であるかのやうに自分の部屋の中で守つてゐた。そして、家の中に巢を見つけた小さな弟妹たちが、小鳥に對して熱心な讚美を示す餘りに遂にはそれを絞め殺したりした時にはしく／＼泣き出した。

又時々、トネットはその服をふくらまして現はれた。コバの居酒屋で買ひ求めたハウチハマメと落花生とで腰帯は一杯になつてゐた。彼等は道を歩きながら矢鱈にそれを食べて互ひに相手の眼を瞞めたり、何故ともなく馬鹿のやうに笑つたり、時々、無意識に堤の上に腰を卸したりするのだつた。

彼女の方が賢かつたので彼を叱つた。何時も金を無駄費ひする！一週間目に彼がさうした饗應の代として居酒屋に置いてくる金が二リアル足らずあつた。而も彼は物惜しみせぬ彼自身を示してゐた。彼女のため以外、誰のために金を欲しがるだらう？二人が結婚したならば、——それは何時か来る筈なのだ、——その時金のことを注意しよう。が、それは十年、十二年のことではなからう。だから急ぐことはない。フェルタの婚約者は皆暫く續くのだ。

結婚のことはロセツタを現實に返した。父親がこの事を知る時には……。あゝ聖母よ！父親は

自分の背中を棍棒で打つだらう。そして彼女は、それ自身が拳固や棍棒にあらはれる、剛直な、堂々として、畏敬されるこの父親の權威に、よく慣れた氣の強い女らしく微笑みながら、平靜に將來鞭に打たれることに就いて話した。

彼等の關係は罪のないものだつた。彼等の間には、裂しい馭し難い肉慾といふものが起らなかつた。彼等は日の暮れた暗闇の中の殆んど人つ子一人通らぬ道を歩いた。而もその寂寞が彼等の心からあらゆる不純な思ひを驅逐するらしく思はれた。

一度、トネットが無意識に、而もかくロセツタの腰に觸れたことがあつた。その時、彼は、恰も、彼女ではなく、彼がその觸られた女であるやうに顔を赧めた。

彼等は二人ともに、彼等の日常の逢引が、言葉と眼差しより、以上の或物にまで成り得るだらうといふことを考へるには餘りに遠かつた。それは初めての戀、やつと眼覺めた青春の芽生で、肉慾の影なく見ること話すこと笑ふことを以て満足するのだつた。

恐ろしい夜に春の來ることをあれ程までに望んでゐたロセツタは、今、長い明るい黄昏が來るのを不安な氣持で見た。

今彼女は白晝その婚約者と逢引した。そして其處には工場の朋輩や誰か近所の人がその道に沿うてゐないことはなかつた。彼等是一緒になつて彼等を眺めやりながら、その真相を察して、意地悪く笑つた。

工場では、すべての彼女の敵から冗談が言ひ始められた。彼等は皮肉交りに、何時結婚式を擧げるのかと訊き、彼女に『女羊飼ひ』といふ綽名をつけた。即ち老トムバの孫と戀し合つてゐるかだつた。

哀れなロセツタは不意に顛へた。何といふ鞭を彼女は自分自身に齎らさうしてゐたのだらう！何時か、この事は父親の耳に這入るかも知れなかつた。そして、バティストが、水の裁判所に於てその宣告を受けた日に、トネットに伴はれてゐる彼女の姿を路上に見たのはその時のことだつた。

然し何事も起らなかつた。幸福を灌漑の出來事が彼女を救つた。作物を救つたことに満足した父親は、たゞ四五度、眉をしかめて彼女を眺め、低い聲で人差指を空に擧げながら、命令するやうな調子を以て、今後工場からは一人で歸ることを注意しなければならぬ、でない、彼がど

んな人間だかといふ事を知るやうな破目になるだらう、と注意したきりだつた。

で、彼女はそれから一週間全部を一人で歸つて來た。トネットはバティスト氏に或尊敬を持つてゐたので、彼女の通り過ぎるのを見るため、或は彼女を遠方から尾けるために、通りの近くの藪の中に隠れることを以て満足してゐた。

日は今や益々長くなつて、通りには益々人が多くなつた。

然しこの別離を堪へきれない戀人たちはそれ以上延ばすことは出来なかつた。で、或日曜日の午後、ロセツタは、氣も沈み、自分の家の戸口の前を歩くのにも疲れ、而も、近所の小道を過ぎる人々の中にトネットの姿を見たと思つたので、綠色にエスを塗つた水差しを掴んで、これから「女王」の泉から水を汲んでくる積りだと母親に言つた。

母親は彼女に行くことを許した。彼女は自らを慰めなければならぬ。哀れな少女よ！彼女は誰一人友達といふものを持つてゐないので、諸君は若い者をしてそれ独自の要求をせしめなければならぬ。

「女王」の泉は、井戸の水と堀割を流れる赤い泥のやうな液體とに災されたフェルタのこの方面

すべての誇りだつた。

それは見棄てられた農家の前にあつた。フェルタ中の最も賢い人の話によれば、古い非常に價値あるものといふことだつた。ピメントオの言ふところに依るとムール人の作つたものだつた。

使徒たちが世界を遍歴してゐて洗禮を受けた罪人だつた時代の紀念物だらう、と豫言者たる老トムバはしかつめらしく斷言した。

午後、小止みなく銀の葉の茂みを翻す白楊を以て境せられた通りに沿うて行くと、多くの少女の群が水差しを頭上にちびつと捧げてゐるのを見ることが出来る。それはギリシヤの籠運びのリズムある足取りと、しなやかな姿勢とを思ひ出させるものだつた。

この狭い路はヴァレンシア人のフェルタに福音的香氣ともいふべき或物を與へた。それはアラビアの詩、即ち泉の傍に水差しを頭上に捧げた女のことを歌つて同一の畫中に東洋の最も烈しい情熱たる美と水とを統一してゐる詩を想起せしめる。

女王の泉は赤石の壁を持つた四面の池で、下の水は地面の高さまで漲つてゐた。六七歩降つたところは絶えず濕氣のためにすすべとして緑である。段に面した長方形の石の表面には、薄肉

彫りが浮き出してゐるが、その彫られた人物ははつきりしてゐない。それは塗られた野呂の外衣の下にくつきりさせることが出来なかつた。

それは恐らく天使たちに圍繞せられた聖母であらう。そして中無死の粗野な簡素な藝術品で、征服時代の何かの奉納物であらう。が、幾つかの無記が、年月に消された人物の姿をよりよく見せるために石をつゝいたり或は野蠻的好奇心の不意の衝動を以てそれに野呂を塗つたりした事が、その石の板をして、女の形なき姿が漸く認め得られる程度の状態のまゝに残させたのだつた。あらゆる民話にあらゆる女王がなければならぬと同じくムール人にも女王があつたが、今言つた女の姿といふのはその女王、つまり泉にその名を與へてゐる女王だつた。

日曜日の午後、此處では叫びや騒ぎが一通りではなかつた。三十人以上もの少女たちが、水差しを持つて誰よりも眞先に水汲まうとして集まつて来るのだつた。而も歸るときには急ぐのでもなかつた。彼女等は狭い段を互ひに押し合ひ、屈んで池の中にその水差しを沈めるために兩脚の間にスカートをまくり上げてゐた。水のおもては砂地になつた底から絶間なしに波立つぶくぶくといふ水泡のために顛へた。そして、その水底には、ジェラチンのやうな植物が、髪に似た緑色

の纖維束を成して蔓り、それが水晶のやうな液體の牢獄の中で揺れながら、流水の衝動を以て顛へてゐた。休むことのない水上の踊り子は、その微妙な脚を以て澄んだおもてを飛び越えてゐた水差しに水を満たした者は泉の端に腰を卸して、その足をぶらぶらさせてゐたが、男の子が水汲みに降りて彼女等を見上げると、その度に恐ろしくいきいきした聲を擧げて足を引つ込めるのだつた。

それは騒がしい浮浪者の會合だつた。皆が一時に話をした。彼女等は互ひに罵り合つたり、其處に居ない者を悪口したり、フェルタ中の醜聞といふ醜聞を悉くあばき立てたりした。そして兩親の厳しさから遁れた若い連中は、豊富ならぬ無教養な者の特長たる攻撃性を發揮して、家のために引き受けた偽善的表現を盛んにするのだつた。アルボラヤの教會内で、處女を賀する祝祭の時に、あれ程やさしく聖母と祈禱とに向つて讚歌を歌ふところのこれ等天使のやうな浅黒い女は今一人になつて大膽になり、老婆の冷靜さを以て秘密を喋り散らしたり、家畜馭者の呪詛を以てその會話に景氣をつけたりしてゐた。

ロセツタは此處へ水差しを持つてやつて來た。途中、ゆつくり歩き、幾度となく振返つて、絶



えず婚約者が小道から出て來はしないかと望んでゐたにも係はらず遂に彼に出會はなかつた。

泉の騒がしい群は彼女を見て口を噤んだ。ロセツタの出現は最初皆を呆然とさせた。——アルボラヤの教會で高い彌撒の最中にムール人が出現したかのやうな。何故こんな貧乏人が此處に來たんだらう？

ロセツタは工場での朋輩の二三人に挨拶した。が、彼女等は嘲るやうな表情をして唇を曲げ碌々答禮さへしなかつた。

他の者は、その驚きから我に返つて、この侵入者に對して、沈黙の名譽をも許したくないといふので、何事も起らなかつたのやうに又喋りつづけた。

ロセツタは泉に降りて水差を満たして立ち上り、平野全體を蔽ふ壁の上に不安さうな眼差しを投げた。

「見廻せ、見廻せ。だがあの男は來やしないだらうか！」

かう言つたのはビメントオの姪、ベベタの妹の娘だつた。彼女は上に向いた生意氣な鼻を持つた色の黒い神經質の娘で、一人娘であるといふことを、彼女の父親がその耕作してゐる四つの地面

の持主で、誰の借地人でもないといふことを誇りにしてゐた。

さうだ。彼女は見たいだけ見廻しつづけることが出來たかも知れない。が、彼は來なかつた。らう。他の連中は彼女が誰を期待してゐたか知つてゐるのだらうか？彼女の婚約者、老トムバの孫のことを。——結構な手筈よ！

さうして三十の殘酷な口は、その一つ／＼の笑ひが噛みつくかのやうに笑ひこけた。それは、そのビメントオの姪の言つた言葉をいゝ愚弄だと思つてはなく、その憎らしいパテイストの娘をやつつけようがためだつた。

女羊飼ひ！……神聖な女羊飼ひ！

ロセツタは無關心さを以て肩を縮めた。彼女はそれを豫期してゐた。且つ、工場での愚弄が彼女の感覺を鈍らせてゐた。

彼女は水差しを取つて階段を降りた。が、その底でビメントオの姪の小さな嘲る聲が彼女を遮つた。その小さな蟲がどんなに彼女を刺し得たことだらう！

「あの女はトムバ爺さんの孫と結婚はしないだらうよ。あの男は可哀さうに馬鹿で、食べる物

も食べられないで死にかゝつてゐるけれど、非常に立派なふうだから泥棒の家の親類になる筈はないからね。」

ロセツタは、水差しを落さんばかりだったその言葉が彼女の心臓を裂いて全身の血潮を顔に昇らせたのではないかと思はれる程眞赤になつた。さうして次の瞬間には恐ろしく青くなつて来た。「誰が泥棒です？誰が？」

彼女は顔へ聲で詰つた。それが泉の傍にゐる皆を笑はせた。

誰がつて？お前の父親がさうだ。叔父のビメントオはそのことをよく知つてゐる。そしてコバの居酒屋でそれ以外のことが話されることはないのだ。お前たちは過去を隠すことが出来ると信じてゐるのか？お前たちは皆に餘り知られ過ぎたため土地に居られない逃げて来たのだ。さうして此の土地へ、自分の物ならぬ物を自分の物としようとして来たのだ。自分たちはバティストが破廉恥罪で監獄に入つたことが事さへ聞いて知つてゐるのだ。

かう言つて、その小さな蝮蛇は、彼女が自分の家やフェルタで聞いたこと的一切を喋り立てたそれはコバの居酒屋で放埒な連中が拵へ上げた嘘で、すべてはビメントオの腹から出てゐた。彼

は面と向つてバティストを攻撃することを次第に好まなくなつて、侮辱を以て彼を惱まし迫害する方法を試みてゐた。

父親をかく断定されたことが不意にロセツタの心を波立たせた。彼女は憤怒に顔へ口籠りながら、血走つた眼をして水差しを手から落した。水差しは粉みじんに壊れて一番手近にゐる娘たちに沫がかゝつた。彼女等はロセツタを間抜けと呶鳴りながら一齊に責め立てた。が、彼女はさうした事に注意を拂ふやうな氣分を少しも持ち合してゐなかつたのだ！

「お父さんが……」と彼女は彼女を侮辱した女の方に進み寄つて叫んだ。「お父さんが泥棒だつて？もう一度言つて御覽、顔をはり倒してくるから！」

然しその黒い髪の女は、その言葉をもう一度言ふ必要がなかつた。何故といふに、彼女は口を開ける隙もなく口を殴られたからだつた。そしてロセツタの指が彼女の髪にからみついた。本能的に、苦痛のために迫られて、彼女もその代りにロセツタの金髪を掴んだ。さうして暫くの間は二人が、重なり合つて苦痛と狂氣との喚きを擧げながら、額を殆んど地につけるばかりにし、一方が他方の頭をじこたらしく引つ張ることに依つて或はあちら或はこちらに引き摺つて相争つて

ゐるのを見ることが出来た。頭髮ピンは滑り落ち、結髪はほぐれて、その重い頭は、軍旗、それもひらひら揺れる勝利の旗でなく、敵の手に依つて皺にされたり破られたりした軍旗のやうだつたが、ロセツタの方が強かつたのか或は餘計に狂ほしかつたのか、兎に角彼女は首尾よく自分の身體を離すことが出来た。そして、自由になつた片手で彼女のスリツパをはづさうとしたところから見ると多分敵に平手打ちを喰はさうとしてゐたらうが相手を自分の方へ引き寄せようとした。こゝその時、溜らない、残忍な、聞いたこともないやうな光景がそこに現出された。

何等の手筈がしなかつたのに、恰も、彼女等の家庭の憎悪すべて、家内で聞いた言葉と呪詛すべてが一氣に彼女等の心を波立たせたのやうに、あらゆる者が悉く一緒になつてバテイストの娘に飛びかかつて來た。

「泥棒！泥棒！」

瞬きする間もなくロセツタは怒りに燃えた多くの腕の下に隠れた。彼女の顔は引つ掻き傷で蔽はれた。夕立のやうな毆打に押しつけられた。尤も倒れることは不可能だつた。と言ふのは敵が下に潰れてゐて彼女の倒れる邪魔をするからだつた。が、一方から他方へと押しやられてゐる内に

彼女は遂に、すべすべした石の上に眞逆さまに轉がつて、その石の角に額を打つけてしまつた。

血！それは石を雀の群れた樹に投げたやうなものだつた。彼女等は飛び去つた。皆が違つた方向へ、水差しを頭上にして馳け出した。そして一寸の間に哀れなロセツタを除いて誰一人この女王の泉の近所にはゐなくなつてしまつた。ほぐれた髪、破れたスカアト、泥と血にまみれた顔をしたロセツタは泣き泣き家に歸つて行つた。

母親は彼女が這入つて來るのを見てどんなに叫んだことだらう！その出來事を聞いてどんなに不平を鳴らしたことだらう！あの人たちは猶太人よりも悪いのだ！主よ！主よ！こんな罪が基督教徒の土地に起り得ることだらうか？

生きることは不可能だつた。彼等は既に哀れなバテイストを攻撃し、法廷で彼を迫害し誹謗し彼に不當な料金を課した人々を充分に處置しなかつた。それに此處には哀れなロセツタを恰も不幸なこの子が何か不都合なことでもしたかのやうに迫害する女たちの群がゐる。そしてこれは皆何故だらう？彼等が神の命する通り、何人の怒りを買ふこともなく生活費と仕事とを得ようと望むからではないか。

パティスは娘を見た時に眞青になつた。彼は、その屋根が藪のうしろに聳えてゐるピメント  
オの家を見やりながら通りの方に五六歩進んだ。

然し彼は立ち止つた。そして遂に優しく娘を叱り出した。この出来事は彼女にフェルタの周囲  
を出歩かないことを教へたゞらう。彼等は他人との接觸をすべて避けなければならない。一緒に  
そしてこの家に結合して暮すがいい。決して、その生命たるこの土地を離れてはならない。

彼の敵は、彼を彼自身の家以外のところで探し出さうとするための充分な注意をするだらう。

## 六

ぶつぶつと唸る地蜂のやうな聲、その巢蜂のやうな呟きを、フェルタに住む人々は、海に行く  
道傍にあるカデナ工場の前を通りかゝる時に聞くのだつた。

小さな方形に圍まれた白楊の濃い幕は、道路に依つて、恰もそれが古びたうづ高い瓦葺きの屋  
根、水車場の破れた壁と小さな黒い窓との前に擴がつたかのやうに作られてゐた。その水車場は  
掘割の上、厚い支壁を土臺にして建てられた古いぼろぼろの建物で、その支壁の間に泡立つ水の瀧

を流してゐた。

樹間から聞えるらしいゆつくりした單調な騒ぎは、白楊の並木のために隠れた一軒の農家にあ  
るドン・ホアクインの學校から洩れるのだつた。

勿論智慧は必ずしも宮殿に住んではゐない。けれども知識が、これ以上に悪い宿にゐたことは  
決してない。

戸から射し込む光りと屋根の隙間から濾されて這入る光りとの外には、少しの光りもない古び  
た農家。蘭の椅子に腰を却して一日夫の講義を傾聴しながら彼を尊敬してゐる頑丈な校長夫人の  
ためにある薄ぎたない白壁。幾つかの腰掛け。端の壊れた、嚙んだ麵麩片で壁に喰つゝけてある  
三つの汚れたアルファベット。それから、その學校に隣り合した部屋にある、スペインの半分を  
さまよつて來たらしい幾つかのがらくたな家具。

このベラツク中に一つ新しい物があつた。校長が戸のうしろに何時も備へてゐて、隔日に近所  
の籐藪から新しいのを仕入れて來る長い籐の鞭がそれだつた。籐がそれ程に安いといふことは非  
常な幸福だつた。何故といふに、それは小さな野蠻な子供たちの固い、細かに鉄を入れた頭に當

てて忽ちに費ひ盡されてしまふから。

この學校では、わづかに三冊の本しか見られなかつた。同じ初學の教科書がすべての生徒に用ゐられた。何故それ以上の必要があらうか？其處にはムール人の方法が勢力を占めてゐた。單調な歌調と反覆、それを、絶えず打ち敲くことに依つて子供等の頑固な頭に物が詰め込まれるまで繰り返すのだつた。

それ故、朝から晩まで、この古びた農家は、その戸から、近所の小鳥全體に嘲笑はれるやうな退屈な歌調を送り出してゐた。

「天に……ひます……吾々の……主……よ。」

「聖なる……マリヤ……」

「二の二倍は……四に……」

そして、往來で子供たちの群を見ると飛び立つて逃げる雀や、べにひわや、雲雀などは、全く安心して最も近い樹々に止り、そのバネのやうな小さな足を以て學校の戸の前をびよん／＼と飛び上つたり飛び降りたりした。そして彼等の恐ろしい敵が身動もせずと同じ退屈な面白くもない

歌を繰り返しながら、鞭に脅かされて一室に檻禁され、彼等小鳥が道傍にゐるのをまたと眺めてゐなければならぬのを見下して喧ましく笑ふのだつた。

時々生徒の合唱は止んで、ドン・ホアクインの聲が、彼の知識の含蓄を一氣に迸らしながら、いかめしく聞え出した。

「其處には幾つの慈善事業があるか？」

「七の二倍は幾つか？」

而も生徒の答は大抵彼の氣に入らなかつた。

「お前たちは間抜けだ。私はギリシヤ語を喋つてゐるのぢやあるまいし、それにお前たちはたゞ黙つて聞いてゐる。私がいゝ作法を教へ、どうしたら教育ある人間らしく話せるかを教へるためにお前たちを、町の立派な高等學校にするやうにあらゆる禮義を盡して待遇するのかと思ふと溜らない！……簡単に言へば、お前たちは眞似すべき或者を持つてゐる。が、お前たちの兩親と同じやうに矢張り亂暴で馬鹿なんだ。お前たちの兩親も恥知らずで、居酒屋へ行くためばかりにお金を残し、土曜日に私が當然受け取る筈の二つの銅貨を支拂ふまいとして、あれこれとその口

實ばりを作つてゐるんだ。」

そして彼は、何時も土曜日が等閑にされたことの不平を言ふ時の癖で、腹立たし氣に行つたり來たりした。それは二つの部分に別れるやうに見える彼の髪と姿とに見ることが出來た。

下を見ると、何時も泥にまみれた破れた麻草履、古い布のズボン、小さな果樹園の汚れた皮膚の隙間に残つてゐるきぬの荒い鱗のやうな手があつた。果樹園といつても、それは彼が學校の前面に持つてゐる四角な野菜畑で、それからの收穫は多くの場合、彼の煮肉シチウに入れるきりしかなかつた。

然し腰から上には彼の高貴なことが示されてゐた。彼が口癖の言葉を借りて言へば「知識を説教する者の尊嚴」が現れてゐた。それは彼を、百姓家に住む人々、土にこびりついた蛆虫のやうな人々のすべてから一際區別するものだつた。——汚いシャツの胸を蔽ふ派手な色のネクタイ、むつちり肥えた色艶のよい顔を分ける灰色の剛い口髯、彼が複雑な過去の生涯に於て占めた多くの職業の一の記念物とも言ふべき、油布の疵つきの青い帽子。

これは彼を貧乏に對して慰めるものだつた。殊にネクタイは、この地方全體に亘つて誰一人つ

けるものがなかつた。で、彼はこれを最高卓越の證として誇示してゐたので、言はば、これはフェルタでの金毛勳章（譯者註——スペインの最高勳章）の類だつた。

農夫たちは、彼の貧乏を助けるといふ點では等閑で無精だつた。けれど、このドン・ホアキンを尊敬してゐた。どんなに多くの事物を彼は見てゐたらう！如何に世界中に亘つて彼は旅してゐたらう！鐵道工夫になつたことも五六度はあり、スペインの遠い國境近くに税金徴收の手助けをしたこともあつた。アメリカの巡察をしてゐた。ともあるとさへ言はれてゐた。一口に言へば、彼は零落した境遇に於ける「一廉カドの人物」だつたのだ。

「ドン・ホアキンは、」と、常に誰よりも先に夫を敬稱つきで呼ぶ彼の妻は口癖のやうに言つてゐた。「現在のやうな位置に自分がゐるのを今までに見たことは一度もありませんよ。私たちは立派な家庭の者です。不運のために、こんな所に運ばれては來ましたけれど、景氣のよかつた時分には、随分の金を儲けたものなんですよ。」

そしてフェルタのお喋りたちは、彼等が授業料として土曜日に二枚の銅貨を支拂ふことを時々忘れるといふ事實があるに係はらず、ドン・ホアキンを優れた人物として尊敬した。が、彼が

日曜日にアルポラヤ教會の奠祭に際して歌ふ時に着るところの緑色の、そして四角な尾のついた短いジャケットを、少し嘲るといふ権利だけは保留してゐた。

貧乏に追ひ立てられて彼は肥つてぐんなりした愛妻と一緒に、何處にでも行くことが出来たのでこの土地に辿り着いた。彼は餘分の仕事に村の書記の手傳ひをしたり彼自身しか知らない草を以て或酒を作つたりした。それは百姓を全く喫驚させた。彼等はみんなこの老いぼれが當籤を知つてゐることを承認した。そして、彼は校長といふ肩書なしに、誰も彼から學校を奪はうとする者が無いといふ安心を以て、(尤もその學校は麵麩を買ふにも足りない位の収入しか彼にもたらしにくれなかつた)日曜日に石を小鳥に投げつけたり果物を盗んだりフェルタの往來で犬を追ひ廻したりする五つから十までの腕白小僧の悉くを、夥しい反覆と鞭打とに依つて、文字を綴つたり靜肅を保つたりすべく教育することに成功したのでつた。

何處からこの校長は來たのだらうか？近所の女たちは皆知つてゐた。チュレリアを通つて來たのだ。そしてそれ以上の説明を訊いても駄目だつた。何故といふに、フェルタの地圖に關係のあるところでは何處でも、ヴァレンシア語を話さない者はすべてチュレリアの者だつたから。

ドン・ホアクリンは生徒に自分を了解させてカステイリア語を恐れないやうにするために少なからぬ困難をした。生徒の中には二ヶ月も學校にゐて而も嘗て耳にしたことのない言葉を何時も使ふ校長が、學校で彼等に向つて何を話してゐるか理解することが出来ないで、ぼんやり眼を開いて頭のうしろを搔いてゐるやうな者もあつた。

どんなにこの善良な人間は惱ましく思つたことか！己れの教育の勝利をすべて、彼の妻の言つたやうに、己れの洗練と、態度の卓越と、立派な言葉づかひとに歸してゐた彼が！

生徒が悪い發音をする一々の言葉を聞いて、(而も生徒は一つとしてよい發音をしなかつたのだ)彼は唸つたり、兩手を荒々しく、それがこの學校の煤けた天井に届く位に高く擧げたりした。けれども彼は彼が生徒を扱ふ禮義正しさを誇りにしてゐた。

彼は狭い腰掛けに群れて、互に押し合ひながら、半ば困つたやうな、半ばその籐の鞭を恐れるやうな風で彼の言ふことを聽いてゐる二十人の子供に、かう話すのが常だつた。

「お前たちはこの貧しい教室を、禮義と作法との殿堂と思はなければならぬ。殿堂だよ、わかつたね？これはこのフェルタの野蠻な闇を照らし開く炬火なんだ。私といふものがないならば、

お前たちはどうなつてゐるだらう？動物だよ、少し言葉がひど過ぎるかも知れないが。お前たちのえらいお父さんを怒らせたくはないが、全くお前たちはあの人たちと同じことだ！が、私のやうな先生を幸にも見つけた以上、お前たちは教育を受けてどんな場所に出ても恥づかしくないやうになつて此處を去らなければならぬ。さうぢないか？」

すると子供たちは熱心に頷いてそれに答へた。或者は自分の頭を隣りの子の頭にこつんと當てた。そして彼の夫人でさへも殿堂と炬火とに動かされて、靴下編みを止め、夫を尊敬の視線でつむために蘭の椅子をうしろに押し遣るのだつた。

彼は、靴下をつけない、シャツの端を空にぶら／＼させた汚い腕白小僧の列に向つて、驚くべき禮義を以て質問するのが常だつた。

「さあ、ロビス君、立ち給へ。」

そこで、一本のブボン吊りで支へられた短い膝ズボンをつけた七つの子供は、腰掛けをひつくり返すばかりにして、恐ろしい鞭を横目で賸めながら、氣をつけの姿勢で校長の前に起立した。

「さつきから私はお前が鼻をほじつて、小さな丸薬を拵へてゐるのを見てゐた。ロビス君、それ

は醜い習慣だよ。先生を信じるがい。今度だけは、お前がよく勉強して、九九の表を覚えてゐるのに免じて見通して上げよう。が、知識は、よい作法が缺けてゐては何にもならないんだ。忘れてはいけないよ、ロビス君。」

小さな丸薬を拵へた少年は悉く納得して、鞭を免れるために無中になつて喜んだ。が、その腰掛けの彼の隣りに坐つて、何か以前の恨みをしきりに復讐しようと思へてゐた今一人の大きな子供が彼の起立したのを見て、きゆつとひどく彼を掴つた。

「あ、あ、先生！」と、立つてゐる子供は叫んだ。「馬面めが掴りました！」

ドン・ホアクインの憤怒はそれだつたのだ。彼を最もひどく怒らせたのは、子供たちが互ひにその父親の綽名で呼び合つたり新しい綽名を發明したりさへするのを好いてゐることだつた。

「馬面とは誰のことだ？ペリス君、多分お前のことだらう。あ、何といふ呼び方だ！まるで酒場にでもゐるやうぢやないか！畜生！」

そして彼は鞭を擧げて一人づつびしびしと殴つた。一人は掴つたといふ罪のために、一人は、ドン・ホアクインが鞭の手を休めもせずと言つた言葉を借りれば、「言葉の不當」といふ罪のため



に。而も彼の鞭は、その腰掛にゐた他の子供が一緒に縮み上つて、めいめい顔を隣りの者の背中に隠してしまつた程に、向う見ずのものだつた。そして鞭の音に脅えてゐる一人の小さな子ベテイストの末つ子は、下痢をしてゐた。

その事が校長の氣を鎮めて、彼に失はれた尊嚴を恢復させた。その間にさんさん打れた傍聴人は鼻をほじつてゐた。

「ベベさん、」と彼は妻に聲を掛けた。「ド・ポルル君は病氣だから連れて出てくれ。そして學校が済んでから綺麗にしてやつてくれ。」

で、パテイストが毎土曜日に授業料を支拂ふため、その三人の子供に或好意を持つてゐるこの老いた女は、ド・ポルル君の手を執つた。手を執られた少年はまだ恐怖に泣きながら、ズボンのうしろの開いたところから、シャツの端ばかりでなく中まで見せながら、その弱い小さな足でただどしく歩いて學校を去つた。

こんな出來事も済んで又授業は續けられた。そして、森は、その單調な眩きを茂みを通して遣しながら不快さうに顔へるのだつた。

時に憂鬱さうな鈴の音が響いて來て、この學校中がよろこびに満ちることがあつた。それは老トムバの羊群が近づいて來る響きだつたが、皆は、この老人が羊群を連れてくれば必ず二時間くらゐの休みがあることを知つてゐた。

この老羊飼ひが面白さうに話す時、校長が彼のうしろにゐたことは決してない。

二人は絶間もなく喋りつづけた。その間に生徒は腰掛けを離れて、その話を聞きに近寄つて來たり、そつと抜け出して、近くの坂で草を食べてゐる羊と遊びに行つたりした。

ドン・ホアティンはこの老人が好きだつた。老人は世界中を見てゐて、彼にカステイリア語で話すといふ敬意を示し、藥草の知識を持つてゐたが、それでゐて彼自身の顧客を奪ふことをしなかつた。一口に言へば、老トムバは彼と親しく交際することを享樂する價値を持つたフェルタ中で唯一一人の人間だつた。

彼が姿を見せる時には、必ず同じやうな情景が伴つた。それは先づ、羊が學校の戸口に着いて頭を突つ込み、珍らしさうに鼻をうごめかした後、或輕蔑を見せて引つ込んでしまふ。此處には智慧の外に何の食物もないこと、大した値打ちのないことが解るのだらう。その後から老トムバ

は、その失はれた視力の唯一の助力者たる羊飼ひの杖を、自分の前に携へて、このお馴染の地域に、自信のある足取りで現れて来るのだつた。

彼は校長の戸に隣る煉瓦の腰掛けに坐るのがおきまりだつた。其處で校長と羊飼ひとの話は、ドナ・ホセフアと、そつと近寄つて二人のぐるりに人垣を作る稍々年長の生徒たちとに依つて靜かに感心されながら始まるのだつた。

道を歩きながらその羊とさへ話をする癖のあるトムベは、初めはゆつくりと、その限界を越えるのを恐れる人のやうに話した。が、校長の饒舌が彼に勇氣を與へるのが常で、間もなく彼はその永久に盡きぬ物語の廣々とした海に乗り出すのだつた。彼は常に、スペインの生活状態のよくないこと。ヴァレンシアから来る者がフェルタで語つてゐること、不作の責任を負ふべき一般悪政のこと、に就いて不平を述べ立て、最後には必ず同じことを繰り返すのだつた。――

「ホアクインさん、私の若い時分は違つてをりましたぜ。お前さんはそれを御存知ない。けれどもお前さんの若い時分だつて、この今の時世よりましでしたらうな。だん／＼に悪くなつて行きますわい。この子たちが皆大人になつてどんな有様を見るか、それを考へて見なされ！」

かう言ふのは何時も彼の話の序論だつた。

「お前さんが教團僧の弟子たちをちよいとでも見てをられたらなあ！その連中が本當のスペイン人でさあ。今はコパの酒場にはたゞ法螺吹きしかぬやしない。わしは十八の時のこと、死んだ奴から取つた銅鷲つきの胄と、わしの背丈けよりも高い鐵砲を持つてをりましたぜ。そして教團僧！……何といふ男ぢやつたらう！今は皆何々管長のことなんか言つてまさあ、嘘、みんな嘘ですわい。教團僧ネヴォットのゐるころには他に誰もゐなかつたのぢや！お前さんにあの人馬に乗り法衣を着流して、曲つた劍と拳銃とを持つてをるのを見せて上げたかつた！どんなにわし等はよく駆け廻つたことかなあ！時には此處、時にはアリカント邊、時にはアルバセート近くをぢや。皆がわしたちの後を何時もついて來ましたわい。だが、わしたちは掴まへたフランス人は皆一人々々滅多斬りにした。その奴等が今でも眼先にちら／＼してゐるやうぢや、あゝ！わしは斬つて斬つて、鋭い銃劍で刺し殺した！」

そしてこの皺だらけの老人は益々氣が大きくなつて、恰も今尙その銃劍で敵を突き刺してゐるかのやうに、羊飼ひの杖を振り廻した。それから次には忠告が始まつた。親切な老人の背後に、

兇猛な、頑固な無慈悲な、死ぬまでの戦争が生んだ一人の男が立つた。彼の恐ろしい本能が姿を現した。その本能は言はば、彼の青春期に於て化石してしまつて、時代の推移を頑として容れないのだつた。彼は子供たちにヴァレンシア語で話し掛けて彼の経験の結果を分け與へた。彼等は彼の語ることを信じるに相違ない。何故といふに彼は多くの事物を見て來たのだから。人生に於ては、敵に復讐するまでは忍耐せよ、ボールの來るまでは待ち、來たならば強く打て。さうしてこんな忠言を與へてゐる時、彼は眼をしばたゝいたが、その眼は、窪んだ窩の底で、今や消えようとする瞬間の名残りの星のやうに見えた。彼は老いぼれた敵意を以て、フェルタに於ける争闘の過去、伏兵を詭計との過去、同輩の生活に對して全然侮蔑した過去を話し出した。

校長はこんな話が生徒に與へる道德的結果を恐れて、話題を變へるのが常だつた。そして老トムバが非常によく覚えてゐるフランスの話を持ち出した。

それは長い時間のかかる話題だつた。彼はその國のことを彼がその土地で生れたかのやうによく知つてゐた。ヴァレンシアがズツシエ將軍に降伏した時、彼は數千人の者と共に、大きな都ツシルウズに捕虜とされてゐたのだつた。で、彼は、數十年後の今日まで覚えてゐる恐ろしく亂暴

なフランス語を、その話の中にちよよいちよよい織り交ぜた。何といふ國だらう！そのフランスンでは男が白いフラン天の帽子を冠り、後頭部まで届くやうな襟カミをつけた色模様の上着を纏ひ、乗馬靴のやうな長靴を穿いて歩き廻つてゐた。そして女は笛袋のやうなスカートを付けてゐるが、それは女の體が全部袋入りのやうに見える程狭かつた。かう言つて彼はヨオロツパの當時の服装や習慣のことを、そのすべてが今日でも繼續されてゐると思ひ又今日のフランスがその世紀の最初の状態にあると思ひながら、語りつづけるのだつた。

彼がその思ひ出を悉く詳しく話してゐる時、校長と夫人とは熱心に耳を澄ましてゐた。すると數人の子供たちは、案外の隠れ場所を利用して教室から入り出し、人間の裡の悪魔から逃げるやうに彼等から逃げた羊の群に引き寄せられた。何故といふに皆がその羊の尾を引つ張り脚を掴まへながら、無理に前足だけで歩かさうとして、傾斜を轉び落したり、又はそのきたない背中に乗らうとしたりしてゐたからだつた。可哀さうな羊はみいみいと鳴き立て、反抗するけれど、それは何にもならなかつた。何故といふに羊飼の老人は、死んだ最後のフランス人の苦悶を喋ることに夢中になつてゐてその鳴聲が聞えなかつたのだから。

「で、何人倒れたのかね？」と、話の末に校長は聞くのが常だつた。

「百二十人だつたかな。はつきりしたことは忘れてしまひましたわい。」

それを聞いて夫と妻とはきまつて微笑を交した。この前の話の時より二十人程合計が殖へた。日が紅つに従つて彼の武勇と犠牲者の數とは増して行くのだつた。

羊の群の悲しい鳴聲が校長の注意を惹くのだつた。

「諸君、」と彼は鞭を執り上げながら腕白小僧たちを呼び立てた。「みんな集まれ。お前たちはこの晝間を遊んでをられると思ふのか？此處は勉強する場所なんだよ。」

そしてその事を例證するためには常に鞭を振り廻したが、一撃の下に、いたづら盛りの子供の群が悉く知識檻の中に追ひ歸されるのを眺めるのは愉快だつた。

「さよなら、トムベをちさん。もう二時間お喋りをしたからな。これから授業をつづけなきやならん。」

そして老羊飼ひが丁寧に立ち去つて、その物語を繰り返すために水車の方に羊群を連れて行つてしまふ間に、この學校では再びボン・ホアクインの教育の大家徴たる九九の表の歌が始まるのだ

つた。日が沈みかけると、生徒は最後の歌を歌つて、「主がその光明を以て彼等を助け給ふ」といふ理由で神に感謝し、それから又めいめに辨當箱を取り上げた。フェルタでの距離が遠いので子供たちは、一日中を學校で過すための充分な用意をして、朝家を出て来るのだつた。そしてドン・ホアクインを憎む者は、彼の好きな懲罪の一つは妻ベバの料理の不足を補ふために、その子供たちの辨當を取り上げることだ、とまで噂してゐた。

金曜日に、授業が済んでから、生徒は必ず同じ説教を聞かされた。

「諸君、——明日は土曜日です。お母さんに注意して、授業料を持つて来ないものは學校に這入れないといふことをお話しなさい。これは殊に……何々君と、……何々君とに言つて置く。」(かう言つて彼は十二三人の名を擧げるのが常だつた)「今日まで三週間、お前たちは約束の金を持つて来ないのだが、これが續けば、教育が出来ないこと、學問がこのやくざな田舎に固有の亂暴と戦ふことが出来ないことが證明されるのだ。私は何も彼も寄附してゐる、——知識も書物も。」(かう言つて彼は、妻が注意して古い抽出しから出した三冊の初學表にちらと眼をやるのだつた)「それにお前たちは何も寄附しない。よろしい、私の言つたこと、言つたことはね、——明日空手

で来る者は門を這入れない。といふことなんだ。お母さんにお話しなさい。」

子供たちは二人づつになつて互ひに手を執り、(ヴァレンシアの學校ですと同じやうに。諸君は何を想像するだらう?)、そして、ドン・ホアキンの傍を通る時に、その骨ばつた手に接吻し早口にかう繰り返してから立ち去つた。――

「さよなら、明日まで、おやすみなさい。」

校長は毎日のやうに、大道小道のための星標のやうな、小さな、水車場の辻まで彼等を見送つて行つた。そして其處で生徒の隊形は小さな分隊に分れて、平野の四方八方に散つて行つた。

「氣をつけて行くんだよ。諸君、私はお前たちを見張つてゐるんだよ。」と、ドン・ホアキンは最後の警告として叫んだ。「お前たちが果物を盗んだり、堀割に石を投げ込んだり飛び越えたりする時には、あたりを見廻すがいい。私は、何も何も私に告げてくれる小鳥を持つてるんだからな。で、若し、明日、私がその小鳥から何か悪いことを聞いたなら、早速鞭がお前たちにあたるんだよ。」

かう言つて彼はその小さな辻に立ちながら、アルボラヤの道へ消え去る最も大きい群を、ぢつ

と見送つた。

その最も大きい群は最もよく授業料を納めた。それにはバティストの三人の息子も交つてゐたが彼等三人にとつては、屢々この歸り道が、受難の道と一變してしまふのだつた。

手を取り合つて、三人の子は他の子供たちについて行かうとした。他の子供たちは皆、老バティストの隣りの農家に住んでゐた關係上、その父親がバティストとその家族とに對して抱いてゐると同じやうな憎しみを感じて、何時も彼等三人をいぢめる機会を遁さなかつた。

上の二人は自ら防禦することを知つてゐて、兎に角引つ搔いて時には勝つやうなこともあつた。が、末の子のバスクアレットは、やつと五つになつたばかりの胴の太い小さな子供だつた。母親はその愛らしさと優しさを讃めちぎつて、將來では牧師にしようと思つてゐた。で、彼は、自分の兄たちが同級の生徒との恐ろしい喧嘩に捲き込まれるのを見ると、忽ち泣き出してしまふのだつた。

上の二人は、屢々、ズボンに裂きシャツを破り、道を轉んで来たかのやうに汗と埃とにまみれて歸るのが常だつた。これが喧嘩をした證據なので、その顛末を小さな子供は涙ぐんで話した。

そして母親は上の子供のどちらかを助けるために、一ペニイの銅貨を無法な石のために出来た瘤の上に押しつけなければならなかつた。

息子たちの蒙つた迫害を聞いて、テレサは最う取り亂して騒ぎ立てた。然し、彼女は田舎生れの粗雑な、そして元氣な女だつたので、子供たちが、よく防禦して敵をよく驅逐したといふことを聞くと、又平靜を恢復するのが常だつた。

神よ！誰よりも先にバスクアレットを注意してくれ。その母親の言葉を聞いて、一番上の兄は奮然としながら、若し道で悪者たちに出合へば、そのすべてを驅逐してしまふといふ約束をするのだつた。

毎日のやうに午後、ドン・ホアクインの姿が見えなくなると直ちに迫害が始まるのだつた。

バテイストを滅ぼさうと威嚇した酒場の連中の息子だの甥だのといふ敵は、ことさらにゆつくりと歩き出して、彼等自身とその三人兄弟との距離を近寄せようとした。

然し、校長の言葉と、一切のことを見て告げるといふ憎らしい小鳥のおどかしとはまだ彼等の耳に残つてゐるのが常だつた。或者是笑つたが、その笑は口許の變なところに浮んでゐた。あの

老いぼれはさうした當籤を知つてゐるのだ！

が、更に遠ざかつてくると、その校長の威嚇も餘り効果がなくなつて來た。

彼等はきまつて三人兄弟の周圍を飛び廻り始めた。そして愉快さうに互ひに追つ掛けごつこをするのだつたが、それは、少年時代の本能的偽善のために掻き立てられた單なる惡意ある口實ともいふべきもので、その目的は、彼等二人を道に沿うて走る堀割の中に抛り込まうといふひどい希望を以て、その傍を駆けながら押しやることにあつた。

後には、この演習も成功しないといふことが解るので、彼等は、全速力で傍を走りながら、頭をびしやりと打つて急に引つ張るといふやうな手段に訴へるのだつた。

「泥棒！泥棒！」

この侮辱した言葉を投げつけながら、彼等は耳を引つ張つて走り出すのだつた。それはたゞ少し經つて引き返して同じ言葉を繰り返すためだつた。

父親の敵が捏造したこの誹謗は三人の子供たちを全く狂氣のやうにさせた。上の二人は、泣きながら樹蔭に隠れたバスクアレットには眼もくれずに、石塊を擲んだ。さうして喧嘩は大道の眞

中で始まるのだつた。

投げた石は枝と枝との間にひゆうと響きを立てて、木葉を夕立のやうに散らし、それが幹や傾斜に落ちた。戦ひの騒がしさに引き寄せられた犬は、恐ろしく吠え立てながら百姓家から駈けて来るし、女たちは戸口に出て兩腕を天に擧げながら、奮然としたやうな叫びを發するのだつた。

「畜生！悪魔！」

かうした醜聞は、ドン・ホアキンを底の底まで激動させて、翌日は、その苛酷な鞭に勢を増させるのだつた。彼の學校のことを人々は何と言つてゐたか。立派な作法の殿堂と言つてゐたではないか！

その戦ひは、誰か通りかかりの馭者がその鞭を振り廻すか、誰か大人が百姓家から棍棒を手に持つて飛出して来るかしなければ止まないのが常だつた。さうすると攻撃側の子供は、彼等自身だけになつたのを見て自らの行ひを後悔し、一切のことを知つてゐる、そしてドン・ホアキンが翌る日彼等のために用意してゐるといふ例の小鳥のことを、子供特有の急激な印象變化を以て、恐ろしく思ひながら、逃げたり散つたりするのだつた。

その間に三人兄弟は、戦ひのために受けた傷を拭きながら歸り道をつづけるのだつた。

或午後、パテイストの哀れな妻は、その小さい者の蒙つた有様を見て、天まで届く叫びを擧げた。

その戦ひは恐ろしいものだつた。あゝ！山賊！上の二人は平生通り負傷をしてゐるきりで、別に心配することは何もなかつた。が、母親が撫でるやうにして、僧正と呼んでゐた末つ子は、頭の方から足の先までびしょ濡れになつてゐた。そして可哀さうな小さな子は泣き泣き、寒さと恐さとのためにぶるぶる顫へてゐた。

亂暴な若者たちは彼を澱んだ水の堀割の中に抛り込んだ。そのむつとする黒い泥にまみれたのを上の兄弟が救ひ上げたのだつた。

母親は彼を寢床へ寝かした。可哀さうな子供はまだ彼女の腕の中に顫へながら、頸にしがみついて、羊の鳴聲のやうな聲をして呟いてゐた。――

「お母さん！お母さん！」

「神さま！忍耐をお與へ下さいまし！」

すべて、賤しい人々が、大きいのも小さいのも、この一家全體を滅ぼさうと決心してゐたのだ

つた。

七

パテイストは葬式に行くものゝやうに悲しく佗しく、或木曜日の朝、ヴァレンツァへ行く道を出發した。それは河床で馬の市が開かれる日で、彼の腰帯は、貯金の残りを入れた粗末な麻の小袋のためにふくらんでゐた。

不運は彼の家庭を絶えず流れつづけてゐた。その最後の、そして當然の絶頂は今や、その屋根が彼等の頭上に落ちて彼等を潰し殺してしまふだらうといふことだつた。何といふ人々だらう！ 何といふ土地へ彼等は這入り込んで來たものだらう！

末の子は着々と悪くなつて、母親の腕に抱かれながら熱のために顫へ、その母親は絶えず泣いてゐた。彼は一日に二度醫者を迎へてゐた。——簡単に言へば、それは十二弗或は十五弗に價しようといふ病氣で、言はば、單なる瑣事だつたのだ。

長男のパテイステエトは碌々外出することも出来なかつた。彼の頭にはまだ繻帯が捲かれ、顔に

はアルファベット模様のやうな引つ掻き傷が残つてゐた。それは、或朝、ヴァレンツァへ彼と同じく肥料を集めに行く同じ年輩の子供と大喧嘩をした時に受けたものだつた。その部落の肥料取りの者は皆パテイステエトをやつゝける聯合をしてゐたので、この可哀さうな少年は往來に出ることも出来なかつた。

次男と三男とは、大抵歸り道に受けなければならぬ喧嘩を恐がつて學校に行くのを止めてしまつた。

さうしてロセツタ、哀れな娘のロセツタは！彼女は皆の中でも一番みじめだつた。父親は家中では憂鬱な顔をして、彼女が彼女の感情をあらはしてはならぬこと、彼女の悩みが父としての威厳を侮辱するものであること、を思はせるために、険しい眼差しを彼女に投げ掛けた。然し二人きりになると、哀れな娘の悲しみを痛ましく感じるのだつた。何故と言ふに、彼も嘗ては青春の時代があり、そして如何に戀の悩みが苦しいものであるかを知つてゐたから。

一切のことがわかつてしまつた。「女王」の泉での誰知らぬ者のない争ひ以來、フェルタ中の者が、連日ロセツタと老トムバの孫との戀愛沙汰を噂し合つた。



アルボラヤの例のでつぷり肥つた屠殺者は、その傭男のトネットをがみがみと嗚鳴り散らした。あゝ、大きな悪者！今になつて彼は、何故トネットがその義務一切を忘れはてたか、何故午後時間をヂブシイのやうにフェルタ中をさまよひ廻つてゐたか、その理由を知つた。その若い紳士は、恰も彼が女を支へる財産を持つてゐるかのやうに、婚約した女に夢中になつてゐたのだ。而も、神よ！それは何といふ婚約者だらう。彼がしなければならぬ義務は、お客がその屠殺者のタイプの前で話してゐる時に、その話すことを聴くことの外にはなかつたのだ。皆は同じやうなことを言つた。——即ち皆は、彼のやうな、敬虔な、尊敬すべき、そして體重の點で少しばかりごまかすといふ一寸した缺點しか持たない彼のやうな人間が、その傭男のトネットに、噂によれば、監獄にゐたこともあるといふ悪人、フェルタ中の敵たるバティストの娘と交際しつゞけるのを許すといふことを喫驚したのだつた。

そしてこの一切が、この肥つた親方にとつては、彼の職員の不名譽だつたので、彼は、噂話をする女たちのあらゆる眩きに對して怒り散らすやうになり、そのおどし／＼た傭男を肉切庖刀で脅迫したり、老トムバに、不都合な孫息子を矯正することを説かうと試みて叱責したりするのだ

つた。

遂にこの屠殺者はトネットを解雇した。祖父の老トムバは彼のために、矢張りヴァレンシア内で、他の屠殺者の店に奉公口を見つけたが、其處では、往來でバティストの娘を待ち受けることが出来ないやうに、たとひ祭日でも、全然暇を與へてくれぬやうに頼み込んだ。

トネットはおとなしく別れた。彼の眼は、彼が屢々主人の庖丁の前に曳き出した小羊のそのやうに潤んでゐた。彼は何時も歸らなかつた。哀れな娘は、自分の百姓家に居残つて、泣くために寢室に身を隠し、その惱ましさを、いろんな心配ごとのために疲れ切つて非常にいら／＼してゐる母親や、彼女が若し新しい戀人を持へてこの部落の敵にこれ以上噂される機會を與へるやうなことがあれば殺してしまふと嚇す父親の前で見せまいと努めてゐた。

きびしく嚇すやうに思はれる哀れなバティストは、その實、何よりも、娘の慰められぬ悲しみ食慾の減退、黄色つぼい顔色と落ち窪んだ瞳とを痛ましく思つた。そして彼女は、夜も殆んど一睡しないにも係はらず努めて平然とした態度を装つた。けれども、この事は彼女が毎日規則正しく工場に通ふことを妨げはしなかつた。たゞその瞳には呆然とした光りがあつた。それは彼女の

心が遙かに離れてゐること、彼女が常に内心の夢のやうな状態に生きてゐることを示してゐた。

皆はバティストを滅亡せしめることに成功しなかつたけれど、勿論彼の上に悪意ある眼を注いでゐた。何故と言ふに、彼の家族の一員のやうになつて、貧乏のいろんな巡歴の間に、見すばらしい家具や子供たちを曳いて往來した老馬のモルツトが、この新しい、その長い勞役生活中での一番立派な厩舎に来て、だん／＼弱く又弱くなつたからだつた。

彼は最も逆境の時代に尊敬すべき馬らしく振舞つた。その頃、彼の一家は丁度この土地に引越して來たので、彼は十年間の放擲によつて荒廢し化石した畑を耕し上げなければならなかつたし町の崩れた建物から、その破片や朽木を集め歸るために絶えずヴァレンシアへよち／＼と歩いて行かなければならなかつた。食物が乏しくて仕事が烈しかつたのだ。さうして、今は、厩舎の小さな窓の前に彼のための、冷やかな、背の高い、ゆら／＼と揺れる牧草の廣い畑が擴がつて彼は香氣の高い、緑と汁との覆ひをした食卓を持ち、だん／＼に肥えて、その角張つた腰も骨のあらはな背中也圓くふくらんで來た。而も、この今になつて、勞苦と艱難との間中一家を助けた後、彼は理由もなく、恐ろく休息するといふ正しい權利を行ふためであらう、死んでしまつたのだ。

だ。

或日彼はその藁の上に横たはつて、光澤のない黄色い腫でもつてバティストを潰めながら、出て行くことを拒んだ。その腫は、主人の口邊に浮んだ怒聲と威嚇とを悉く沈黙せしめてしまつた。哀れなモルツトが人間のやうに思はれたのだ！バティストは彼の眼差しを思ひ出して泣いてゐるやうに感じた。一家全體が混亂した。そしてこの不幸は一時熱のために寢床に顔へてゐるバスケットの事を皆に忘れさせてしまつた。

バティストの妻は泣いてゐた。優しい顔を地に伏せて横たはつてゐるその可哀さうな動物は、彼女の子供が世に生れて來るのを殆んど全部見てゐたのだ。彼女は、サグントオ市場で、彼を、小さい、穢い、疵痕に蔽はれた、役に立たぬと極められた小馬の彼を、買つた時のことを、まだ昨日のことのやうに覚えてゐる。それが、今死んで行く家族の一員だつた。やがて、骸骨を艶々と磨いた骨とし肉を肥料とするところの「埋骨場」へ、この老いた勞働者の死體を運ぶために、見るからに氣持の悪い幾人かの老人が、荷車を曳いてやつて來た時、子供たちは泣きながら足を固苦しく伸ばし頭をだらりと垂れて連れ去られる哀れなモルツトに向つて、幾度も幾度も繰り返

して「さようなら」を言った。母親は一方で何か恐ろしい豫感を感じたかのやうに、腕をひろげて病氣の末つ子の上に自分の身體を投げかけた。

彼女はその小さな息子がモルツトの尾を引つ張らうとして厩舎に這入つたのを見た。モルツトはその子の悪戯を悉く、慈愛に充ちた柔順さを以て甘んじてゐた。又彼女はその小さい息子が父親から馬の固い背に乗せて貰つて、その小さな足を以て出張つた脇腹を打ちながら「立て！立て！」と、片言の子供の聲で叫んだのを見た。彼女は、この哀れな動物の死が、いづれにしても、他の者のための方向を示したことを感じた。あゝ神よ！その悲しみに充ちた母の虞れが間違ひでありますやうに。死ぬのは長い苦しみをした馬だけでありますやうに。そして、その馬が平生フェルタの往來に沿うてその小さい子供を乗せ、彼に蠶をつかませながらその身體の平衡を失はしめないためにゆる／＼と歩くのが常だつたやうに、天國への道中でも、彼を背中へ乗せて行くといふやうなことのありませぬやうに！

そして、哀れなバティストは夥しい不幸のために心を占領されて、病氣の子供、死んだ馬、怪俄した子供、溜らない悲しみに閉ざされた娘などのことで、頭の中をこつちやに亂されながら、

町の端れまで辿り着いてサアラノス橋を渡つた。

その橋の端、——ゴツク式の圓屋根と凸出した櫓と狭間胸壁の氣高い頂きとが森の上に聳えてゐる八角塔の前面にある二つの庭園の間の廣場まで來ると、バティストは立ち止つて兩手で顔を撫でた。

彼は主人、ドン・サルヴェダアの息子兄弟を訪問して、モルツトの代りとなる馬を買ひ求めるに必要な額を補ふために少しばかりの金を借してくれるやうに頼まなければならなかつた。で、清潔といふことは貧乏人の贅澤であるから、彼は髻剃りの順番を待ちながら石の腰掛けに腰を卸した。——その髻は二週間も剃らなかつたので豪猪の刺のやうに硬々と密生して、彼の顔全體を黒く見せてゐた。

高い平たい樹の蔭に、野外床屋と呼ばれてゐるこの地方の理髪店があつて、しきりに商賣を勵んでゐた。腰掛けるところが藪で作られ、使ひ古されたために腕が光つてゐる一對の椅子、上に湯が沸いてゐる持ち運びの出来る爐、怪し氣な色の手拭、客の硬い皮膚を、ぞつとする程にひどく削つて剃る鋸のやうな剃刀、——これが、この野外理髪店の商賣道具の全部だつた。

そこでは町の床屋で年期奉公をしたいといふ熱望を持つてゐる無恰好な小僧たちが、如何に腕を使ふかを學んでゐた。そして彼等が切傷を拵へたり客の額を剪み切つたり毛のない處を拵へたりすることに依つてそれを學んでゐる間に、親方は、散歩する人のために置かれたベンチに腰を掛けてお客と喋り合つたり、氣が無きさうに聞いてゐる群集に向つて新聞を聲高に読み上げたりしてゐた。

栲問の椅子に坐つた客には、その額に固い石鹼の一片が泡を吹くまで擦りつけられ、それから残忍な剃刀が始まる。而も顔中を血だらけにした客は、木石か何かのやうに切傷をつけられても不平を言はない。やがてプートル犬のやうに剃られた見榮坊の若者の圓い頭の上を、前に後に絶えず動きながら大きな剪刀カミソリが、ちやき／＼と音を響かせる。それは優美の極で、長い捲毛が眉の上まで垂れ、頭のうしろ半分が念入りに刈り込まれたものだつた。

蘭の椅子に身體を埋めて、パテイストは眼を瞑りながら、床屋の親方が、鼻にかかる單調な聲で新聞を読み上げては世間話しに精通してゐる人間らしく尤もらしい註釋をしてゐるのを、ぢつと聞いてゐた。

彼の髻剃りは非常に運がよく終つた。彼が受けたのは、三ヶ所の引つ掻き傷と一方の耳の切傷とだけだつた。普通なら、もつと餘計に受けてゐたのだ。彼は半リヤルの料金を拂つてそこを去り、サアラノス門から町に這入つて行つた。

二時間の後、彼は再び姿をあらはして、馬市の開かれる時間まで、床屋の親方の話を聞くために客の群にまちつて石の腰掛ベンチに腰を卸した。

主人は彼に、馬を買ふに入用な少しばかりの金を貸してくれた。で、今大切なことは選擇するにたしかな眼を持つこと、氣を鎮めて、ずるいチブシイたちにだまされないことだつた。そのチブシイたちは馬を曳いて彼の前を過ぎ、河床の方へ傾斜を下つて行つた。

十一時。馬市場は明らかに最も景氣のいゝ瞬間に達してゐた。パテイストの耳には、眼に見えぬ沸騰のやうな或ものゝがや／＼した響きが聞えて來た。馬の嘶き、人間の聲が河床から立ちのぼつた。彼は重大な決心を延ばしたいと思ふ人のやうに躊躇してゐたが、漸くにして市場に下りて行くことに心を極めた。

河床は例によつて水氣がなく乾いてゐた。平野に灌漑する水車や堰から遁れた幾つかの水溜り

が蛇のやうにうねり込んだりうねり出たりして、河床といふよりもアフリカの沙漠といふ方がふさはしいやうな汚れ焼けた、凸凹の土地の中に曲線を作つたり島を作つたりしてゐた。

さうした頃、あたり一面は陽光のために白く、何處にも小さな物蔭一つ見えなかつた。

白い天幕を積んで来た、百姓たちの荷車は、河床の中央に野營を作り、そして柵に沿ひ列を成して賣馬は立つてゐた。黒い、足を蹴上げてゐる騾馬は、赤い馬具に飾られて逞ましく肥えた腹をしてゐた。永久の勞役を宣告せられた奴隷のやうに強くして惨めな耕作用の馬は鈍い臆を以て通り過ぎる人々を一々眺めてゐた。恰もその中から新しい暴君を探し當てるかのやうに。又、小さく元氣な小馬は、蹄で埃を飛ばしながら鼻梁に結びつけられた輪索を引つ張つてゐた。

傾斜の近くには見切り物の動物がゐた。耳の取れた汚い驢馬だの、その着物を肉のない骨の鋭い角によつて貫かれたやうに見える惨めな馬だの、長い、鶴に似た頸をした盲目の騾馬だの、それはすべて、市場の棄たり物、勞働の破損ばかりだつた。彼等は皮膚を杖で存分に敲かれた擧句鬮牛の契約者が、彼等をこの上何かの役に立てようとする乞食かの到着するのを待つてゐたのだ。河床の中心の水流れに近く、その濕潤が青々とした芝の薄い衣に蔽はれてゐる水邊には、破損

しない仔馬が、その長い鬣を風になびかせ、尾を地上に振りながら歩いてゐた。橋々の向うに、圓い石の「眼」を通して、牝牛の群が見られた。彼等は足を止めて、飼主の投げた草をしづかに嚼んだり、氣だるさうに熱い土の上を踏んだり、緑の牧場に對して憧憬を感じたり、若者たちが柵から彼等に向つて口笛を吹く度に恐ろしい姿勢を取つたりした。

市場の景氣は次第に増して來た。競賣される一々の馬の周圍には長袖のシャツを着た、杖の鞭を手にした身振り面白く喋る百姓たちが群れてゐた。長い曲つた足をした瘦せて色の黒いチブシイ人は、補布だらけの羊皮のジャケットを着、毛皮の帽子を冠つてゐたが、その帽子の下には黒い腫が熱つぽく輝いてゐた。彼等は絶えず喋りながら、客の顔の中まで呼吸を吹つかけた、恰も客に催眠術をかけようとするかのやうに。

「だが、まああの馬を御覽なせえ！あの線に眼をお止めなされよ——え、綺麗ですぜ！」

で、そのチブシイの甘い言葉に乗らない百姓は、無言のまま、案し躊躇しながら下を眺めたり、その馬を眺めたりして、頭を掻いた。そして漸く一種頑強な精力に充ちた調子で言つた。——「結構……だが、これ以上出したくねえよ。」

條件を極めたり競賣を重々しくするために、假小屋の保護が求められて、その下に、一人の女が小さな菓子を賣つたり、粘ついた硝子のコップに、亞鉛張りのテーブルに並べた五つ六つの瓶の中味を盛つたりしてゐた。

パテイストは馬の間を行つたり來たりして、しきりに勧める賣主の言葉には耳も掛けず、自分の意嚮を占つてゐた。

何物も彼を慰めなかつた。あゝ、可哀さうなモルトよ！どんなに彼の後繼者を探し出すことは困難だつたらう！若し必要に迫られてゐなかつたならば、彼は買はないで歸つてゐただらう。

——彼はつまり、自分の注意をこれ等の不快な馬に向けることが、死んだ愛馬に對する侮辱のやうに感じたのだ。

遂に彼は一匹の白い小馬の前に立ち止まつた。それは餘り肥えてもゐず光澤もない馬で、脚に數ヶ所の疵があり、何處か疲れたやうな風をしてゐた。元氣はなかつたけれど、強くて自ら進んで働きさうに見える勞働用の馬だつた。

が、彼がその動物の背を手で撫でるか撫でないかに、彼の傍にはおべつかの馴れ馴れしい一人

のチブシイが立つてゐて、恰も彼を昔から知つてゐるかのやうな應待をした。

「その馬は掘出し物ですぜ。旦那が馬の善し悪しを御存知のことは直ぐに解りますよ。……それに。値段のことで言ひ合ふやうなことはあるまいと私は思ふね……モノオト！引き出してその馬がどんな立派な歩きっぷりか旦那に御覽に入れろ！」

で、そのモノオトといふ小さなチブシイは、馬の輪索を取つて曳き出し、凸凹の砂地の上を馬と一緒に駈け出した。哀れな動物は彼の後から不承々に駈けて行つた。恰も、餘りに度々繰り返されるこの運動に疲れ切つてゐるかのやうに。物好きな人々が駈け寄つて、馬の走るのを眺めてゐるパテイストとチブシイとの周圍に集まつた。モノオトが動物と一緒に引き返して來た時、パテイストはそれを念入りに調べた。彼は指を黄色つばい齒の間に入れたり、全身を手で撫でたり、蹄を擧げて検査したり、脚と脚との間を仔細に見廻したりした。

「見て下さい、見て！」とチブシイは言つた……。「こいつはそのために作られたやうなもんですぜ……。聖餐の皿よりも綺麗だからね。此處ぢや欺される人はおやしねえ、何も彼もあけすけにぶちまけてあるんだ。私は。あつといふ間に手細工をする人間のやうな眞似を馬にしちやゐな

いんです。こいつは前週買ったんで、その脚にあるかすり疵さへそのままでさあ。どんな歩きつぶりか旦那は御覽なすつたね。それでと、荷車を曳かせるんですか？象だつて、こいつ程の力は持つてゐませんや！そのしるしは頸を御覽になりや、わかりますよ。」

パティストは馬を検査して不満らしくはなかつた。が、不快な顔を見せようとして眉をしかめ咽喉を鳴らした。荷車曳きとしての彼の不運が、彼に馬に關する知識を與へてゐたので、彼は内心、周圍に集まつた物好き連中の二三が話すことを笑つてゐた。彼等はそのチプシイと議論しながら、その馬は埋骨場へ送るより外に使ひ道がないなどと言つてゐたからだつた。馬の悲しく疲れたやうな容子は、自分の脚で立ち得る間中屈從する労働馬のそれだつたのだ。

取極めなければならぬ間際まぎはになつた。彼は買ひたかつた。値段はいくら？

「友達のためだから、」とチプシイは、彼の肩を愛撫するやうに敲きながら、「又、この掘出し物の馬を可愛がつてくれさうな旦那のやうないゝ人のためだから、さうさ、四十弗どんで手離すとして取引をしませう。」

パティストはその掛値を平氣な顔をして聞いた。さうした掛引に慣れ切つた人のやうに。そし

てずるさうに笑つた。

「成程、何しろ相手がお前さんのことからだ、私もひどく負けろとは言ふまい。二十五弗どんではどうだね？」

チプシイは芝居がかりの憤怒を見せて兩腕を前に伸ばし五六歩後退りしながら毛皮の帽子に手を掛けて、彼の驚きをあらはすために、あらゆる種類の突飛奇怪な身振りをした。

「おゝ！二十五弗どんだつて！だが馬をお前さんは見たのかね？盗んで來たものにしてもそんな値段ちや賣れませんよ！」

然しパティストは、いくら相手が突飛な言葉を弄しても常に同じ返事を繰り返した。

「二十五弗どん、これ以上は一文も出せないよ。」

チプシイは五度も六度も説き勸めて、それに疲れた學句最後の議論に退却してしまつた。

「モノオト……馬を曳き出して……旦那によくお見せするんだよ。」

そしてモノオトは再びさうした散歩の一切に益々疲れた馬の輪索をつかんで曳き出した。

「え、歩きつぷりはどうです？」とチプシイは言つた。「この馬は王子ぢやないかね。それが旦那

には二十五弗の値打ちしかないかね？」

「一文も駄目、」と頑固なパテイストは相變らず繰り返した。

「モノオト……歸れ。それで澤山だよ。」

そして憤怒を伴いながら、チブシイは買手の方にくるりと背中を向け、さうすることに依つて、この取引の一切を打ち切つた。ぞといふ風を見せた。が、パテイストが本當に立ち去らうとするのを見ると、彼の眞剣さは消えてしまつた。

「さあ、旦那……お名前は何とおつしやるんで……あゝ！では、御覽なさいパテイストさん、私が旦那を好いてること、旦那にこの掘出し物を譲りたいこと、他の誰にもしなかつたことを旦那のためにして上げようとしてることがお解りになりますよ。どうです、三十五弗ではどんなもので？さあ入らつしやい、よしとおつしやい。旦那の生涯に賭けて誓ひますぜ、私の親爺にもこんなによくはしなかつたつてことを。」

この百姓が無理強ひても動かないで、乞食のやうに二十弗だけ餘計に出さうと言ひ出したのを見たので、今度のチブシイの抗議は、前よりも勢もよく、身振りも澤山だつた。——こんな馬の掘出

し物がもつと好きにならないのか？だが生きた人間が、この値打ちを見る眼を頭の中に持つてゐないのか？さあ、モノオト、も一度曳き出して見ろ。

然しモノオトは再び疲れる必要はなかつた。何故といふに、パテイストは取引を諦めた風をして立ち去つたからだつた。

彼は市場中をぶら／＼して他の馬を遠くから見て廻つた。が、常に流し眼で例のチブシイの方を眺めやてゐた。チブシイの方でも同じく無頓着を装ひながら彼の姿を眼で追ひながら瞞めてゐた。

彼は買はうといふ氣もしない大きな逞ましい、つや／＼した馬に近づいて行つた。その素晴らしい値段は幾らだらうといふことを想像しながら。彼は片手でその馬の背中を撫でて見た。と、その時、彼は顔に熱い呼吸を感じて、例のチブシイがかう呟く聲を聞いた。

「三十三……旦那のお子供衆の生命に堵けて、厭とは言はないで下さい。私の言ふことは尤もぢやないかね。」

「二十八弗。」とパテイストは横に向きもしないで言つた。



彼はその美しい動物を讚美することに疲れて、今度は何かをしてゐるために、驢馬をよちくと曳いて行く百姓婆を眺めつゞけた。

初めのチブシイは又自分の馬のところに戻して彼を遙かに眺めてゐたが、呼び寄せるものゝやうにその輪索を振つた。パテイストは呆然とした風を装つて、色とりくゝの動かすことの出来る圓屋根のやうな、町の女の日傘が過ぎて行く橋を眺めやりながら、彼の方にゆつくりと近づいた。

それは正午で、河床の砂は焼けて来て、柵の間の空地には微風一つ吹かなかつた。その熱い、粘り空気の中に、太陽は垂直に、皮膚を貫き唇を燃して落ちて来た。

チブシイは數歩パテイストの方に進んで手綱の端を差し出した。それは所有權を渡すといふやうなものだつた。

「旦那の言ひ値でもなく私の言ひ値でもない、三十弗だ。神様は私がこれで一文の得もしてゐない事を知つてらつしやるんだ。三十……厭だと言つたら私は怒りますぜ、さあ、其處に置いた！」  
パテイストは手綱を取つて、片手を賣手に差し出した。賣手は感情を籠めてそれを握つた。取

引が終つたのだつた。

パテイストは彼の腹を不消化な肉のやうにふくらましてゐる多額の貯金全部を腰帯から出し始めた。主人が貸してくれた紙幣、數枚の銀貨、紙にくるんだ一握りの釣錢などもあつた。勘定が済んでから、彼はチブシイと一緒に小屋に行き、彼に酒を吞ませて、モノオトに、その駈足の勞に酬いるため數ベニイの金を與へることを通れることが出来なつた。

「旦那はこの市の寶を持つて行くんですぜ。あなたにとつては運のいい日ですね、パウテイスタさん。あなたが右の手で十字を切つたから、マリア様が見に出て來られたんだ。」

そして彼はチブシイのもてなしの第二杯目のコップをも乾さなければならなかつた。けれども最後に、相手の追従と阿諛との急流を切り抜けて、彼は新しい馬の手綱を取り、親切なモノオトに助けられながらこの駿馬の馬具なしの背中に乗つて、騒がしい市場を速足を以て立ち去つた。

彼はその動物に充分満足してゐた。彼はその目を無駄にはしなかつた。可哀さうなモルツトのことも殆んど忘れてしまつて、彼は、橋の上や路上で、誰かフェルタの者が振り返つてその白い駿馬を眺め入る時には、持主としての誇りを感じるのだつた。

然し最も大きい満足は彼がコペの居酒屋の前を通るときに來た。彼はそれが由緒正しい名馬でもあるやうに急に彼に傲慢な小刻みの早足をさせた。そして彼はビメントオを始めフェルタ中の怠け者が、どんな風に戸口に現れて彼を見送つたかを見た。悪者め！今や彼等は自分を潰すことがむづかしいといふこと、自分の一本立ちの努力が自分自身を守り得たことを知つたらう。自分が新しい馬を持つたことを今彼等は見た。若し家庭内に唯一つ厄介なことがあるとすれば、それも容易に處理することが出来るのだ！

彼の高い青々とした小麦は、道傍に近く小やみなき波の湖のやうな状を成してゐた。紫のうまごやしは茂りに茂つて、馬の鼻を擡げさせるやうな香氣を漂はしてゐた。パティストはその土地の不平をこぼすことは出来なかつた。が、彼が不幸に出會ふことを恐れてゐたのは、家庭内に於てどあつた。その不幸は、彼に爪を立てようと待ち設けつゝある、彼の生涯の道筈れだつたのだ。馬蹄の響きを聞いて、パティストは繻帯した頭のまゝ出て、馬を掴まへようとして駈けて來た。その間に父親は馬から降りた。子供は新しい馬に夢中になつて、撫でたり、唇の間に手を突つ込んだり、熱心のあまり背中の中の乗らうとして片足を鐙に掛け、尾を握つて、アラビア人の素

早さを以て、その馬の尻に登つた。

パティストは家に這入つた。壁は輝き、いろんな家具は皆そのあるべき所に片付けてゐて例の通り白く清かつたが、それは清く輝やかしい墓場の悲しみに包まれてゐるやうに思はれた。

妻は部屋の戸口に出て來た。眼は赤く腫れ髪は亂れて、その疲れた面影の中には、彼女が過した長い眠れぬ幾夜さが示されてゐた。

醫者が今歸つたばかりのところだつた。例に依つて望みは乏しかつた。彼の態度は不氣味で、物を言ふにも半ば口の中で呟くやうだつた。そして子供を一寸診察したばかりで、新しい處方を残さずに歸つて行つた。が唯、馬に乗る時に、夜になつて引き返して來るからと言ひ残した。子供は、だん／＼に痩せ細る小さな肉體を喰ひつくすばかりの熱を保つて同じ状態を續けた。

それは毎日同じことだつた。彼等は今は皆その不平に慣れて來た。母親は機械的に泣き、他の者は悲しい顔をしてお極まりの仕事に取りかゝつた。

夫が歸つて來た時、事務的な頭を持つたテレサは、夫にその旅行の結果に就いて訊いた。彼女は馬を見たがつた。そして惨めなロセツタさへも戀の悲しみを忘れて、その新しい得物のことを

訊ねた。

皆、大人も子供も、厩舎の馬を見るために裏庭に行つた。パテイステエトは夢中になつて馬を連れて来た。末つ子だけは寢室の大きな床に放擲されたまゝ、悶掻き廻つて、病氣の眼を眩り、弱々しく「母さん！母さん！」と泣いてゐた。

テレサは夫の取引を、鹿爪らしい顔つきをして検査した。その馬が三十弗どんの値打ちがあるかを詳細に亘つて計算しながら。娘は新しい馬と楽しい記憶のモルツトとの差異を探し出した。そして、二人の息子は、突然の確信を以て、その尾を引つ張りその腹を敲いて、その白い背中へ乗せてくれとしきりに兄にせがみ立てたが、聞き入れて貰へなかつた。

誰も彼も明らかに、この家庭の新しい一員を楽しんでゐた。その新しい一員は變な風に馬槽を舐いだ。恰も或痕を死んだ同僚の或はるかな臭氣をでも發見したかのやうに。一家族の者は晝食をしてゐた。この新しい得物に對する興奮と狂熱とがどんなに大きかつたかは次のことでも解るだらう。パテイステエトと弟とは幾度も食卓から抜け出して、馬に翼が生えて飛んで逃げはしないかと心配してゐるらしく、行つて厩舎の中を見るのだつた。

その午後は何事も起らないで過ぎた。パテイストは、耕さないで置いてゐた土地、野菜の收穫に用意して置いた土地の一部を耕さなければならなかつた。で、彼と息子とは馬に道具をつけながら、彼の従ふ柔順と彼の鋤を曳く力とを惚れ／＼と眺めた。

夜になつて、彼等が歸らうとする時だつた。テレサは家の戸口から悲鳴を擧げて彼等と呼んだその聲は助けを求める者のやうだつた。

「パテイスト！パテイスト！——直ぐに来て！」

で、パテイストは妻の聲の調子とその荒々しい態度——何故と言ふにの女は髪を振り亂して呻いてゐたから、——とに喫驚して、畑地を駈け出した。

子供は死にかけてゐた。それを信じるためには、ただ彼を見なければならなかつた。パテイストは寢室に這入つて寢床を覗き込み、冷たい戦慄が彼の上を過ぎたことを感じた。それは誰かゞ冷水を背後から注いだかのやうな感覺だつた。哀れな小さな「憎正」は身動きも殆んどしなかつた。駢するやうな呼吸は苦しさうに喘ぎ、唇は紫色に變り、眼は殆んど閉ぢて眩つて靜止した瞳を見せてゐた。それは最早視力のない眼だつた。小さな紅顔は、死の翼がその影を投げたかの

やうに、不可思議な悲しみに依つた暗くされたやうに見えた。彼の顔中でたゞ一つ明るいものは枕の上に、縮れた絹糸の束のやうに垂れてゐる金髪のみで、それに蠟燭の焰が變な風に輝き映えてゐた。

母親の呻きは絶望的のものでつた。狂氣した獸の鳴聲のやうだつた。息子は吸り上げて彼女を遮らなければならなかつた。それは、彼女が小さな者の上に自分の身體を投げ出さないやうにするため、又、彼女が自分の頭を壁に打ち當てないやうとするためだつた。戶外では、弟たちが泣いてゐた。が、彼等は母親の嘆きに脅かされたかのやうに、強ひて這入つて來なかつた。そして寢床の傍にはバティストが呆然として、拳を固め、唇を噛みながら、生命の支持物とも言ふべきものを諦めようとして、それ程の悲しみ、それ程の戦慄に價するところの、末つ子の形骸に眼を注いでゐた。その巨人の冷靜、その神経的に瞬く乾いた眼、子供に向つて俯した頭、それは母親の嘆きよりも、もつと痛ましい印象をさへ與へたのだつた。

不意に彼はバティストエトが彼の傍に立つたのに氣付いた。彼は母親の叫聲に驚かされて彼の後を尾けて來てゐたのだつた。バティストは息子が馬を畑の真中に放擲し、そして、その少年が

厩舎に馬を返さうとして、涙を拭きながら駈け出して行くのを見てかつとなつた。

間もなく、新しい悲鳴がバティストを、その呆然とした境地から呼びさました。

「お父さん！お父さん！」

それはバティストエトが、農家の戸から彼を呼び立てゝゐるのだつた。父親は、何か新しい不幸が湧き起つたことを豫感しながら息子の混亂した言葉が何のことや解らずに彼の後を追つた。

「馬が……可哀さうな白馬が……倒れて……血に染まつて……」

さうして、數歩の後に、彼は愛馬が、未だ鋤をつけたまゝ、然し起きようとしても起きることが出來ないで、頸を差し伸べ、物憂く鳴きながら、脇腹を下にして倒れてゐるのを見出した。その傍ら、前足の片方に近く、黒々とした液が、鮮やかに開いた溝に浸みながら、ぼたぼたと滴れてゐた。

彼等部落の者がこの馬を傷つけたのだ。恐らくこれは死ぬるだらう。神よ！彼が自分自分の生命と同じく必要とし、例の主人から金を借りるに價したその動物は死んで行くのだ。

彼は誰の仕業か、それを見るかのやうに周圍を見廻した。黄昏の光りの中に紫色を帯びてくる